

浄瑠璃通解

第五編

目次

- 木下蔭狭間合戦……竹中砦の段
木下蔭狭間合戦……壬生村の段
釜淵双級巴……釜煎りの段
三日太平記……松下住家の段
日吉丸稚櫻……五郎助住家の段
繪本太功記……本能寺の段
繪本太功記……肩注進の段
繪本太功記……夕顔棚の段
繪本太功記……尼ヶ崎の段

竹本攝津大椽 贊助
山本彌太夫 著
山本九馬亭

淨瑠璃通解

第五編

東京博文館藏版

淨瑠璃通解第五編

目次

木下蔭狹間合戦……………竹中砦の段……………	一
木下蔭狹間合戦……………壬生村の段……………	三〇
釜淵双級巴……………釜煎りの段……………	五三
三日太平記……………松下住家の段……………	六八
日吉丸稚櫻……………五郎助住家の段……………	九三
繪本太功記……………本能寺の段……………	一一一
繪本太功記……………局注進の段……………	一三〇
繪本太功記……………夕顔棚の段……………	一六九

繪本太功記……尼ヶ崎の段……一七六

目

次終

淨瑠璃通解第五編

山本九馬亭 著

竹本攝津大椽

竹本彌太夫 贊助

木下蔭狹間合戦 竹中砦の段

總解

此段は、美濃齋藤家の謀臣。竹中半兵衛重治を主人公とし。今川義元が討たれたる。桶狹間の合戦を取合せて。趣向を立てたるものなり。眞書太閤記。繪本太閤記の二書。否重に繪本太閤記によりて。作れるものゝ如し。

前田犬千代が。奥局芳野に通じて。信長の勦氣を蒙れるを。藤吉郎の執なしにて。桶狹間の戦功に面じ。赦免を得たりといふ事。信長

齋藤龍興と兵を搆へしが。竹中の謀計によりて。破られしゆる。藤吉郎竹中の閑居栗原山に至り。師弟の契りを結び。利害を説きて。洲股に。隱退せしめたりといふ事等を本にて。犬清竹中の娘に忍びて子をうませ。當吉其子を母衣の中に入れて。桶狹間に戦ひ。義龍が首を獲。犬清當吉の旨をうけて。竹中の砦に自害し。遂に忠義にかたまりし竹中が。孫の恩愛に引かされて。栗原山へ隱退するやう作れるなるべし。

作の據所と思はるゝものを。一々引きたらんには。頗る長く頗る煩しきゆる。左に其主要なる四五を掲ぐ。これを讀みて本文に及ばゞ。何事も明かなるべし。

信長の小性頭に前田犬千代。さしも強勇の壯士なりけれど。人木石にあらずして。愛着の情はなれがたく。奥局の中に芳野といへる女を垣かかまみ。戀の山路の道しるべなく。命も今は絶えな

んと。人傳ならでかきくどく。數の玉章たま〜に。一夜は逢ふ
瀬の情けをと。昨日も今日も翌の日も。逢はぬをかこち見ぬを
恨み。つらき思ひに沈みければ。女も今は心解け。繁き人目を忍
びつゝ。深き契りをこめにける。此頃山淵九郎次郎。未だ清洲に
ありけるが。犬千代が芳野に密通せし事を聞き。茶道祐甫を以
て。犬千代が不義を訴ふ。信長大に怒りて。犬千代を勘當し。永く
暇を賜はりける。(繪本太閤記)

前田孫四郎(犬千代)只一騎。勝ほこつたる今川勢の眞中へ槍を
入れ。弓手馬手に突たて〜。其勢ひあたかも龍の雲に乗じ。虎
の風に向ふが如し。朝比奈備中守の組下なる。遠州濱名の矢戸
彌五郎友辰と名乗りて。前田と槍を合せけるに。矢戸が槍前田
が股に中るといへども。薄手なれば事ともせず。槍をばなげて
太刀を抜き。矢戸が冑の眞向をしたゝかに打てば。さしもの彌

五郎眼くらみて。少し猶豫しける處を。前田つけ入り槍を引奪ひ。只一突に突落し。やがて首をば取つたりけり。今川勢多けれども。前田一人に突立てられ。少ししらけて見えけるに。江間左京と名乗りて馬を飛ばせ。前田に突いてかゝる。前田ちつとも疑議せず。江間を引付けて縦横に突合ひけるが。遂に江間を突伏せて首を取る。此日一日の戦に。前田一人に討たるゝ者夥し。殊に槍下の首十七を取りしとて。敵も味方も一同に。目をおどろかして感じけり。(眞書太閤記)

木下藤吉郎。今川方の名ある勇士が首。十八九實驗に備へ置き。謹んで申しける。前田犬千代御勘氣を歎き。今度の合戦に討死と心を定め。多く大敵に當り死戦すれども。敢て敵する兵一人もなく。悉く討取り献覽に備へ奉る。今度當家勝軍の御悦びに伏して望む。願くば犬千代が勘氣を御免なし下さらば。欣んで

忠を盡すべしと言上しければ。信長大に悦び給ひ。犬千代が罪は小にして。此度の譽れは大なり。氣味よき若者。勦氣を着し遣す間。元の如く給仕すべしとて。犬千代を召し出され。前田孫四郎利家と名乗らせ。士卒を預け。一方の將たるべしと仰渡されければ。犬千代涙を流し。恩を謝して退出す。(繪本太閤記)去る程に。信長の先陣柴田佐久間。鯨波きまをつくつて討つてかゝれば。齋藤方の先陣。牧野牛之助野木治左衛門。三千餘騎かけ向ふて戦ひしが。偽り負けて引退く。柴田佐久間軍を進めて追討つ所に。加納村にて竹中半兵衛。一千餘騎討つて出で戦ふたり。柴田等竹中が小勢を侮り。只一もみにと打つてかゝれば。竹中さんくに敗北して。其騎四方に散亂す。柴田佐久間深入りせしと心づき。退かんとする所に。左右の丘より弓鐵炮を放つこと。雨よりも繁く。牧野野木竹中三千餘人。村口をふかき切所に

支へ。餘さじと取巻きたり。柴田佐久間前後左右に敵を受け。大に驚き。前に突き後に突きても。出づる事能はず。既に危く見えける處に。織田の二陣森池田。先陣圍れたりと見てければ。二千餘人眞一文字に切つてかゝる。齋藤勢は左右に分れて道を開く。森池田何とやらん軍のさまあやしけれど。柴田佐久間を救はん。とかけ通つて先陣と一つになれば。齋藤勢引包んで打取らんと。次第くゝに押寄せて。網中に入りし魚のごとく。あきれば果たるばかりなり。(繪本太閤記)

信長は。味方の先陣二陣。敵の謀計に當りけりと見給ひたれば。旗本の勢を下知して。救はんとし給ふ時。木下藤吉郎大將の馬前に塞がり。味方己に敵の謀に落入りたり。引かへし退き給へと。いまだいひも終らざるに。相圖と覺えて耳元に鐵炮響きて。數千の伏兵一同に起り。日根野備中守眞先に馬を出し。八尺餘

りの鐵炮を提げ。信長を討とれとて。當るを幸ひ。擁立てれば。信長の軍勢。討たるゝ者數を知らず。此時藤吉淺野彌兵衛に下知して。搆へ置いたる。莚の旗にて。高き岡より。差招けば。瑞龍山の峰々より。數千の旌旗空にたなびき。數多の軍勢。稻葉山の本城へ。押寄すると見えければ。謀士竹中を始として。日根野牧村野木の輩大に驚き。備へ亂れて見えけるを。信長勢得たりかしこと。取つて返して。戰ふにぞ。齋藤勢大いに亂れ。散々になつて。敗走す云々。(繪本太閤記)

此時竹中は。栗原山に閑室を搆へ。隱居して。竊に世の治亂を見る。藤吉郎形を變へ名を隱し。竹中が居所に至つて。一宿を乞ひ。互に武術兵談を論じ。其旨趣甚だ細かなり。時に藤吉問て曰く。當時尾州の大守織田信長は。仁勇にして。大度ありと聞けり。我れ行きて仕へんと欲す。足下の心はいかかん。竹中眼を見開き聲

を勵まし。汝猿面の小冠者我前に來つて。猥りに説客をなすことなかれ。我れ未だ汝が面を知らずといへども。信長の家臣に木下藤吉郎といへるものありて。其面猿の如く。聰明にして頗る軍事をよくすと聞けり。前刻よりの軍談兵話。尋常の論にあらず。我れを説いて信長に降らしめんとする。汝は果して木下藤吉郎にてあるべしといふ。藤吉莞爾として。嚴察の如く某は木下藤吉なり。足下王佐の才を抱き。父を殺し。君を弑する。齋藤に仕へ。剩へ金言耳に逆ひ。良計は用ひられず。土木に同じく朽果つるは。大丈夫の所行にあらず。主人信長。足下の大名を慕ふこと既に久し。暗々たる齋藤を捨て。明々たる織田を助け。治國平天下の功を全ふし。遠くは父母の名を顯し。近くは英名を身に及ぼし。子孫をして永く富貴を受けしめんこと。人道の大旨ならずや。我れ足下の爲めに此利を説く。詳かに察し給へとい

ふ。此時大澤治郎左衛門も同じく來つて利害を説いて。信長に力を添へ給へとすゝむ。竹中大に歎息して。我れ其利害を知らざるにあらず。いかせん織田は功業の氣既に盛にして。良臣多くこれを助く。齋藤は亡國の象顯はれ。君暴にして臣佞なり。已に亡びん事旦夕にあり。我れいやしくも其食を喰み其祿を受け。國陷るの時に至り。棄て他國に仕へんこと。これ又大丈夫の耻とする所にあらずや。國家亡へば我れ死なんのみ。何ぞ改め論ずる事をせん。藤吉郎席を立つて。禮をうやゝしくし。足下の高義感嘆少からず。再び降を進めまじ。爰に某が願ひあり。我れ幼稚にして卑賤なり。師によつて學ぶ事なし。足下幸に世事に預らず。此所の閑居を洲股の城中に移し。我が師父となつて教導なし給はゞ。生前の本望何事かこれに如かん。見るく齋藤の家。織田の爲めに亡ぶべし。我れ師父の爲めに計つて。齋

藤の子孫を全ふし。祭祀斷絶する事あるべからず。爰に於て竹中大に喜び。信長へ降り計策を献ずるにあらず。汝を教導せん爲め。閑居を洲股へ移すべしと。直に洲股の城に入りけり。これ藤吉郎が計策にて。竹中智謀絶倫の士なれば。齋藤の爲めに計略を廻らさば。美濃征伐難儀なるべし。信長に仕へて助けずとも。齋藤家を見つがづんば。美濃を伐つ事やすかるべしと。さてこそかくははからひける。

此淨瑠璃は。寛政元年二月廿一日。北堀江座の興行に上せしものにて。作者は。若竹笛躬。並木千柳。近松余七。

木下蔭狭間合戦

竹中の岩段

「曲れる杖を直きに撓め」

官兵衛の剛直、よく人の曲

れるを撓め直すまいふ、荷

手の勸學篇の始めにも、か

くの如き語見たり、

「木は木と分くる竹中」木

に竹をつぐといへる諺より

書く、理非明白に無理なき

ないふ、此書出しの句、竹

中の語につきて、無理につ

くれるやの感あり、

「風があたれば云々」切

疵などに風あたれば、破傷

風となる、

「拳」は腕前の意、

「女郎」は女童の轉訛に

て、女を罵り呼ぶ語、

「色」寄來る煩惱の犬清」

前をうけて面白くいひた

竹中岩の段

内こそ切なけれ。曲れる杖を直きに撓め。木は木と分くる竹中

官兵衛重晴。手傷に屈せぬ丈夫の顔色。刀を杖に立出づれば。

怖々ながら娘は差寄り。詞暑氣の頃とは申し乍ら。風が當れば

御養生の支障。御用も有らば御病架へ。何故お呼遊ばしませぬ。

ナニサく。拳未熟の弱敵原が錯矢。是式の微傷。いつかな屈せ

ぬ某なれども。強て保養仕れとの主命。據無の引籠り居る折を

窺ひ。親も赦さぬ密會。不届至極の女郎奴。椽の下に這屈む。

色に寄來る煩惱の。犬清とは名に相應。サア爰へ出よ童奴と。

云れて二人は氣も消えく。云合さねど一時に。汗の淵なす心

地なり。思案極めて犬清は。目通りへつと出で。詞御存知の

上は秘むに及ばず。敵々と隔てし中。御目を掠めし此身の不義。

も門にしのぼん」と菩提之鹿招不來、煩惱之犬逐不_レ去より出でたる語なるべし、

「此犬清」が官兵衛の女と密通せるやう作れるは、大千代奥扇芳野と密通して信長の勘當をうけたる由、繪本太閤記に見わたるより書ける趣向なるべし、

「わづば」は、わらは(童)の音便にて、若輩者を罵り呼ぶ語、

「兩腰くわらりと投出す命」とかけたり、

「小田春永」は繪田信長に當つ、

「齋藤義龍」 齋藤道三土岐頼藝を逐ひ、其妾を妾とす、妾姪めるあり、男兒を生む、即ち義龍之なり、義龍長して武勇、衆心を得て道三を逐ふ、永祿四年五月

お手討は覺悟の前。抵抗致さぬ御存分と。兩腰ぐわらりと投出す命。わるびれもせず座を占むれば。警りと見遣り。ハテ健氣の一言。助け置けば。一方の攻口持ち兼まじき若者。春永に勘當受けしは幸。義龍公に奉公し。官兵衛が響とならば。小田が

家にて莫大の。所領に勝る武名の響。否か應か。サア分別して返答せよと。和く詞に千里はいそく。詞今迄案じた父様の御機嫌直り。女夫にせうとは夢では無いか。ユレ申し思案所か。お受申して下さんせ。やいのくとしども無き。娘心ぞ道理な

る。犬清は只默然と。暫し詞も無りしが。以前に手に入る笠印懷中より取出し。詞平家支流の春永公へ仕ふる故。濃紅の某が笠印に。望むらくは官兵衛殿の姓名を書記し。春永旗下の武士となしたき我念願。御所存如何にと云せも立てず。ム、當時尾濃兩國に於て。此竹中に左程の事。云はんず者覺え無い。一器

卒す、年三十五、されど、竹
中半兵衛が仕へしは、義龍
の子の龍興なり、

「笠印」は兜の笠印の鑑
につくるしるしにて、布帛
等種々の製あり、後には袖
につくるをも、笠印と稱す
る事、誤りなる由、貞丈翁

はいへり、なほ別記を見よ、
「平家支流の春永」織田
信長は、平相國清盛の嫡孫、
三位中將資盛(重盛の子)より
十九代の末孫にして、備
前守信秀の子なる由、眞書

太閤記に見たり、
「夫にさへ心を奥に」と
かけたり、

「左枝犬清」は前田大千
に當つ、

「上る書院の縁椽をかく者
と縁者」たくみにすぎて
いやらし、縁者をうけて「因
みも厚き式臺」といへり、

量有る底意の程。尋ね問ふべき子細有り。ヤイ娘。用事有らば手
を鳴さん。次へ立てよと會釋無き。父が詞に否應も。云れず云は

ぬ夫にさへ。心を奥へ立つて行く。跡打見遣り聲を潜め。詞若
年乍ら音に聞いたる左枝犬清。色に引れ此砦へ。入來らんやう

有るまじ。所存秘ます物語らば。咎むるは武士の表。娘の縁に
繋がる其方。一方ならねば心置かず。我存念も云聞さん。イザ先

づ是へと睦じく。初に變る重晴が。詞に辭する色目無く。上る
書院の縁者と縁者。因も厚き式臺に。作法正しく座に直る。犬

清威儀をかい繕ひ。詞御賢察の如く。此砦へ入込みしは。全く
息女の色香に迷ふ某ならず。折入つて官兵衛殿へ。頼入れたき

一大事と。云はんとせしが四邊を見廻し。詞戰國の人心。迂濶
に口外なし難き密談。御推察下されよと。猶豫ふ氣色見て取る
重晴。詞尤左こそ有るべき事。他言せまじき勇者の潔白。只

書院は客殿の稱、前にいへり、式臺は客を送迎する玄關の板敷、

「朱を奪ふ紫」 論語「惡紫之奪朱也」の句より書く、昔の紫は今と異り、頗る朱に近き色なりしとぞ、

別記を見よ、

「姓は即ちアノ藤原」 齋藤は藤原氏なり、こゝの謎作者が頗る苦心になれるを見る、

「落花枝にかへらす」 五燈會元「落花離上枝、破鏡不重照」守武の句に「落花枝にかへると見れば胡蝶哉、」

「金打」 は誓ひの意、委しくは前にいへり、

「蝸牛と争ふ」 小ぜり合ひの意に見てよし、蝸牛角上の争ひといひて、もと莊子より出でたり、委しくは

今見せんと最前の。筈拔取り庭先の。松が枝傳ふ藤葛の。花を

目當にはつしと打つ。手練に落散る紫藤の莢。犬清屹度打瞻り。

詞ム、赤色は小田の旗色。朱を奪ふ紫は。武勇銳き齋藤氏。姓

は即ちアノ藤原。落花枝に歸らざる。官兵衛殿の花の金打。底

意も知れて安堵の上は。様子秘ます申上げん。詞扱も去ぬる天

文十九年の頃よりも。蝸牛と争ふ小田齋藤。遂に執合ふ干戈の

動き。去年の冬より領地の境。洲股川に對陣し。勝負は互角と

見えたたる所。貴殿の下知にて美濃路の兵。此三州より取圍み。

驚津丸根を始として。味方の砦を打破られ。残るは丹下中島兩

所。詞爰ぞ主人の御陣所なれど。矢種兵糧玉薬も。至つて乏し

き小勢なれば。敵の多勢に比べては。巖に玉子を打つが如し。

一ツの頼みは官兵衛殿。何卒主君春永に。御味方下さらば。百

萬騎の勇兵にも。をさく劣らぬ貴殿の軍略。御許容願ひ奉る

志度寺の段を見よ、
「干戈の動き」。は戦ひを
なすをいふ、干はたて、戈
はここのこと、

「洲服川に對陣し云々」竹

中半兵衛の謀計にて、織田
勢の破られし由、眞書太閤
記繪本太閤記などに見ゆ、
これより書けるなるべし、

「互角」。は牛角とも書く

牛の角の如く、相對して負
け劣らぬをいふなるべし
「露津、丸根、丹下、中島」織
田信長、今川勢を防ぐん爲
め、丹下、善祥寺、露津、丸
根等、セケ所に營をきづき

し由、眞書太閤記に見ゆ、い
づれも今川義元がうたれし
尾張知多郡桶狭間のほとり
なり、

「玉薬」。は鐵炮の火薬、
「殿に玉子をうつが如し」

菊千蔵兵衛「以、築詐、變、

と。退つて頭を下ければ。詞ム、スリヤ春永は小勢にて。丹下

の砦に籠り居るとな。サ、其御主人へ犬清が。勘當御免の願の

綱。結ぶか切るかは足下の胸中。ム、ウ智勇兼備の名將と。聞

しに違ふ春永が度々の敗軍。必定奇計や有らんかと。心迷ふて

主人の出馬を留めしが。味方の銳氣に聞怯して。敵勢過半落失

せたる。兩所の砦は明城同然。今こそ疑念散じたり。防戦の用

意せよ。者共やつと呼はる聲。思ひ寄らねば母娘。共に驅出で

ヤア何事。詞出勤御免の御病中。防ぎの用意と仰しやるは。チ

、敵の空虚を義龍公の御本陣へ。告報せん仕度じやわい。ヤア

くく。スリヤ最前の花の金打。謀計で有つたよな。チ、兩

家雌雄を争ふ時節。表裏の金打誠と思ふか。何ぞや娘が縁に頼

り。我を味方に付けんとは。猪小才な小童と。見透す如き官兵

衛が。一句に逆立つ無念の切齒。詞主君の勘氣免されんと。一

「譬之者」以「卵投石」
「結ぶか切るか」 綱をう
けていへり、

「防戦」の語、進撃の場合
に穩ならず、二字を分ちて
解けば、辯護し得べけれど、
其必要もなかるべし、隨て
「防ぎの用意」の語もをかし
雌雄」 は勝敗の意。

「表裏」 はうらおもてあ
る事にて、いつはりのこと、
「猪小才」 は、なまいき、
こごかしき、こしやくな、な
どの意、ちよほすこしをい
ふ俗語なるべし、

「逆立つ」 は怒りのさま
ないふ、
「勘氣」 は勘當の意
「烽火臺」 はのろしを上
ぐる臺、
「弓手」 は左の手、弓を
持つゆゑの稱、

圖に逸つて味方の大事。我舌頭に引出せし。小田の滅亡今此時。
へエ、是非も無や口惜や。犬清が一世の不覺。恨の鋒先受取れ
と。すはと抜いて駈向ふ。中を隔つる女房關路。マアく待つ
てと身を惜まず。繼る千里を突退け刎退け。斬込む刀を透さぬ
重晴。躲して利勝駈かと執り。詞手傷は負へども汝達が。手に
及ぶべき某ならず。命は助くる早歸れと。刀奪つて遙に投退け。
詞味方へ示す相圖の狼煙。報せは恚うと件の白刃。目當は庭先
烽火臺。丁と投ぐれば筒口へ。石火うつると見えたるか。狼煙
空に立上り。残る砦も一時に。合す煙は豫ての要害。手筈を見
るより南無三寶。最う是迄と犬清は。差添逆手に弓手の脇腹。
ぐつと突込む必死の深傷。喃悲しやと千里は駈寄り。餘り我強
い父様の。お心一つで此御最後。母様爲様は無い事かと。繼り
歎けば母親も。詞チ、道理じやく。日頃戀しい床しいと。案

「あはれを知るは武士の」
 武士はものゝあはれを知る
 といへるより書く、
 「五星をかみがみる」は
 天文を見るなり、五星は木
 火土金水、
 「味方は北方炊爲水云々」
 美濃は尾張の北方、北方は
 易にて坎の卦、坎を水と爲
 す、三更は夜の十二時、即
 ち子の時にして、子は北方
 水に屬す、故に水に水を重
 めといふ、南方は離の卦、
 離を火となす、水の重を以
 て火の單を討つ、故に利あ
 りとなす、
 「黒革威」は黒き革にて
 綴ちたる鏡、
 「繁金物の頭盛兜」は金
 具を繁くかざりたる頭盛兜
 をいふなるべし、頭盛は兜
 蓋なども書き、武用辨喜
 に載せたる圖左の如し、

じ暮した其方がいとしき。夫に引換へ官兵衛殿。可愛い娘に連
 添へば。聾は子じや無いかいの。武士の意氣地が立たいとて。
 見殺しにする無得心。哀を知るは武士の。常に引換へ胴慾と。
 恨み歎くを耳にも懸けず。忠義に凝つたる氣丈の老人。腸を練
 る軍慮の工夫。詞ムウ五星を鑿みれば。味方は北方炊爲水。時
 は三更子の上刻。水に水を重ぬれば。南方の火の尾州を討つに
 利ある刻限。君の御出馬此圖を外さず。イザ本陣へ乗替引けと。
 下知する内に一間より。詞ヤア／＼官兵衛。病中の苦勞に及ば
 ず。齊藤治部太夫義龍。疾より是にて聞きたるぞと。襖颯と押
 開かせ。黒革威の鎧投懸け。繁金物のとつばい兜。花に荒れた
 る走馬の勢ひ。前後を守護する諸軍勢。四邊を拂つて見えたる
 有様。存じ懸無きお成やと。低頭平身なしければ。義龍快氣の
 聲高く。鋭き味方の鋒先にて。過半攻取る敵の要害。残りし砦



「花にあられたる走馬の勢ひ」
 繁金物の兜にて、いさみた
 けるさま、一寸面白くひ
 たり、
 「あたりを拂ふ」 は威武
 凛々たるをいふ、
 「臨機應變」 もと兵書の
 語、
 「短兵急に」 短兵は刀な
 り（槍長刀などの長兵に對
 す）刀を持ちて押せまるを
 いふ、
 「いそふれ」 はいそなれ
 とよむ、もと急げより出で
 たるならんも、サアといふ
 ほどの意に用ふ、
 「未來を契る水盃」 淨曲
 にはよくいふ紋切形、水盃
 は生死のわかれになす、

は丹下中島。只一戦に攻崩さんと。進む手勢を其方一人。遮つて留めしは。犬清めが内縁に引れ。二心や有らんかと。密に立越え窺ふ所。敵の空虚を計り知つたる臨機應變。今に始めぬ竹中官兵衛疑晴るゝ上からは。短兵急に押寄せて。春永が頭を得る今宵の一戦。ハ、ハ、ハ、快や悦ばしと。我慢に募る強氣の詞。官兵衛猶も恐入り。詞何でう娘が愛に溺れ。義心をいかで忘るべき。戦場の働こそは叫はずとも。御供御赦免下さるべし。イヤサク。手傷も未だ治せざる内。心勞は保養の妨げ。砦に残つて勝利の報せ相待居よ。時刻移さず出陣せん。いそふれ續けと勇立ち。首途を告ぐる鯨波。手勢隨へ出給ふ。跡見送つて官兵衛重晴。詞主人の疑散せし上は。今こそ赦す犬清と。未來を契る水盃。女房可きに計へと。思懸無き一言に。詞エ、そりや眞實でんんすかへ。チ、不愆の生害。見捨つるも武士の誠忠。

「義心は義心恩愛は恩愛」
 これかたき武士の、かたく
 區別してまもりしところ、
 この衝突がいつも血の涙と
 なる。
 「夫の心酌取りし柄杓の
 柄短夜や」縁の語を以て
 巧みには書きたれど、強て
 作れるやのきらひあり、柄
 杓を以て水盃をなすゆゑ
 「柄杓の長柄」といへり、長
 柄は婚禮の祝盃に用ふる銚
 子月(盃)の銚子も幾千里
 短夜をうけ千里の名により
 て書けるならんも、虚飾の
 贅句なり、いやらし、
 「二世のかため」は夫婦
 のかため、夫婦は二世、
 「手負には思むものなれど」
 手負のみならず、常に思
 めり、
 「杓柄の盃」盃に月を合

義心は義心。恩愛は恩愛。ソレ／＼早くと情有る。夫の心酌取
 りし。柄杓の長柄短夜や。月の満干も幾千里。手に取上げて親
 々の。情戴く水盃。詞申し我夫。今といふ今お許し受けた二世
 の堅め。未來は女夫でムんすぞへ。ヲ、／＼悲しい目出たい取
 結び。酌は此母。手負には忌物なれど。娘が心濁り無い杓柄の
 盃。手を懸けて下さらば儀式は濟む。サア／＼早く犬清殿。ヤ
 ア祝言とは穢はしい。目前主人の仇敵。竹中が娘の千里。盡未
 來際夫婦の縁。斷つたる證は此通りと。柄杓擱んで投付ければ。
 詞エ、爾んなら私が未來の縁は。ヲ、詞交すも是限りと。烈し
 き手負が詞のとがり矢。執るより早く我と我が。咽喉にかはと突
 立つる。母は駈寄り狂氣の如く。詞此憂事を見まい爲。盡した
 心も徒事に。成果たるか悲しやと。涙ながらの介抱に。手負は
 苦き目を開き。詞ア思へば果敢ない私が身の上。此世の縁こそ

「箭のとかり矢」 とかけ

たり、とかり矢は箭の上刺に用ふるかざりの矢、武用辨略貞丈雜記等に圖を載せたり、

「蓮葉の玉の臺で」 一蓮

托生の意、

「断きりし」 双金をうけて書く、

「差物」 は鐵の背の受筒

にまして、戰場の目印となす小き旗、武用辨略に、其種類殆ど一百の圖を載せたり、
「鬼と呼ばれし柴田」 柴田勝家は信長腹心の臣、剛勇にして、鬼柴田と呼ばれしなり、

薄くとも。切て未來は蓮葉の。玉の臺で夫婦にと。樂しんだ効

も無う。お主大事と父様の。忠義の双金に無情や。二世の縁さ

へ断切りし。心の中の悲しさを。推量して下さんせ。迷ふわい

など斗りにて。涙の血汐争へり。折柄風が吹送る。貝鉦の音寄

太鼓。さも物凄く聞えけり。詞官兵衛は耳聳て。遙に聞ゆる人

馬の物音。はや合戦と覺えたり。勝負は如何にと心急き。見遣

る外面へ物見の軍卒。大垣三郎御注進と。呼はりく。勝利を

報する勇みの大音。「扱も味方の三萬餘騎。二手に分つて中島

の柴田佐久間が堅めし砦へ。ひたくく」と押寄せく。関を

作つて攻懸くれは。外見ばかりの旗差物。不勢の小田方狼狼眼。

詞鬼と呼ばれし柴田を始め。井柙。遠山。森。佐久間。柵を潜つ

て八方へ。迹しは立てじと追詰めく。春永が後詰せし。丹下

の砦も一挫ぎと。味方は破竹の勢ひにて。未だ合戦最中なれど

「破竹の勢ひ」 晋書に「今兵威已振、譬如破竹、數節之後迎、双而解」これにて明かなり、「主家より賜はる高祿にて云々」此心得故によく身をすて、忠をなす、身體髮膚はからだの意、語孝經に見ゆたり、「其意地強いお心ひ云々」よく書きたり、「子よりも可愛い初孫の」世の諺、「修羅道の呵責の種」こゝは未來の迷ひの種といふ程の意、修羅道は阿修羅の住む世界、日々争闘を事とすと、前に解せり、「算へ立てたる八つ橋も云々」巧みなる駄句といふべし、味ひて知り給へ、八つ橋は三河碧海郡にあり、かきつばたの名所、在原業

も。十分勝利疑無しと。申し捨てゝぞ引返す。詞ム、味方の手番よくしたり。ハテ心地よき報せよな。喃官兵衛殿。一旦味方の勝利と有れば。お前の忠義も立つた道理。此上のお願ひは。理を非に曲げて小田方へ。お味方有らば犬清殿。娘と未來の縁も断れず。切ては清い臨終を。勧るが親の慈悲。ヤア姦しい。二心を抱く所存有らば。彼奴を眼前見殺しすべさか。主家より賜る高祿にて。身軀髮膚を養へば。親子が命は主君の物。無益の繰言聞く耳無い。黙り居らうと愛相無き。夫の詞にわつと泣き。ソレ其意地強いお心が。劔となつて可愛げに。苔の花を二人迄。散すが親の慈悲かいなう。子よりも可愛い初孫の。有とは聞けど顔さへも。知らずに暮す斗りかは。詞月日も更へず一時に。孤兒となすもぎどうは。親子夫婦が修羅道の。呵責の種となつたかと。夫に怨の數々を。算へ立てたる八つ橋も。涙ち

平「かきつげたきつゝなれ
 にしつましあればばるんく
 來つる旅をしぞ思ふ」今八
 つ桶と稱する東海道知立驛
 の東北、無量寺のある所は
 古蹟にあらず、同寺境内に
 業平お手桶のすゝきなど、
 いへるものあるもなかし、
 「程も荒砂踏たてく」と
 かけたなり、
 「さん候」は「まに候」の
 音便、
 「桶狭間に屯ある義龍公云
 々」今川義元の事をまぜ
 合して作れるなるべし、

「母衣武者」母衣を背に
 つけたる武者、母衣は鐵の
 背に負ひて矢を防ぐ具、竹
 を骨として布を張り、紐に
 て肩と腰とに結びつく、軍
 用記に其製法を載せたり、

またの三河路や。澤邊の水も増すやらん。程も荒砂踏立てく。
 息を斷つて駈來る注進。詞官兵衛見るより。如何に藤太。愈味方
 の勝利なるや。さん候初度の戦ひ。勝に乗つたる味方の勢。薫
 地に追駈くれば。逃たと見えしは敵の術。場所好き所に引返し
 詞初に異つて柴田が強勢。必死と定めし鋒先に。味方も亂次に
 喰留られ。桶狭間に屯有る。義龍公の御陣の勢。追々に駈付け
 く。先手に加はる虚を窺ひ。山道嶮しき挾間より。詞君の御
 陣の後を目懸け。思寄らざる小田春永。諸卒を隨へ現れ出で。
 所々の砦を餌に飼ひ。敗色見せしを術と知らず。死地に入つた
 る大將義龍。討取れ射取れと下知に連れ。群り蒐るを近習の兵。
 防ぎ戦ふ其中に。敵勢より母衣武者一人。眞先に大音上。詞春
 永の御内に。左る者在りと呼れたる。左枝犬清是に在り。義龍
 公の御首級。イデ賜らんと云ふより早く。槍を捻つて飛鳥の如

「春永公の御内にて云々」
此事は、勘當の前田犬千代
が、桶狭間の合戦に奮勇血
戦せしといへるより、作れ
る趣向なるべし、總解を見
よ、

「討取らんず」 は討取ら
んとする、

「鼠輩」 はつまらぬやつ
と罵る語、
「物の具」 は甲冑をいふ

く。突伏せ、薙伏せ、瞬く内。頼切つたる味方の人々。只一人に斬
立られ。手負討死死人の山。人間業とは見え申さずと。大息つ
いて物語れば。詞ハ、ア扱こそ小田が謀計に。陥り給ふか氣遣
し。夫のみならず春永が。馬前に働く犬清とは。訝しく。シ
テ主君には別條無きや。されば。恚亂軍となる上は。主人
の生死覺束無し。御先途見届け奉らんと。元來し道へ駈り行く。
物に動ぜぬ竹中も。始めて吐息つき敢ず。詞スリヤ若者が切腹
も。苦肉の術で有つたよな。ナ、推量の通り。味方空虛と偽り
しは。まつ此如く義龍を。誘拐寄せて討取らんず。是皆軍師久
吉が計略。今といふ今犬清が。お役に立つたる此切腹。ア、嬉
しや本望やと。聞く度々に急立つ官兵衛。詞チエ、口惜やナア。
重晴程の弓取が。鼠輩の族に計られしか。心元無き主人の存亡。
駈付け救ひ奉らん。女房物の具く。エ、不吉の泣面忌はしと。

「進る血汐の眼皆目もくれ
なむ」 激怒のさま、よく
いひたり、よく書きたり、
「引鐘」は退く合圖の鐘、

「敵勢鋭き狭間の圍み」一
寸味ひあり、のむれがたか
るべし、

足踏こたへ鎧櫃。手は掛乍らよろ／＼。氣は逸れども手傷
 の惱。透迤い／＼椽先へ。立つては倒けつ居て轉び。心踈けば
 咳上し。矢傷破れて迸る。血汐の眼皆目も紅。又打立つる引鐘
 に。件れて駈來る四の宮源吾。朱になつて立歸り。詞エ、是非
 も無き御運の末。計畧に陥つて。諸卒も残らず討死し。御大將
 義龍公。手痛く働き給へども。敵勢鋭き狭間の圍。追れん方無
 く犬清が。刃の下に御落命。大崩して士卒も散り／＼。陣所陣
 所も敵に奪はれ。残る砦は此一ヶ所。御油斷有るな官兵衛殿と。
 云ふ聲もはや息斷し。其儘其處に倒伏す。詞ハ、ア天なる哉命
 なる哉。多年の計策一時に破れ。主家の滅亡今日只今。斯る大
 事を引出せし。根ざしはうぬ等と這寄り／＼。兩手に二人が領
 髮攪み。ぐつと引寄せ。詞五十年來不覺を取らぬ官兵衛に。能
 くも耻辱を取せたなア。主君の怨敵國賊奴と。捻付け／＼齧齒

「怒る眉毛も逆立つ肝癖云々」よく書きたり見るが如し、五臟六腑の事は前にいへり、
 「氣のばやりを」といへり、
 「齊藤道三」 實は毒殺されしにあらす子義龍（實は土岐頼壽の子なりと）に逐はれ、後戦ひ敗れて殺されしなり、
 「其身の敵は其身の積悪」 我身に出で、我身にかへるの意、
 「旗下」 は家來の意、
 「譜代恩顧」 は御恩をうけたる代々の臣、
 「舌客」 は辯舌を以て説き伏する者、説客、
 「火に入る虫」 火を取りに来てつかふる夏虫の如きをいふ、もと佛書より出でたる事、前にいへり、

切齒 怒る眉毛も逆立つ肝癖。五臟六腑を嘔上げて。拳に傳ふ
 血の涙 止め兼てぞ見えにける。時しも爰に寄太鼓。亂調に打
 立てく。小田上總介春永。勇名輝く其扮装。欣然と入給へば。
 夫と見るより無念の息さし。飛菟らんず氣の逸雄。義心を察し
 て春永公。詞ヤレ騒がれな竹中氏。齋藤道三を毒殺し。勿體無
 くも足利の。四海を奪はん義龍が陰謀。其身の敵は其身の積悪。
 誰をか恨み敵とせん。元より齋藤旗下の貴殿。譜代恩顧といふ
 にもあらねば。我軍術の師範となり。政事を助け國民を。慰れ
 むこそは誠の義者。有無の返答せられよと。道理に服せず嘲笑
 ひ。詞ヤア無益の舌客。千變萬化に理は説けども。眼前主君の
 仇敵。爰へ來るは火に入る虫。素首取らんと急立つたり。詞ヤ
 アく官兵衛。義龍が首取つたる當の敵。左枝犬清見參せんと。
 槍提げて駈來る母衣武者。歩み寄つて面當兜。搔抛り取れば此

歩み寄つて面當兇」と
 いへり面當は面頬のこと、
 面にあてゝ矢などを防ぐ具
 武用辨喜に圖を載せたり、
 「此下當吉」は木下藤吉
 にあつ、
 「亂るゝ胸の糸」といへ
 り、「亂知糸」
 「莞爾と」につこと、
 「死しての忠臣生きての勳
 功」場合にかなへり、
 「進退烈しき戰場にて云々」
 なさな子の將來をおもはし
 む、妙、
 「今ぞ勸當赦すぞ」信長
 桶狭間の戦功により、犬千
 代が勸當をゆるせし由、見
 ぬたるよりの趣向なるべし
 總解を見よ、
 「故實を正し」首につい
 ての故實は、軍用記に委し
 く載せたり、就て見るべし、

下當吉。御前に向ひ謹んで。詞此久吉が下知に隨ひ。敵地に入
 つて命を落し。計略を行ひしは彼れなる犬清。又戰場にて義龍
 を討取り。武功を現す犬清は。即ち是にと槍投捨て。母衣絹取
 れば背負ひし稚子。ヤア清松かと手負の千里。寄るも寄れぬ深
 傷の苦痛。母も心根思ひ遣り。千々に亂るゝ胸の糸。久吉重ね
 て。「此稚子の犬清に。御勸氣御赦免下さらば。我等加増の君
 恩にも。遙に勝る御仁恵と。思入つてぞ願ひける。大將莞爾と
 打笑み給ひ。詞ホ、ナ一名二人稀代の犬清。死しての忠臣生き
 ての勳功。能く勤めたり出來したり。進退烈しき戰場にて。快
 げなる寝顔の様。天晴大勇頼み有り。今ぞ勸當赦すぞと。慈愛
 の詞に久吉初め。痛手も忘るゝ手負の悦び。心を察して御大將
 詞未來へ赴く犬清へ。恩賞させんずソレ久吉。ハツト答へて母
 衣絹に。包みし首を故實を正し差置けば。詞ヤア是こそ主君義

「結構」はしくみ又たく
 みの意、これ字の本義なり、
 「かざす刃の下筋に云々」
 よく言たり、よく書きたり、
 下筋は地より筋の出づる若
 草、赤子の初髪に譬ふ、
 「面相にたく顔」と
 かけたり、
 「孫と祖父とも初見參産着
 一重も云々」剛氣一遍の
 官兵衛も、子よりかあゆき
 初孫の癡顔に、上げし刀を
 下し得ず、遂に恩愛にくた
 くる所、寫し得て見るが如
 し、古今の明文と謂つべし、
 就中「邪見に振りし刀の下、
 さぞ恐しき夢や見ん」の句
 に至ては、國文壇上其比を
 見ず、可成は「ふりし刀」を
 「上げし劔」と改めたり、
 「義に張つめし強弓も血の
 緒の弦に折れたるか」縁
 の語を以て書きたる妙句。

龍公の御首級。エ、淺ましき御有様。犬清に恩賞とは。我に贈
 つて情を懸け。勇氣を挫かん結構よな。愈鬱憤重る春永。覺悟
 ひろげと詰寄れば。ヤア粗忽く。當の敵は此久吉が負ふたる
 犬清。サア討て竹中。ヲ、云ふにや及ぶと。すらりと引抜き振
 上ぐる。白刃の光に身を惜まず。サアくくと突付られ。翳
 す刃の下筋に。紛ふ許りのしよぼく髪。すやく寝入る稚子
 は。聳や娘が面相に。にたく顔の愛盛り。思はず見惚れて。
 詞ハテ好い子だなア。孫と祖父とが初見參。産着の一重も與れ
 もせず。邪慳に振りし刀の下。無恐ろしき夢や見ん。不愆の孫
 が寢姿や。現在娘の別れにも。涕一滴零さぬ官兵衛。義に張詰め
 し強弓も。血の緒の弦に折れたるか。扱可愛やと大聲上げ。勇氣
 挫けて身も顛ひ。刀持つ手は大磐石。鐵丸の如き魂も。今ぞ蕩
 けてはらくく。止め兼たる恩愛の。涕汲出す如くなり。犬

いはん方なく味あり、血の緒は血筋即ち肉親をいふ。刀持つ手は大磐石。刀を下し得ぬをいふ、よく用ふる句なり、「とろけてばら／＼と」前の鐵丸を受、後の涙に照す

「蜻蛉結びも秋津國」結

び方に蜻蛉結びあり、蜻蛉の古稱あきつ我國の古稱あきつくに、よく云たり、味ふべし、「四海に覆ふ木の下」云々前を受けて書く、亦よし

「いんのこく」ば子守り唄、委しくは前に解せり、

「左枝政左衛門時家」は前田又左衛門利家に當つ、

「栗原山」竹中半兵衛が閑居せし所なり、委しくは總解を見よ、

「知死期」は臨終をいふ、もと陰陽家の語にて、其人の生年月日等にて、其死期

清亮爾と打笑ひ。詞久吉殿の高恩にて。御勘氣御免ある上は。

思ひ置く事少しも無し。今こそ女房舅殿。仇も恨も是迄く。

お暇申すと。突込む刀引廻す。久吉暫しと押留め。詞孤兒とな

る此清松。某が傳育て。生先目出たき榮を見せんと。抱上たる

後紐。蜻蛉結びも秋津國。四海に覆ふ木の下。露の恵に生育

つ。いんのこく。いんのこやいんのこ。いのこくは犬清が。

残す嫩を末の代に。左枝政左衛門時家と。名に知れたる弓取は。

此稚子の事なりける。官兵衛數行の涕を押へ。詞敵ながらも情

有る。小田に双向ふ弓矢は無し。我は是より女房諸共。栗原山

の閑居に籠り。主君を始め智娘が。菩提を吊はんいざ去らば。

詞ナ、此犬清も近づく致死期。我君おさらば。孰も去らば。

らばくの聲慕ふ。臨終の娘を母親が。未來の道連はぐれぬや

う。頼むくも泣じやくり。哀を見捨つる御大將。詞義龍亡び

木下蔭狹間合戦 壬生村の段

總 解

石川五右衛門 河内國南河内郡石川村字葉室の生れにして。今も其屋敷跡。田野となりてのこれりといふ。彼れは南北朝の頃。南朝の爲めにはたらきし。當地の豪族。判官代石川五郎の後裔ならんといふ説あり。されど詳ならず。繪本太閤記には。

石川五右衛門が始末を尋ぬるに。河内國石川村の郷民。文太夫といふ者の子にて。童名を五郎吉と呼べり。其生質よのつねならず。七八歳より發明利口にして。かりそめの事にも虚言を以て。大人をたぶらかし。大膽不敵の曲者なれば。成人の後いかなるものにかなりぬらんと。兩親はもとより。一村の男女。さゝやき合ひて恐れける。五郎吉十四歳の時母を失ひ。翌年又父も病

死し。孤となりしかども。苦しともおもはで。いよく心のまゝにふるまひ。大酒に亂れ。近隣の女子を欺き犯し。無頼の者を友とし。家業をつとめざれば。一人の叔母兩親にかはりて。いつくしみけるも。疎み果てゝ捨てけるを。今は中々心よしと悦びて。田畑をも賣盡し。十七歳の秋。石川村の住居もなりがたく。少しのしるへを心あてに。伊賀國へ趣きけるが。名張の山中にて。來船の僧の臨寛といへる異人に出合ひ。忍術の物語を聞き。正しからぬ生質なればにや。執心せる事大方ならず。終に臨寛の弟子となりて。法術を學ぶ事凡て十八ヶ月。元來伶俐の五郎吉。一を聞て十を知り。悉く習ひ得て。十九歳の時師にいとまを告げ。同國交野郡百地三太夫といへる。郷士の家へ。石川文吾と名を改め。奉公に有つけり。此三太夫。年六十に餘りて妻を失ひ。老の身の起臥せん助けにとて。後妻を求めけるに。花山院殿の御内

に仕へまるらせし。女の童お式といふ者。子細ありて暇を乞ひ。さそふ縁ましにまかせんとのかこち言を。媒なる者聞つくろひ。終に三太夫が後妻に定めぬ。此お式。まだ廿五の春秋を。やんごとなき殿上にやしなはれ。顔もと手足の愛くしきは。霞の間より綻び出でし。紅梅の艶なるが如く。物うちいひたる氣配のやさしさは。花に戯る鶯に似たり。深山の老猿かと思ゆる。三太夫には。似合しからぬ夫婦なれば。此家へ立入る男子。村中の老若打寄つては。とやあらんかくこそあらめなど。語り草となして興じはへりぬ。石川文吾こゝに來りしはじめより。此妻に心をよせ。兎やかくいひよる程に。元來女は水性。文吾がやさしき言葉に欺かれ。終に不義の行ひに與し。剩へ三太夫が。京へまかりし跡にて。貯へありし金子。八十五兩を盗み出し。夜にまされて文吾もろとも。伊勢の方へかけゆきける。此道すがら。文吾心

に思ふやうは。われはこれ大丈夫なり。豈一臭婦の爲めに。罪を天下に得べけんや。色情は我れ一時のたはむれのみ。女が盗出せし金子を以て。都へ出で志を立つべしと心を極め。彼の習ひ得し忍術隨身の法を行ひければ。怪しや文吾のかたちは。たゞ熱湯を雪にそゞぐが如く。めらくと消えて行方知らず。彼女大に肝を失ひ魂を散じ。身に冷汗を流し。叫ばんとするに聲出でず。走らんとすれば足なえたり。うつぶしになりて氣を失ひぬ。文吾傍にありて。此有様を見てからくと笑ひ。都をさして出行きける。

なほ同書に。田丸家への上使を殺し。おのれ上使となりて。大金をたばかりし事。世尊寺中納言の装束を奪ひて。内裏へ忍び入りし事。秀次に頼まれ。秀吉の寢首をかゝんとして。千石薄田に捕はれし事。等を載せたり。(釜入の事は次段に引く)五右衛門の事は。此繪

本太閤記より作り出せるが多く。此淨瑠璃もこれかもとなるべし。

望海舟談には。五右衛門は遠州濱松の生れにて。河内國石川郡山内古庵といへる。醫者のもとに育ちし由載せたり。要するに五右衛門の傳は。諸説ありて詳ならず。なほ次段釜入りの段を參照せよ。

壬生村の段

「孝行の守り袋」 とかけたり、守り袋のことは前にいへり、
 「怪我にでもわしが身に云々」 孝行の心根殊勝なり孝經にも「身體髮膚これを父母にうけ、致て毀傷せざるは孝の始めなり、
 「澤山に指でも云々」 あどけなき心根いぢらし、女郎の千枚起請、一々指でも切つて誓つた日には、千手觀音もたまつたものにあらず、
 「ひたぬるゝ涙流れの里」 とかけたり、流れの里はくるわをいふ、後に解くべし、
 「地獄の様に云々」 さもあるべし、
 「木食上人」 は五穀を断ちて、木の實を食する修行

壬生村の段

さして出て行く。年はいかねど孝行を。守り袋は筐ぞと。肌身に添て亡母に。逢見る思ひ獨言 詞コレかゝ様。怪我にでもわしが身に疵付けたら。やつぱり親の體に疵付けるも同じ事と。云しやんしたけれどな。ひよんな事はおやまに成つたら。澤山に指でも切にやならぬげな。夫が定なら何とせふ。まだ其うへに親方が。つめつたり叩いたりするといなあ。詞わたしや怖ふてならね共。いやといふたらとゝ様の。爲にならぬが悲しさに。賣れて行くはゆくけれど。必ず案じておくれなへと。云つゝ袖のひたぬるゝ。涙流れのさとはたゝ。地獄の様に思ひ取る。子供心ぞ道理なる。されば三界に舍り定めず。樹下に菓を甘んずる木食上人。抖擻行脚と心さし。ふせやが門に立休らひ。打鳴

者の稱、「**抖藏**」は頭陀の譯語にて、食を乞ひ野伏などする修行者の稱、「**行脚**」は宋音、諸國を廻り歩く修行者の稱、これ即ち「三界に舍り定めず、樹下に木の實を甘んずる」なり、なほ別記を見よ、木の實に此身をかけたるやも知らず、

「**伏屋**」は低く小さき家なふ、

「**祥月**」は死者の忌月又忌日をいふ、もと禮記の小祥大祥より出で、毎年の忌日をか稱する由、眞俗佛事編に見たり、一説に正月にて、正當月の義なりと、なほ別にいふべし

「とどがね棚のはした錢」とかけたり、
「手の舞足のはゞき舞」非常によるこぶ状、欣喜奮躍といふに同じ、はゞき舞と

す**鉦**の音。小冬はふつと心付き。ほんに月の二日くは。大事の命日と。佛檀の前でとゞさんが。笛をふかしやんす。わけて此二日は**證月**命日じやげな。ドレ入ませうとかい立てと。とゞかね棚のはした錢。やうやく取つて庭におり。しんぜませふと差出す。其手を外からじつと取り。詞我が名は小冬といふか。アイそふはそふじやけれど。こちやねつから見知ぬ坊様。手を放して下さいの。チ、二ツの年別れたれば。見知らぬも理。おりやわれが兄の友市じやはやい。ヤアそんならおまへは兄様か。幼さい時じや有つた故。わしやしらずに居たけれどわれには兄が有ぞよと。とゞ様やかゞ様が。毎日くいひ出して。大躰や大方の案じではなかつたに。よふまへ戻つて下さんした。嬉しいわいなと立ちつ居つ。手の舞足のはゞき舞。撫てやるやらさするやら。如在泣寄り眞身と眞身。あたりじろく見廻して。詞

いひたれば、「撫てやるや
ら」とつづけたり。

「如在泣寄り眞身と眞身」

親は泣寄りの語より書く、
如在の事は前に解せり。

「故郷の石川村」 五右衛
門は河内の石川村にて生れ

しとも、育ちしともいへり、
今も南河内郡石川村字葉室

に、五右衛門の屋敷跡遺れ
りとぞ。

「さんすいな暮し」 はさ
びしくみすばらしき暮しを

いふ、色道大鑑に「山水を
畫きたるは、さびしき體な

れば、かくいへるか」と見
ゆ。

「切りかぶた」 は木の切
はしの枕をいふ、廻國修行

者は、木の根石などを枕と
して、臥する者なれば、な

じみじやといへり、
「隠す菅笠」 皆修行

「ホ、ウ古郷の石川村に居られた時よりは。猶さんすいな暮しと

見るが。親父や母者は達者なか。アノかゝ様は去年死なしやん

して。それからとゝ様も目が見えぬわいなア。ム、頓死でもし

られたが。イ、エ。お前があんまり戻らしやんせぬ故。それを

苦にやんでな。ム、それで死なれたが。親父の眼病もそこらあ

たりの事で有る。シテどつちへぞ行れたが。アイ留主でござん

す。ム、それなら戻られる迄。斯しても居られまい。ドレゆつ

くりと寐て待たふ。そんなら是をと取出すは。油染たる切りか

ぶた。詞チ、此枕もなじみじやと。仕馴し業の押入へ。隠す菅

笠。さげて一間へ入にける。詞此とゝ様は何してぞ。早ム

戻つてくれたがよい。遅い事じやと待子より。待たるゝ親は憂

事を。目には見ね共心には。満る涙を押包み。しをれ我家へ立

歸る。詞ヤア戻らしやんしたか。嬉しい事じやわいな。何

者の用具、又簀に隠れ簀、笠に隠れ笠あり、

「待つ子より待たるゝ親は」待つ身より待たるゝ身つらしといへる諺を、もとにて書く、こゝらあたり、よく出来たり、

「奈落」は地獄の梵語、前にいへり、

「障子のうちくつるぎ」とかけたなり、

「髭もみ上げて大あぐら」悪者つくり、

「其代りにはこれから片時も」親の慈悲はありがたきもの、

「得道」は得度なり、出家授戒するをいふ、なほ別記を見よ、

の嬉しからふ。みすく捺落へ沈む勤を。いそぐとして見せる心根が。いぢらしいわいやい。イ、エ。兄様が戻つてござんしたによつて。嬉しいのじゃわいな。ヤア、何じや。兄が戻つて来たか。ソ、そりやどの様な形で。アイ衣を着てな。鈕を叩いて。ヤア坊主に成つて戻つたか。アノ坊主に成てかいい。ホ、親父殿戻つてかと。明くる障子のうちくつるぎ。髭もみ上げて大あぐら。聲をしるべにすり寄つて。詞ヤレ友市かいやい。兄かいやい。なつかしかつた。逢たかつたはやい。よふ戻つてたもつたのふ。マア、何よりは息災で。こな様も達者で。久しぶりて逢ますのふ。イヤモ久しぶりのだんかいやい。十一年が其間。長の年月を夜も晝も。よふ案じさしたなア。其代りには是から片時も。傍放しやせぬぞ。もうどつちへも往てくれるなよ。そしてまあ。よふ得道仕やつたのふ。イヤモ小い

「四角な字」 漢字をいふ

「さかいやき」 はさかいき

の轉にて、逆上の息をぬく
意なりと、月代と書く代は
白にて、月の如く丸く白き
ゆきの稱とぞ。

「三衣」 は僧の着る太衣
中衣下衣の稱、大やう僧服
の意に心得てよし、

「優婆塞」 は梵語、清信
男など譯し、もと在家にし
て、俗體のまゝ佛戒をまも
る、男子の稱なるが、後に
は役の行者の如く、髪を剃
らずして法服を着し、佛道
修行するものをいふ、
「うぶごやげに」 ぼうじ
でやうに。

時。はきつい手習ひ嫌ひで有つたが。出家に成る程の事なれば。手もよふ書く様に成つたで有らふし。四角な字も讀るか。寺持にでもなつたか。ドレどのやうな僧がらちや。撫て見よふと體中。探り廻してユリヤどふじや。三衣は着ながら頭巾の下。坊主所か月代さへ。剃てないぞよ。ハテ優婆塞なれば。髪は有る筈でござんすわいのふ。ム、行者様の様な物じやの。コレまあ此様に。親子兄弟が揃ふに付けても。思ひ出すは婆の事。今息引取る際迄も。そなたの事をいひ死に。去年の秋死にやつたぞよ。サアそふじやげにござんす。チ、そふじやわいの。それからおれも此様に。生れも付かぬ明盲。それは噤不自由にござんしよ。サア不自由な事いの。何が鋤鋤の働きはならず。有りもせぬ物を賣喰にして居るが。今での生業。ソレ見や。行燈蹴破つた様な内に。成たで有らふがの。チ、それで氣が付いた。小冬よ兄は空

「手傳ふといひ柴」とか
 けたり、いひ柴といふは聞
 かず、椎柴を誑れるか、飯
 を炊くよりいふか、かゝる
 事は無學の淨曲作者に、あ
 り勝の事なり、「爪木とく
 く」といへり、爪木は爪折
 りて辨にする小枝をいふ、

「吉野太夫」 名高き遊女
 なればとれるなるべし、遊
 女を太夫と稱する事は、前
 にいへり、

「禿」 は女郎の召仕ぶ童
 女の稱、前に解せり、

「いたいめばさせぬ」 何
 の事やら、

「たらず」 は甘言を以て

「及ぶ所」 及ばして見せる
 お上へ訴ふる意、

腹からふぞよ。サアそふ思ふたによつて。雛様の此釜で。チ、
 湯立飯にしたがよい。ドレ手傳はふといひ柴の。爪木とくく
 折からに。駕籠の棒端門口へ。ぬつと入さす傾城や。詞治左衛
 門殿。先程は逢ました。約束なれば迎に來た。奉公人を連れて
 逝ましよかいの。とゞ様もふ行ねばならぬかへ。サア金は請取
 し。證文には判をする。やりとむのふてもやらにや成まい。サ
 ア行くは行くけれど。餘り急なで悔りして。どふやら腹が痛い
 わいなあ。チツトおむす案じまい。腹がいたくば吉野太夫が禿
 にして。まだ一二年はいたいめを。させまい程にとたらずにぞ。
 詞イヤユレ親父殿。おれが戻つたからは。あれを賣には及ばぬ
 ア、ユレく。そこな坊様。異な事をいふわるじやはいの。及
 ばふが及ぶまいが。金渡して證文が濟たりや。こつちの代物。
 ヌレ證文が有るからは。およぶ所で及ばして見せるぞや。たと

「かきつく爪のほらたうとい」 慾深くかき込んでありがたむるをいふ。慾深き者を爪長しといふより書く巧みの句なり。

「お寺の金なら正眞な」といへるは盗みの金。

「小判の耳たぶも云々」傾城屋は金の耳たぶ、親子は仕合せの耳たぶ厚きをわけていふ、小判などを數ふるに耳といひ、仕合せの厚きを、耳たぶの厚きといふより書く、俗に耳たぶの厚きは運よしと、骨相學より來れるなるべし。

「日本國の金は皆おれが物」とは泥坊、川柳に「大きな氣世の寶皆おれがもの」とすが大閻の向ふをばりし男、
「娘今朝われに預けた云々」
治左衛門心づけり。

ひ又金立ふといやつても。元金ではもふいかぬ。ならぬ事じや。ドレ其證文おこせ。請出さふと。ぐねらり投出す二百兩。搔付く爪のゑら尊い。詞お寺の金なら。正眞に違ひは有るまい。此儘で貰ふていのふ。ヤレ駕籠の衆。サアくごされと此駕籠

に。乗た小判の耳たぶも。さつても厚いと親子共。あきれて詞なかりしが。治左衛門居直つて。詞コレ兄。そなたはたんと金持

て居やるのふ。イヤモ日本國の金は。皆おれが物でこんすわいの。ユリヤ娘。今朝我に預て置いた物は。何所にある。アイそりや爰にごさんすと。取出し披く人相書。詞年の頃は廿二三。

脊の高さは五尺六七寸。其次は何と書いて有る。讀で見い。アイ色白にして鼻筋通り。チ、そふじや。苦み有る面躰。左の耳際まはに鑢疵うりきずあり。此盜賊の張本石川五右衛門といふは。チ、そりやおれが事じや。エ、と玉ぎる釜の湯に。取落したる繪姿の。爛

「玉ぎる釜の湯に云々」あきれて繪姿を熱湯に落さしめたる趣向頗る妙、これ後に釜煎りの刑に處せらるる前表をいふ。大角熱は八大地獄の一、罪人の亡者を釜煎りの責苦にあはすと、「三つてつけた癖の八十迄」三歳児の魂百までといへる謬に同じ、小まき時の根性の、いつまでもわけぬをいふ。

「大枚」は多額の金にいふ語、もと餅銀より出でたりと、前にいへり、「持なやむ」はもてあつたふの意、

「ちんば馬に乗せられ」昔引まはしとて、はりつけ火あぶり等に處する大罪人を、馬に乗せて引まはせしなり、ちんば馬と限られど、あしき馬なれば、かくいひ

熬つく大焦熱。熱湯の涙胸につゝかけ。膝つつかけ。詞エ、儂は情ない。とう／＼大盗人に成をつたナア。三ツで付けた癖は八十迄とやら。六ツ七ツの時分から。只人の物をほしがる性。其時分は相應に暮した故。召遣ふ女男も有つたれど。かく和子様が手が長ふて。勤にくいのはの。イヤ用心の悪い内方じやの。後には奉公人も得勤ず。折檻すれど聞けばこそ。人中見せたら直らふかと。十二の年奉公にやると。其儘取ふけり。けふ娘を賣つた五十兩も。儂れが首代じやはやい。それに何じや勿躰ない。大まいの金を土砂の様に。持なやむ罰當りめ。配符の廻る程なれば。大それた事仕出したに違ひはない。スリヤ千萬だら悔んだ逆。返らぬ事では有らふけれど。其まお屈竟な體を後手に。くゝり上られ淺ましい。ちんば馬に乘られ。京洛中を引廻され。親や妹に耻かゝすのが本望か。コリヤヤイ。わりや命一

ならばせり、

「獄門」はさらし首ないふ、斬りたる首を獄屋の門にさらすよりの稱、

「心ない草や木も云々」よくいひたり、木繩につけば

則直、

「太い煙管を横ぐはへ空うそ煙吹くばかり」馬耳東

風と聞き流す、悪物作りの様見るが如し、

「親子中破れ行李」とかけたり、

「底打古びし」とかけたり、

ツ捨りや。それでよいと思ふて居よけれどな。其捨てるまでの苦しみが。なみや大駄の事かいやい。今でも根性直すなら。氣づかひするな其罪は。此親が引受けて。名乗て出ても助で見せふ。子の爲に死ぬる命。獄門磔いとひはせぬ。眞人間に成つてくれ。アレ心ない草や木も。撓れば直る物じやぞよ。親程に子が親の事思ふ物なら。何のまあこんな事にはなりやせまい。去りとは根性直してくれ。これじゃくと手を合せ。泣あせれ共いかな事。とぶといきせる横ぐはへ。空うそ煙吹斗り。詞ム、ぐつ共すつ共云ぬのは。聞入ぬのじやな。よいは。此上はどふ成りと勝手にしをれと親子中。破れごうりの底打古びし小合口すらりと抜く手に取付く小冬。詞ヤア留なく。これから一日でも生で居る程。あいつが成敗に逢を待つよふな物じやはいやい。イエくそれでも死しやせぬ。兄様留てくだされいのふ。

「劍先に當たる娘」不運なり、暗劍殺、

「非業」は横死をいふ、定業に對す、

「漢竹」は漢土より渡來の竹にて、笛を作るに適す、

親父殿何するのじや。チ、留る氣は根性直すか。ハア役にも立ぬよまい言。そふいや死ぬる。イヤさゝぬ。エ、放せいやい。イヤ放さぬ。イヤ放せと。引合ひ捻合ひ面倒など。もぎ取り捨つる劍先に。當る娘が因果のさま。なむ三寶と五右衛門が。抱しむれば。詞兄よく。娘は何とした。どふしたやいと撫廻る。手先にさはる合口は。無残や小冬が袖先に。忽親は半狂亂。ヤアくく。こりやまあ何たる怪我災難に。逢た事じやそやい。く。此様な事のない様にと。願ひ祈るじやないかいの。神や佛も胴欲な。聞えませぬわいなく。親父殿。こりやもふ所詮助からぬわいの。エ、其様な事云すと。どふぞ助でくれいやい。こんな非業で殺したら。死だばゞへの云譯は。何と成ふぞ悲しやと。正躰更に泣入りて。やゝふし沈居たりしが。何思ひけん立上り。涙ながらに佛壇の内に備へし漢竹の。笛と一軸取出て。

「因縁因果經」といへり
 因果經はもと釋尊の説かれしもの、今俗間に謠ふ因果經は、これを本として作り出せるなりと、白隱禪師などの作にや、委しく知らず、「廿三年跡の今月今日云々」これ淨曲因果應報の紋切形「芥川」は業行と二條の後との欠落を以て名高し、川柳に「關白が追手に走る芥川」又「芥川鍋取めがと追つかける」
 「月も延びたか」月延びて生るゝ子はすこやかなりといへり、
 「發起心」は菩提心を起して、佛道に入ること、
 「おれをにらむ其顔が」因
 果物すこく書きたり、

扱もく恐ろしい。人の恨まつ此通りに。報はねばならぬ因縁因果經。これ見てたもれと手に渡し。詞昨日今日の様に思へ共。早廿三年跡の今月今日。てうど此様なしたく雨が降ての。物凄いや夜道を。芥川へかゝる所で。癩に苦しむ旅の女。行きかゝつて見捨られず。さする肌金財布。見るよりふつと悪念の。起つたも何故ぞ。大恩請た親方の。困窮が救ひたさ。とふぞ借て下されと。やつ返しつする中にも。見咎られては成るまいと。胴欲にも切殺し。逃ふとしたれば疵口から。おぎやアくと赤子の泣聲。取上げて見たれば。月も延たか。逞い男の子。ヤレ不便やと其場で直ぐに發起心。ひよんな事仕ました。こらへて下さりませ。其代此子はわしが子にして。適成人させましよと。亡者にきつと誓を立て。守養たはわれじやはやい。あまやかせば手に餘るわやく者。呵れば返つておれをにらむ其顔は。

母御が息を引取る時。おれをにらんだ其顔に。似たとこそいへ
 く。其こはさも可愛さに。紛れくてそれ程迄に育たれば。
 最早罪障消滅し。母御の恨も有るまいと。思ひ暮せと恐るしや。
 天道様の憎しみにて。月もかはらず日もかはらず。ついに娘が
 身に報ふ。因果の懺悔調ふる横笛其一軸。詞母御の筐でござる
 ぞや。サア斯打明せば此親仁は。こなたの爲には仇敵。切なり
 と突なりと殺して下され。こりや娘。必ずわれは死ぬなよと。
 身も浮く斗り歎にぞ。小冬は苦しさ紛らして。詞ア、と、様。
 ヤ、氣遣ひさしやんすな。死にやせぬく。死にやせぬけれど
 な。ひよつとわたしが死だなら。かゝさんとひとつの所へ埋ん
 でほしい。コレ兄様。と、様ともふせり合すと。中よふして下
 さんせ。頼みます。わしやと、様がいとしばい。大事にかけて
 といふ内も。次第く色かはり。手足をちぐめ四苦八苦。コ

「いとしばい」は、かあい
 さう
 「四苦八苦」は断末魔の
 苦みないふ、委しくは前に
 解せり、

「花盗人とも壬（見をかく）生寺の鉦も哀れな」。香の語をうけて書く、毎年三月十四日より廿四日まで、京都壬生地蔵の念佛法會に狂言をなす、これを壬生狂言といふ、其數廿五番、中に花盗人あり、以て意得べし味ふべし、

「九州大内の落し胤」はらい所へ引出したるもの、「琳聖太子」未だ考へず「萬乘」は天子の御事、天子は兵車一萬輛あり、故に萬乘と稱す、「盗人程義理引に云々」名ある盜賊博徒は、其仲間うち義頗る堅くして、死を以て之を守り、到底常人の及ぶ所にあらずとぞ、莊子にも、盜に義あり、義なければ大盜をなす能はざる由を述べたり、

リヤやい娘やいくと。よへ共聲の立かぬる。おしや蒼をちらせしは。花盗人共壬生寺の。鉦や哀をそへぬらん。一心不亂五右衛門は。一卷とくと讀終り。詞コリヤコレ大内が系圖書。スリヤおれは百姓の子ではなく。九州大内が落し胤か。ム、さすれば先祖は琳聖太子。コリヤ是迄の望をかへにやならぬわい。元より大名ちいさいやつ。武將の望もよしにせい。これから望むは萬乘の。天子ならば成つても見よふ。ならずば一生盜人ぐらし。一日暫時の思もない。誠の親より大切な。こなたを敵と思はれふか。ヤアくくく。何といふぞ。やつぱりおれを眞實の親と思ふてくれる氣か。サア盗人程義理引に。苦をやむ者はごんせぬはいの。チ、くくく。よふいふてくれた忝い。忘れはせぬと縋り付き。肉身しぼる嬉し泣。理りせめて殊勝なり。晝は疵持つ足柄金藏。表から頭くとひそめく聲。詞チ、足柄

「晝は疵持つ足柄金藏」と
かけたなり、疵持つ足とはと
がある身ないふ、

「三上の百助」は三上山

の百足、堅田の小雀は堅田

の落雁、小鮒の源五郎は源

五郎鮒よりおもひつける名
なるべし、

「贓物」は盗み取りたる
品物、

「自慢夕べ」とかけたり

「十七人の振袖は」姉小

路の序に、縁の語にてあや

なし書けるのみ、姉小路は
京都、

「とてちん」は三味線の

譜、前の三味線をうけ、下
の踊りを起す、

か。遠慮に及ばぬはいれく。ナット心得ふり返り。招けば後
 から三上の百助堅田の小雀。戦多の同類。くらを素人に贖商人。
 くろめる臆もつかたげ込む。五右衛門手下を見廻して。詞コリヤ
 堅田よ。此中に小鮒の源五郎めがおらぬが。どふ仕をつた。サ
 レバイノ。こな様の配符が廻つたによつて。お頭の代に成つて
 斬されに行くと。昨日名乗つて出をつたからは。頭の上氣
 遣ひない。何と出かしおつたじやごんせぬか。ホウあいつなら
 そふで有る。氣なやつじやな。イヤユレあれ計りじやない。まさ
 かの時に成つたら仲間の者は。皆こな様の命にかはる氣じや。
 是見やしやれと脱捨てる。姿も髪も一樣に。揃ひすぐれし強盜
 なり。中にも金藏一はな立ち。詞自慢夕部のはたらきは。晝の
 内から眼ばつた。十七八の振袖は。姉小路橋屋といふ三味線屋
 へ。とてちんなしに踊り込み。娘押へて取て來た。小袖の袷敷

「雀も百も踊つたか」 小雀も少しは仕事をしたかといふ意、前の踊りをうけ、雀百まで踊りを忘れぬといへる諺より書く、
 「雀が囀る通り」 前の雀も百もなうけて書く、
 「おそろひなさらぬ沓冠」 沓冠と顛倒したるをいふ、公家は位高けれども、縁うすくして家貧なり、故にくらしと位とは、沓冠ならざるを得ず、且沓冠の語下の句を呼び起す、よく書きたり、
 「むつかしい字の書いたきたない紙」 うす墨の繪旨紙をいふ、色うす黒ければなり、
 「二束一本」 の語心得られず、御教示を乞ふ、
 「太政官の御正印」 太政官の印はあれども、これを

三十八。黒塗手箱に盈れる程。壹歩の数が千五百。讀てもらはとさし置ば。うなづきじろりと見たばかり。詞コリヤヤイ。雀も百もをどつたか。イヤ忘れても此後に。公家の所へはいるなよ。成程雀が囀る通り。位とくらしがお揃ひなさらぬ沓冠。こんな装束白丁烏帽子。かぶつた代物お頭の。お氣には入らぬとまじめ顔。詞シテ此外に何もなかつたか。ホンニそれよ。此様な結構な箱の中に。むつかしい字の書いた。穢い紙が入れてこんすわいの。チ、そりや一束一本繪旨紙で有る。爰へおこせと押開き。一目見るより舌打し詞ハテよい物が手に入つたな。コリヤコレ足利家へ天子から。預て置かれた太政官の御正印。返せと有る勅書。ム、吳羽中納言氏定承る。コレ爰が仕事じやてい、此中納言氏定におれが成つて。足利家へ入込み。太政官の印を請取ふと云ふは。所でそれが無い。ない筈じや其印は。

足利家にあづけしなどいふことばきかず。

「づきが廻はる」は先に

かんづかるゝないふ。きづきの畧にはあらざるか。

「諸大夫」はもと輕き家

にて四位五位を極官とし、攝家などの家司に、補せら

るゝ者なるが、轉じて五位の侍の通稱となる。

「雜掌」はもと宮中にて

種々の雜務を取あつかふ、卑き者の稱なるが、轉じて

傳奏家などの家長を呼ぶ、

「狹箱」の事は前にいへり、大名にも公家にも用ひ

しなり、

「とゞむるまとはしの其上の衣」とかけたり、「まと

はしの上の衣」は縫腋の袍の事、袖の下より兩腋を縫

ひふさぎたる文官の服にて（武官はあけたり）まつはし

とくより紛失して有る噂。そこで言譯がならぬから。迷惑仕を

るは。そこを付込んで大金にするか。但し義輝に腹切らすか。

どちらでも味い仕物。よし又づきが先へ廻つて。仕損なふてか

らが元くじや。ドレお公家様に成つて見よふ。ソレ仕丁が三

人。アイよごんす。諸大夫。よし。雜掌。よごんす。狹箱。よ

し。裝束付けよと不敵の仕業。聞くにたまらず治左衛門

歎きを忘れ齒をかみならし。詞エ、恐ろしい工み事。ならぬさ

ゝぬと這寄つて。すがりとゞむるまとわしの。其うへの衣薄むら

さき。赦さぬ親は恩愛に。悲しみ怒り獅子形の。石の帶仕にま

た取付く。腕先取つてつきはなし。有紋の冠厚額。隠し置いた

る菅簀より。取出したる蒔繪の太刀。はく淺沓の音高き。殿上

人はお頭殿。手下も氣儘にのしめ上下白張烏帽子。作り濟せし

勅使の粧ひ。コリヤ、イ。其様な横道な事して。それが眞

のきぬといへり、まとはし
といへるは詛れるなり、「上
の衣」とは、袍は上に着る
正服なるゆゑにいふ、以下
裝束の故實、笛躬千柳など
の力にては覺束なし、問合
せて書けるなるべし、
「うす紫のゆるさぬ親」と
いへり、うす紫は二位三位
の服色、中納言は此位なれ
ばよく叶へり、「ゆるさぬ」
とつゞけたるは、紫は紫色、
うす紫はゆるし色といへる
より書けるか、又紫のゆか
りの色などいへるよりかけ
たるか、兎も角手際の文な
れば、味よく解して、作者
に花をもたすべし、
「悲み怒り獅子形の」と
いへり、「怒り獅子形の石の
帯」とは、石の帯を飾れる
石玉に、怒り獅子の模様の
るをいふなるべし、石の帯

直に行ふかいやい。此やうにいふても用ひぬのは。おれに愛想
をつかさそふとするので有ふけれど。いかなく何ぼでも。愛
想がつきてよい物か。ユリヤ此位牌の亡者に。きつと請合た事
じや物。火に入るなら供に。火の中迄もつれて行け。ハテとても
聞入れぬ事なら。もふおれはとめまいが。ユレ此筐の笛の音を。
せめて母御の詞と思ひ。どふぞ留つてくれいよと。心を込めて
嘘笛は。凄凉としてさえさゆる。聲に感ぜし水龍の。啼かたちま
ち帯たる太刀。はためき渡ればあたりの小川。水勢激して朦朧
と。打けぶるこそ怪しけれ。詞ム、スリヤ此太刀の。ユレおか
しら。今の不思議はアリヤ何じや。ハテ何ぞのあれで有らふぞ
やい。うちやつてサアこいと。出るをやらじとむしやぶりつき。
とむるも闇雲霞のあて。うんとものつけにそり返るを。見捨てあ
ゆむ道さきに。行あふ武士だに行列も。よぎるかたなく乗物よ

は、束帶(公家の大禮服)の時着用する、革にて作れる帶なり。種々の石玉を以てかざるゆゑにかく稱す。

「有紋の冠」は羅に小菱形ある冠、五位以上は有紋の冠、六位以下は無紋の冠を用ふる定めなり。

「厚額」は襷の厚き(即ち縁の高きをいふ)冠、丁年以上は厚額、少年は薄額を用ふる定めなり。

「蒔繪の太刀はく淺沓」蒔繪の太刀は公家が束帶(大禮服)の時、佩用する飾り太刀、鞘を蒔繪にてかざるよりの稱、淺沓は同じく束帶の時用ふる沓、雨などの時用ふる深沓に對していふ。

「殿上人」は昇殿(清涼殿の殿上の間へ昇る事)を許されたる者の稱なるが、こゝはお公家様の意に見るべし。

「のし目」は麻上下の下に着用する禮服の小袖、袖の下と腰とばかりに縞を織出し、五所の紋をつく、徳川時代には、侍従以上はしどら以下はのし目を用ふる定めなりしと、秋草貞丈雜記などに見ゆ。

り。はうく這出る立派の武士。土に低頭うづくまる。詞下馬
緩怠と堂上の。とがめも柔和温順に。寛然として行過ぎる。跡
にやうく爺親は。息ふきかへしむつくと起。ヤアもふ往たか
兄やいく。無事で戻つてたもやいのと。さぐる芦垣外面より。
きつと見付くる明智の眼力。ハテナア。

「位牌」はもと儒家の木主を、佛家のかり用ひたるものなりと、前にいへり。
「聲に感ぜし水龍の云々」龍は笛の音などを好むものといひ、俗間に夜笛を吹かば蛇が来るなどいへり、赤壁賦にも笛の音の妙を稱して「舞幽壑之潛蛟(蛟龍)泣孤舟之嫠婦」と書けり、又名嫠を龍にたとへ、龍蛇の文を刻みて、雄龍雌龍など名づけしあり、劍截儀に「腰間雙龍透頭舞」これにて味ふべし、今五右衛門の帶ぶるは、雌龍の劔なり。
「朦朧」ぼんやりかすめるさま。
「臨雲霞のあて」あては當身とて、急所をつきて氣絶せしむる柔の術、雲をうけて霞といへるなるべし。
「よざる」さぐる。
「下馬緩怠」下馬の禮の意りをとがむる語、頗る鷹揚なり、乗物より下るも下馬とは面白けれど、こゝらは大やうに見るべし。
「さぐる蘆(足)垣」とかけ「外面より」とつづけたリ。

釜淵雙級巴 釜入りの段

總 解

石川五右衛門釜烹^{かまひら}及其釜の事。

繪本太閤記 去程に。五奉行の面々商議ありて。下司に仰せて五右衛門を引出し。太閤の寢殿へ忍入り。殺害し奉らんと謀る條。匹夫下郎のなす業ならず。叛逆の張本あるべし。明かに白状せよと。さまざま拷問に及びけれども。石川五右衛門といふ盜賊にて。普く諸侯の屋敷へ押入り。財寶を奪ひ取るの外。何者にか頼まれ候はんとて。外に申す言葉もなし。されども太閤のおはします堅城へ。忍入る曲者。同類も數多あるべしとて。日々拷問にかけ給へども。少しもひるめる色なく。只大言を吐き。司吏を罵り。傍若無人の有様なり。しかるに河内國龍田越の山中にて。一人の賊徒をとら

へ糺明せしに。其名は筑紫權六とて。石川五右衛門の手下なるよし申すにより。頓て伏見へ引渡し。此權六が白狀にて。悪徒殘らず相知れ。諸方に人を馳せてとらさせけるに。一月ばかりに二十餘人を搦め得たり。此者ども悉く拷問に及びければ。巡見使となりて水口大垣を掠め。岩村にて上使を殺し。田丸にて大金を奪ひしことなど。悉く上聞に達し。案外の強盜世の見懲しにとて。三條河原に大釜を据ゑ。内に油を湛へ。二十餘人の屬手と共に。烹殺すべしとの評定に一決し。文祿三年冬十月。洛中洛外を引渡されけるに。見物の老若男女。雲の如く集りて。あなあさまし。刑罰も多き中に。ためしも聞かぬ釜烹とは。悪人ながら不便なりと。皆あはれを催しけり。京極通り松原に。森如軒といへる茶人あり。日來五右衛門に交り深く。茶味を談じ會せる事度々なりしが。思はざりき盜賊の魁首にて。釜烹の極刑に處せらるゝを。只今爰へ引來ると。往

來の群集錐を立つべき地もなし。如軒夫婦はあなむざんとて。引かづき臥居けるに。五右衛門如軒が門前にて。警固の武士に向ひ。暫く馬をとどめ給はるべし。これなる家は。都に名高き茶人のよし。兼々聞及べり。終に知人ならねども。薄茶一つ所望したしといふ。武士等其乞ふにまかせ。如軒を呼びてしかく。と申せば。心得候とて。やがて衣服を改め。樂の茶碗にたてゝ差出せば。武士取つて直に飲ましむ。五右衛門大に喜び。あゝ心よや。末期の茶なりとて。北の方へ引かれ行く。此後罪人を引く時の例となりて。此家にて茶を與へ飲ましむとぞ。爰に五右衛門手下の中に。田中兵助といへる功の者あり。此度のとらはれを免れ。いかにもして救ひ出さんものと。見物の群集にまぎれたためらひしが。五右衛門が通る時。つと飛びかゝり。警固の武士一人。拔打に切倒し。五右衛門を引立て去らんとす。すは同類よのがすなど。大勢取まきひしめく程

に。今はこれ迄と思ひて。五右衛門に向ひ。日頃の恩を報ひ候ぞと
呼りすて。涌く如き見物の中に紛れ入つて。行方知らずなりにけ
り。此者後に加藤清正に仕へ。祿五百石を得て。高名の武士となれ
り。さても河原には。大釜三つ迄立て。油をもち。柴薪を積んで。焚き
ける程に。焰天を焦し。煎る音雷の如し。見る者肝を冷し。魂を失ひ。
誠に焦熱地獄の有様も。これには過じと恐ろし。頓て五右衛門
以下の盜賊を引來り。いましめの繩を其まゝにて。熊手に引かけ。
彼釜の中へ投入れ。ば。忽ち五體は朱の如く變じ。七轉八倒して。
さけび死しけるを。稻麻竹韋の如く寄集りし。見物の男女老少。敢
て目を定めて見る者なく。面を蔽ひ氣を失ふ者數を知らず。異國
にては人を糞るためし多しといへども。本朝に於ては。かゝる刑
罪のありとも聞えず。自業自得とはいひながら。あさましき身の
終りなり。

東京日々新聞明治十四年六月廿八日所載 文祿の昔。石川五右衛門を烹刑にしたる釜の。奈良奉行所にありしを。維新の際に請取りて。今は奈良監獄分署に秘藏する由を聞かれ。此ほど内務省より。大阪府廳へ照會ありたれば。同廳にては。右の釜を寫眞に取りて。同省に差出されたるに。猶又其釜を。至念に東京へ廻すべき旨を。達せられたる由なれば。最早近きに到着するなるべきか。今奈良監獄分署より差出されたる其圖と。由來記を得たれば。左に掲ぐ。

抑此釜は。文祿年間(四年秋七月或は三年十月とも)賊魁石川五右衛門を。京都七條河原に於て。烹刑に處せし後。慶長年間奈良奉行たりし。井上源五郎なる人。伏見城より領收して。奈良舎へ運搬せしものなりと。今猶當府監獄署奈良分署にあり云々。

釜烹の時彼れが辭世の歌

石川や濱のまさごはつくるとも世に盗人の種はつくまじ

此歌繪本太閤記には載せず。眞書太閤記にはすべて記さず。なほ燕石十種。本朝武功正傳等に見えたれど。煩はしければ省く。又繪本太閤記に。釜烹の場所を三條河原とあれど。七條河原といへる説正しかるべし。今も其跡を釜が淵と呼ぶとぞ。又手下まで悉く釜煎にせしやう書けるも。いかゞはし。

五右衛門の事。諸説まち／＼にして確かならず。太閤頃の賊魁にして。文祿年中捕はれ。京都七條河原にて。釜烹の刑に處せられし位は。或は眞なるべし。なほ前段壬生村の總解を参照せよ。此淨瑠璃は。元文二年七月廿一日。豊竹座の興行に上せしものにて。作者は並木宗輔。

釜淵双級巴

釜入別れの段

「七條河原」 五右衛門は七條河原にて、釜いりの刑に處せられしなり、委しくは總解を見よ、「かなへ」 こゝは釜をすゑて、下より火をもやす釜をいふ。「地獄の責を此世から見に集りし」とつづけたり、一寸味ひあり、地獄に大釜ありて、罪人の亡者を煮ると。

「制法」 をきて、

釜入別れの段

仕置の場所は七條河原。二町四方に垣結び廻し。内に立てたる拔身の槍。かなへに据ゑし大釜は。地獄の責めを此世から。見に集りし群集の中。先を拂ふて早野彌藤次。岩木當馬も相役に。いひつけられて是非なくも。床几にかゝる跡よりも。親の兵部は心もそら。叶はぬながらも立むかひ。詞承れば五右衛門を。此所にて釜煎りとや。これまで盜賊のしおきは討ち首。古來希なる御制法と。いふを打消し。詞イヤそれは彼が科のなす所。先づ立ち歸りの科。二つには去年島原にて人を殺し金を取り。三つには此度身を手につけ。一味のやからを白状せず。なる程むごい罪に行ひ。同類をいはせよと。用捨なき御上意。役人の私ならずと。いひきかされてはつとばかり。かへす詞もなき中

「後の親を親とするが」此
掟ありしなり、繼母は義の
母なれば、一層注意して仕
へしなり、

「細繩の菱の紋」よくい
ひたり、俗にいふ龜の甲し
ばり、
「蝦にかぎみてかぎも折れ」
と、
「血の通ひさへ夏草」と
かけ、「焼きつけらるよ」と
つけたり、

に。詞然らば世倅五郎市とやらは。實の母が有と申す。さすれ
ば親殺しとも申されず。是は何故同罪ぞや。詞コハ改まりし御
尋後の親を親とするが天下の掟。スリヤ是も遁れずか。如何
なく。ハハレ不便千萬と。餘所には言へど心は闇。老の奥齒
を嚙締めて。泣音を隠すばかりなり。斯と聞より母のお律。息
を切つて駈付しが。夫當馬が今日の役目。思はく如何と垣の外
空つく内に引出す。餘所の見目も哀なれ。親にも子にも首かせ
の。脊に細繩の菱の紋。締結られし後手は。蝦に屈みてかぎも
折れ。血の通さへ夏草の。焼付らるゝ身の上と。思ふ心のはか
なくも。打しをれてぞ坐に直る。彌藤次如何思ひけん。親子の
禁ほどかせて。詞何と五右衛門。様々の責苦に落されば。今日
は釜の罪。世倅五郎市を不便と思はゞ。一味の盜賊。残らず白
状爲よ。萬民を苦むる賊徒。狩捕するが御上へ奉公。此理を能

「やはら」 やはらかき詞
をいふ。

「盜賊は國の鼠」 いまは

しけれども千古の格言なり

いつか絶ゆる時あらんや、

古語にてもありさうなれど

今おもひあたらず、社鼠と

いへる語、意味たり、

「只用心にしくばなし」此

語頗る味ひあり、諸事然る

べし、

「取らるゝ油斷があればこ

そ云々」此語亦味ひあり

「石川や濱の眞砂は云々」

これ彼が辭世の歌として諸書

に見ゆたり、第五句「つく

まじ」としだる方正しけれ

ど、俗に改めたるなるべし、

川柳に「五右衛門は三十一

度しかみ面」なるほど、釜

の中にて詠みしとせば、一

辨へよと。和を以て問掛くる。五右衛門少とも悪滅ず。詞御尤
 の仰せ。殊に彼に御老體。相役當馬殿の思召にも。子は不便に
 無いか。苦痛さするを思ぬかと。御下しみも有るべきが。譬て
 申さば盜賊は國の鼠。捕盡すに盡されふや。詞僅か手下の五十
 七十。狩捕したとて。さのみ天下の助にも成ず。萬民の爲なら
 ば。只用心に如は無し。詞取るゝ油斷有らばこそ。取る盜賊も
 出來申す。五右衛門が最期の一句は斯ばかり。石川や。濱の眞
 砂は盡るとも。世に盜人の種は盡まじ。重ねて御尋ね御無用と。
 何のにへ無く云ひ投げる。氣の毒餘り當馬之亟。詞コレサ五右
 衛門。其身は格別悴が苦痛。又外々へ如何鈎つて。誰悲しみに
 成ふやら。思慮つて白狀し。輕き罪に逢れよと。兵部や妻の心
 をば。思ひ遣つゝ制すれば。詞愚の仰せや。是まで妻子一家に
 も。語らぬ事を言合せ。大事を謀りし一味の同類。何れを夫と

「にべもなく」は少しの
 ればり氣なく、無愛想なる
 をいふ、前に解せり、
 「是まで妻子一家にも語ら
 ぬ云々」よく拒みたり、
 こゝらが太賊の義ともいふ
 べきか、
 「悪事を立ぬく」此心を
 善にむけしめば、世の家徳
 となるべし、
 「こはい夢じやと」
 し方面白し、

名指が成ふか。縦令白狀したりとて。悴が命助かるにも非らず。
 悪事を成ば悪事を立抜く。釜に入らふが火に入らふが。未練な同
 類指す杯とは。思も寄らず。ヤイ五郎市よ。苦痛と云ふて半時
 か一時。死ぬるは切ない物と心得。父が子じや狼狽な。熱いと
 云ふも少との間。強い夢じやと思ふて居よと。賺せば何にも得
 言ず。しくく泣いて居る體に。強き心も弱り果て。共に涙
 に沈みしが。人目思ふて泣顔隠し。詞汝は死ぬるが悲しいか。
 卑怯な。父が子で無いぞと。覺悟爲んと耻しむれば。五郎市涙の
 聲振ひ。卑怯では無い父様。道々も云ふ通り。私はま一度母様
 に逢度い。逢して下され拜みまする。死んだらモウ能逢はぬ。
 夫が悲しうて泣ますると。響り上たる哀れさを。聞く親の身は
 身も世も有られず。わつと泣出す聲に連れ。役人下部も俱泣に。
 袂を絞るばかり也。さすがに猛き五右衛門も。不覺の涙に沈み

「逢ひたか」 あひたくば

「じよさい」 わかりの意、俗に如才又女才など書けど、もと論語の如在より出で、意の轉ぜしなりと。

「惜むに似たり」 命を

「かきを破りて走り入り云々」 母お律のくりごと、五郎市がなまな心に、今はの悦びと歎き、このあたりが此段のなかせ場なり、

しが。氣を取直し。詞夫は何を云ふ五郎市。母は汝が手に掛け。其科ゆる此仕置。逢たか冥途で逢して遣らふ。イヤ／＼夫は後の母様。初の本の母様に。逢して下され逢度いと。泣を消兼ね答兼ね。逢し度ても逢されぬ御上の掟。聞分よ五郎市。爺に女才が有る物かと。縋るも涙見る涙。早鼎には烟立ち。時刻も移ると迫立つる。未練と人や笑はんと。五右衛門突立ち。我子を取つて挟み。時一寸も待は惜むに似り。到底も遁れぬ今日只今何れも念佛頼むぞと。云捨て釜に飛込めば。兵部當馬ははつと氣も落ち。答へ兼ねたる母のお律。籠押破り走り入り。ヤレ五郎市よ。母なるは。可愛の者やと駈寄るを。當馬之亟押隔て。眞の母にも爲よ。縁切つたれば今は他人。其理を以て御祟り無きを有難しとは思はず。何面目に我子喚はり。近寄る事は叶はぬと。差留られて聲を上げ。ノフ情無や耻かしや。我子と云へば盗人

の。妻と定まる耻辱にも。代へて駈出る親心。推量して只一言。暇乞爲て給へ。怨めしいは五右衛門殿。此方の心を直そふばかり。五郎市を戻したに。俱に悪事を見習せ。親殺しとは何事ぞ。仕置も多いに釜煎とは。餘り慘刻胴慾な。斯成る事と知たらば。戻すまい者悔しやと。身を投伏して泣居たる。釜の中より五郎市は。延上りく。母様能來て下さつた。逢度てく。泣てばかり居ました。父様と一所に。モウ此所で死まする。死だ後では人殺し。親殺しと云れても。成た業なら是非が無い。盗人の子と云るゝが。私や悲しい。母様。人が云なら云消して。御前の子じやと云ふて下され。御見物様何れも様。親殺しも人違へ。怪我で有つたと了簡し。御回向頼み上ますと。わつと泣出す心根を。想像つゝ人々も。哀れと俱に袖絞る。五右衛門悲歎の涙ながら。群衆に向ひ聲を勵し。詞此多勢の其中に。財を我

「御見物様いづれも様云々」
「面々我身を手本ぞと云々」
戀娘黄八丈鈴が森の段に、
「御見物様いづれも、様夫を
殺す大罪人云々、此駒を見
せしめに、親の許さぬ云々」
とあるは、これより書ける
なるべし、

「盗みの元は虚言より起り云々」とんだ所で倫理の説法を始めたもの、しかし此順序にて悪事にすむむなるべし、皆様御用心、諺に「うそは泥坊の始め」「つばめを合す筆の先」は帳面などをこまかすをいふ「坂に車をころばす如く云々」頗る妙、こゝに至り、真心ありといへども制する能はず、

「正體も泣いて返らぬ」と
 かけたり、
 「てんどう」は顛倒なるべし、
 「鳴る神」かみなり、

に奪取られ。好氣味とも悪しとも。又仇無き其人は。不便とも思されん。去ながら。面々我身を手本ぞと。思ふて念佛頼むぞや。詞盗の元は偽より起り。偽の始めは身持から。若いお人は取別て。色狂ひ小博奕の。鏝目を合す筆の先。後には手指が働いて。主親の物他人の物。一人の荷擔人二人の味方。三人五人と枝葉着き。止ふと云ふても止られず。坂に車を轉す如く。車は逸く心は跡。悔んで返らぬ釜の罪。我身ばかりか世倅まで。苦痛を爲る悲しさを。推量有つて一遍の。御回向頼み上まする。未練な最後も子故の闇。面目無やとせき上ぐる。心を思ひ諸見物。兵部お律は正體も。泣いて返らぬ親と子の。別れは嘸と知れたり。早てんどうの時來り。釜に油のいきり立ち。玉ざり上がる其音は。鳴神よりも恐ろしく。見る人毎に身の毛立つ。中に哀は五右衛門が。我子をかばふ其有様。親しき二人は氣も狂

阿鼻。「は無間、「焦熱」に焦熱大焦熱の二あり、いづれも八大地獄の一、「見る親よりも見せる子に」一寸よく書きたり、當馬が注意も亦よし、「血迷ふ」上氣してとりのぼすをいふ、「恩愛」は親子、「妹背」は夫婦をさす、「嘶く響き」なるほど大聲なるべし、「五郎市父の先驅せよ」此所芝居にては、婦女子目をふさぎて見るを得ざる所、

亂。道の當馬も顔背け。役目で責る彌藤次も。白狀せよゆるめんと。云たばかりに目も遣す。性根亂るゝ五右衛門が。子を思ふ氣の遣るせ無く。片手に攪んで五郎市を。目よりも高く指上げて。暫し成とも苦みを。爲じとこそは身を悶く。油は次第に沸あがり。五體も朱らむ呵責の責。阿鼻焦熱を此世から。見る親よりも見せる子に。迷ふ心の不便さを。見兼て當馬聲を掛け。詞ヤアゝ五右衛門。とても遁れぬ悴が命。かばい立する見苦しき。跡で苦痛を爲さふより。何故一思ひに先立ん。血迷ふたかと教れば。實尤とは思へども。現在親の手に掛けて。何と爲ん角と爲んと。指上たり下したり。見る苦みは恩愛妹背。叶はぬ時の今端の際。嘶く響き大聲にて。詞五郎市父が先驅爲よと。ぐつと突込む釜の底。其身もともに打累り。狂死せし石川が。釜煎の跡淵と成り。七條河原に名を残す。釜が淵瀨の物語

「石川」淵「河原」

相應

り。傳つたへくて今爰いまこゝに。豊ゆたかの竹たけの一調ぶしに。御代みよ萬歲ばんざいと書殘かきのこす。

「釜かまが淵ふち」 五右衛門ごえもんが刑かぎせられし所ところを釜かまが淵ふちといふ。總解そうげを見よ。
「豊ゆたかの竹たけの一ひとふしに御代みよ萬歲ばんざい」 とかけたり、元文二年げんぶんにじ豊竹座ゆたかたけざの興行きやうぎやうに上あせしものゆゑにいふ、縁ゆかりの語味ことばあじふべし。

三日太平記 松下住家の段

總 解

此段は秀吉少年の頃、遠州濱名の松下が家に仕へしといふ事。三面大黒天(藤吉秋葉社前にて拾ひしとも。松下の家の重寶なりともいふ)の事。藤吉桶皮の胴丸を尾張に求むる事。光秀小栗栖にて土人の竹槍に罹りしといふ事。秀吉關白となりて後、松下に對面せりといふ事。等を取合せて面白く作れる事論なし。次に引く所を見よ。

陰徳太平記 明智光秀主從三人にて。小栗野を過ぎける所に。地下人作。左衛門一。説甚太夫(一作の名は是より取れるにはあらざるか)これを知つて。藪の中より槍を以て突きければ。徹運の悲しさ脇腹にしたゝかに中りけるを。鞍の前輪にかゝり。二三丁は行

き延びしかど。痛手なれば終に死してけり。明智庄兵衛光秀の死骸を泥の中に埋め。首をば夜中京に持上り。智恩院に入つて知つたる僧に埋葬を頼み。其身はいづくとも知らず落失せたり云々。眞書太閤記繪本太閤記等には。光秀を突止めたるを中村長兵衛。光秀の首を落し。慝せしを溝尾庄兵衛とし。作左衛門を光秀の家來として。委く記したれど。異説の書なれば殊更に引く。

眞書太閤記 其年もくれて永祿元年となる。春二月今川家の長臣朝比奈備中守。義元の命として。參遠兩國を巡見に出でけるついでに。濱名に至り松下の家に止宿す。松下珍膳佳肴を具へて。饗應なしけるあまり。軍談に及ぶ時に。泰次松下に向ひていふやう。足下は軍學兵法に達し給へば。定めて兵器の便不便をも知り給ふべし。某聞くことあり。織田家にて新製の鎧あり。至つて調法なりといへり。去年三月富士川合戦に。足下の鎧鎌槍にかけられ。頗

る難義されしと聞く。その様の時に。尾張製の鎧徳あるべしと沙汰せり。如何知り給ふやと問ふ。松下聞きて。いかにもその製作は聞き及べり。いまだそのものを見ず。近日かの國に人を遣し。件の鎧を買求め。徳あらば手本にして製し申すべしと答ふ。朝比奈此義尤も然るべし。早々取寄せ給へと申す。松下手を拍ちて藤吉郎を呼出し。今まで心付かざりしぞかし。汝の本國尾張の新製鎧は。如何なる作りにや。知らずやと問へば。藤吉郎答ふるやう。それは普通の桶縁胴丸より。いさゝか品かはり。右の脇にてくゞりしめ。屈伸自由にせしものなりといふ。松下曰く。汝が故郷の事なれば。速にかの地に趣き。其鎧一領求め來たるべし。不日に發足せよと定めたりける。

松下嘉兵衛尉之綱。尾州に用ふる鎧を得んが爲めに。木下藤吉郎に黄金六兩を渡し。これにて調進なるべし。速に馳上り求め得て。

早々歸るべしと命じければ。藤吉郎承知して金子請取り。明日發足せんと用意をなす。其夜藤吉郎が妻お菊は夫に向ひ。尾州は主の故郷なり。此度彼地に赴き給ひなば。長く止り給ふべし。我一人御身を待つ事あたはず。願くば身の安堵をせさせ給ふて。しかる後發足し給ふべしといふ云々。藤吉郎此上は又拒むるに及ばず。印(離縁の)には究竟のものこそあれと。大黒天を取出し。菊にあたへて曰く。三面大黒天は三千人の司となるといへり。我これを汝に與ふ。よく／＼祈りて富貴を得よ。菊が曰く。御身これを得たまひしなれば。故郷に持かへり祭りたまふべし。妾には此像に望みなしとて。手だに取らず。藤吉郎あざ笑ひ。我志す處。いかでか大黒の力をかるべき。三千人はいふに足らず。四海の人の頭となるべき所存なり。此像は土を以て製したるものなり。實に心中の占をなさん。能く見よといふまゝ。彼大黒天を石の上にすゑて。大なる

鐵槌をもつて打ければ。微塵に碎けて散亂せり。藤吉郎莞爾と笑ひ。一面一千人の司となるといへり。今かく微塵に碎きし。一を以て一千人づゝの頭たるべし。汝拾ひ取りかぞへ見よ。凡日本六十餘州の人数は。猶不足ならん。これこそ我望む處なれと申しければ。菊女あきれて詞なし。藤吉郎ふたゝび詞を出さず。其座にて菊女に離別の印を遣し。時刻來りぬと早々出立せしかば。菊女は父の家に歸りける。

さる程に藤吉郎は。濱名を立ちて尾州へと急ぎけるが。つらく思ふやう。我れ終に松下の家を去らんと思ひ立ちしに。此度故郷に歸ること幸なれば。此金を以て身の廻りを取繕ひ。良主を撰みて仕官し。望を達すべし。金を奪ふて再び歸らず。主用を缺く事科に似たれども。大行は細瑾をかへり見ずといへり。かつ松下が爲めに大功を立て。加増を得さしつれども。別に我を賞せしことの

なければ。是式の金を奪ふとも。何の憚る處かあらんと。心を決し喜び勇んで。まづ故郷にかへり父母に對面し。ゆるく事をはからんと欲し。急げば程なく尾州中村に歸り着く云々。

眞書太閤記 徳川公も。彼が嘉兵衛時に世を捨て、三河鳳來寺の麓に閑居す。才に誇らざるを感じ給ひ。重ねて仰せけるは。今關白秀吉公。天下の武將として。普く四方の敵を亡し。天下一統せらる。然れども元卑賤にして。中村藤吉郎高吉と云し時。足下に仕へ恩澤を請けられし由。今年北條家を征伐し。今此所に御逗留ある故。幸ひ足下に對面し。其恩を謝せん事を宣ふ故。出仕致さるべしと仰せありければ。松下以ての外に怒つて。秀吉今關白に上り。天下を掌握すれども。元は我家の奴なりし所。我を欺き桶皮胴の着長鎧を求めんとて。料金を奪ひ逐電せし曲者。僥倖を得て武將となりしこと。前代未聞なり。君子渴するとも盜泉の水を飲まずと。

今彼が勢強大なりとて。我れを招くこと奇怪千萬。これに對面せん事。勇士の耻づる所なりとて。出仕すべき氣色なし。徳川公も種々諭し給へども。敢て承引せず。此旨殿下へ言上にぞ及ばれける。殿下暫く御思案ありて宣ひけるは。松下が申す所一理あり。只これ一途の了簡なるべし云々。予今實性を顯し。官職に係らず。昔の中村藤吉郎にて對面し。恩を謝したく思ふ事を。松下に篤と申し含め。伴ひ給はるべしと仰りければ云々。殿下忽ち二疊臺を下り給ひ。松下を上座に請じ。某中村藤吉郎なり。往昔は貴殿の恩澤によつて。身を立つるに及び。運に乗じて四方の強敵を征し。既に泰平に治めたり。幸ひに貴殿未だ存命にして。今拜謁する事は。悦び此上なし。これ迄謁せん事を欲すれども。政事に間隙なく。其儀に及ばず。延引せし段許し給へと。禮義正しく宣ひければ。松下此所ぞと思ひ居たりしが。覺えず。頭を下げ。磐石を以て押さる。如

く。一言を發せんとすれども。舌縮みていふ事能はず。さしもの松
下大に驚き。心の中に。我れ秀吉を侮り。耻めてと思ひ居たれども。
彼若年の頃は卑賤ながら。其顔色異相にして。凡人ならずと思ひ
しに。果して世の動亂を鎮め。今武將となり。關白太政大臣に至り。
人臣の官を極めたり。其德無くんば其職に居ること能はず。然る
に我れ地下人の分際として。かゝる高官の人を下座に置き。我れ
上座にありし恐れにて。口を開く事能はざるか。これ官位の威德
ならんと。忽ち信伏して座を下り。脇坂中務大輔に向ひ。某過つて
禮義を失せり。殿下幸に御免ありて。本座に直らせらるゝ様。言上
給はるべしと述へければ。脇坂かくと申し上げければ。殿下二疊
臺に上らせ給ふ云々。

此淨瑠璃は。明和四年十二月四日。竹本座の興行に上せしものにて。
作者は近松半二。三好松洛。八民平七。竹本三郎兵衛。

三日太平記
松下住家の段

松下住家の段

「跡に心はさつき闇」
つきの名をかけたたり、五月の闇は常より暗きもの、心の闇くなるをいふ（さつきの名は光秀が「ときは今雨が下しる五月かな」の句にとれるか）
「心のふしも猛々しく竹槍かたげ」 縁あり調あり、味ふべし、
「内は白木の卒都婆」
かけたり、卒都婆は梵語、略して塔婆ともいひ、圓家靈廟など種々に譯す、こゝは位牌の意なり、
「エ、聞えぬぞや我夫云々」
此歎き夫を思ふ誠、よくあらはれたり、光秀の妻照子は、貞節の女なりしといへるより、かく書けるなるべし、尼が崎の段の總解を見

跡には心さつき闇。迷ひはぐれし我子の尊。餘所には聞どとや
角と。案じ入たる折からに。立歸る一作が。心のふしも猛々敷
竹鎗かたげふらくと。戻りかゝりし我家の内。見馴れぬ女の
只一人。しかも愁に沈む躰。子細あらんと這入もやらず。戸口
に伺ひ聞ぞ共。内は白木の卒都婆を出し。エ、聞えぬぞや我夫
詞忠孝の二字こそ武士の刀脇差。必ず忠義忘るなど。我子へ常
々教訓の。其詞には引かへて、主を討たる大悪無道。天罰いか
で遁るべき。淺間しい死を遂給はんと。思へば身も世も有れぬ
悲しさ。詞所詮淵川へも身をしづめ。其憂目を見まい物と。我
身の覺悟は極めても。情なきは御身の上。主殺しの大罪人と。
なからん跡に誰有つて。とび吊はん人とても。名のみをせめぞ

「なからん跡」は死後
人とても名無の心と

かひたり、
「盡せぬ縁と、嬉しさよりは
悲しさの云々」さもあら
んあはれに覺ゆ、

「重大郎」の事は繪本太
功記の總解を見よ、

「五に一物隔ての一間」父
子聞くは一つにして心を異
にす、

石碑に残し。無縁の人の回向でも。請なば露も後世の爲と。詞惜
からぬ身を捨もせず。石碑營む其中に。ふしぎにも眞實の。父
様に廻り逢ひ。此家へ來りし其日もさらず。お前にあふは盡せ
ぬ縁と。嬉しさよりは悲しさの。猶餘り有る因果な此身。眞實
の親にさへ。詞連添ふ夫は武智十兵衛光秀と。云れぬ様に成果
しも。皆お前の悪心故。何にもしらぬ重大郎迄。俱に悪名蒙る
のみか。行衛なふ成たるは。親の悪事を疎み果。討死でもなし
つるか。可愛の者やいちらしやと。夫を恨み子を慕ひ。聲をも
立ず伏沈む。始終の様子内と外。聞居る一作聞居る嘉平次。互
ひに一物隔の一間。そつと立切り立忍ぶ。一作は何氣なく。只
今罷り歸りしと。ずつと這入ばこなたは悔り。あたふた卒都婆
押かくし。涙とぐめて立向へば。一作わざとふしん顔。詞こり
や見馴ぬ女中様。親父様はどこにござると。聞てさつきが傍に

「いふ中見付る竹鎗の云々」
此趣向面白し、總解を見よ、

「小栗栖の村はづれ藪垣越
しに云々」 光秀山崎の合
戦にまけて、落延ぶる途中、
小栗栖にて土民の竹槍に溜
りて、死せりといふより書
く、總解を見よ、

寄り。詞ム、親父様といやるからは。稚い時別れたる。弟の一
作じやの。アイ成程おれは一作じやが。そふいふこなたは。チ
、合點の行ぬは理り。けふふしきに父様に廻り逢ひ。伴ふて立
歸りし。そなたの姉のさつきじやわいの。ム、すりや兼て父の
咄しに聞た。姉者人で有たよな。ハレ珍らしい對面と。いふ中
見付る竹鎗の。切先そつと取上て。ハテふしきなと眉に皺。持
歸つたる竹鎗に。合して見れば切口の。しつくり合た此切先
扱は小栗栖の村はづれ。藪垣越に手こたへせし。其時に切折れ
しが。思はず我家へ廻り來しか。ハア、嬉しや悦ばしやと。奥
を見入てつゝ立上れば。さつきとどめて。コレ一作。詞一間を
めがけ氣色をかへ。何しに行きやると咎られ。はつと思へどと
ぼけし顔。詞イヤ何しには親父様のお目にかゝりに。ム、父上
のお目にかゝりに行ものが。思はず我家へ廻り來た。此竹鎗と

「はし折り鏡の兄弟」 著
の如く一揃ひの兄弟といふ
意なるべし、もと萬葉集の
福麿が歌より出で、轉じて
ひがめる俗語となれるなら
んか、別記を見よ（なほ他
日考ふべし）

「姉の頼みじや手を合す」
心根のばれにもいぢらし、

は何の事。イヤ夫は。サア其様子は。ハ、ハ、ハ、ハ。はし折かゞ
みの兄弟は。此竹鎗と同じ事で。元が一本。其一駄の兄弟を。
切放して別々に。年月は過したれど。根が一本の竹なれば。
ふしぎに廻りしつくりと。逢たは嬉しい悦ばしいと。申す事で
ござります。ム、すりや久しぶりて姉に逢たが。そなたは夫程
嬉しいか。ハイ嬉しいふなふて何と致しませふ。申し姉者人。お
前がこれ迄添てござつたお連合の。名は何と申します。アノわ
しが連添夫の名か。ホ、武智十兵衛光秀といはふがの。ム、
そんなら最前よりの様子をば、ナ、門口で皆聞た。主殺しの大
罪人。引くつて手柄にせんと。かけ行く向ふに立ふさがり。
詞悪人なれ共夫は夫。そなたの爲にも現在姉聲。それをからめ
捕ふとは。餘り難面い胴慾な。久しぶりて廻り逢た。姉が頼じ
や手を合す。どふぞ此場を見遁して。それ共叶はぬ事ならば。

「鶺鴒の鳥」 のがれ得ぬを
いふ

「山崎」 は山城乙訓郡天
王山の麓、羽柴と明智の合
戦場、

「淀」 は同國久世郡にあ
り、水車を以て名高し、

「八幡」 は同國綴喜郡に
あり、男山八幡のある處、

「木幡」 は同國宇治郡に
あり、京より宇治に至る道、

「狼谷」 も其あたりなる
べし、

「指物」 は鎧の背の受筒
にさして、戦場の目印とす
る小き旗、武用辨略に其由

姉から先へ殺して行きや。さもない中は放さじと。歎きとむれ
 ば屈せぬ一作。詞ヤアおろかく。敗軍の大將。忍んで我家へ
 入込しと。早くも敵へ洩聞え。數千騎を以て此家をかこめば。
 譬此場は遁れても。武智が命は籠の鳥。叶はぬ事と聞く悲しさ。
 詞そんなら敵へ注進有て。人數を以て取巻しか。ハア、はつと
 驚くさつきが胸に。ひつしとひづく陣太鼓。貝鐘に氣も散亂し、
 狂氣のごとくかけ廻り。間の戸障子引明れば。西は山崎淀八幡。
 東は木幡狼谷。山にならび里につゞき。挑燈松明篝火の。かけ
 にきらめく旗さし物。錐を立るの場せきもなく。只鐵錮の如く
 なり。さつきは目もくれ心きえ。コハ何とせん悲しやと。歎け
 ば一作聲高く。詞斯く數萬にて取巻ば。所詮叶はぬ武智が運命。
 やみく／＼人手にかけんより。一命は一作が。申し請けるとかけ
 行を。さへて猶もとゞむるさつき。ヤア面倒なと押退け突退

來制法を述べ、九十餘種の圖を載せたり、
 「錐を立つる場せきもなし」史記に「無立錐之地」少しのすき間もなきをいふ、
 「鐵鋪」鋪は玉篇に、鐘又鋪に同じき由見ゆ、作者はいかなる意にて書けるか鐵の桶の如き積にてもあるか、
 「尋常」すなほの意、
 「其通り」それにてよし
 の意、
 「猿冠者めに使はるゝ猿松」面白し、猿冠者は久吉（秀吉）其顔猿に似たりと、故に稱す、猿松は人を罵り呼ぶ語、
 「茅屋」あばらや、
 「久吉めにわかさうは」此等の事、松下徳川の使者を叱りつけて追返し、又徳川の秀吉に面會を勧めしな、

け。奥をめぐけて逸さんに。行をやらじと追て行く。時もうつさず討手の大將。櫻井小新吾軍勢引連れ大音上。此家の内に。武智十兵衛光秀隠し有る條。久吉公の間に達せり。尋常に擲出せば其通り。異儀に及ばゞ踏込で討とらん。いかにくと呼はれば。一間の内には嘉平次が。うたゝ寝ながら高笑ひ。詞ハ、
 、、大盗人の猿冠者めに。使はるゝ猿松めら。某が茅屋に向ひ。討手呼はり案外千萬。脚切込ば粉骨碎身。早く歸つて久吉めにぬかさふは。龍の腮の玉は取る共。此嘉平治がかくまひし武智光秀。取得る事思ひもよらず。達てほしくば久吉めに直きに來よ。睨殺してくれんと。つぶさに申せと脚踏のばし。起も上らぬ不敵の老人。詞ヤア久吉公に對し過言の行跡。身の程しらぬ瘦浪人。きやつぐるめに討取と。すでに入んとひしめく折しも。詞ヤレ早まるな暫く待て。眞柴大領久吉。松下氏へ直

拵かたるなどより書けるなるべし、總解を見よ、

「龍の恩の玉はとるとも」

最も危険にして取がたきものなふたとへ、莊子より出づ、別記を見よ、

「大領」は大國の領主の意、

「三の圖まで引からげ」は高く尻こぶたまで、端折りするなふなるべし、馬にさんづといふあり、三頭又三途など書く、背の尻こぶたの中高き所を稱す、

「革卷柄」は革にて巻きたる柄の太刀、賤しき者の所用、

「弓矢」なうけて、鐘願といひ、突出といへり、味ふべし、突出す手先兩足に云々の句よくいひたり、此等の事、秀吉關白となりし後、昔の藤吉郎にて、松下

談せんと。呼はる聲に小新五始め。主人のお成と諸軍勢。兜を土に平伏す。暫く有て眞柴久吉。戰場に出立つ姿引かへて。鎧兜も大なしの。裾三の圖迄引からげ。革卷柄の一腰は。弓矢に替る鐘願。突出す手先兩足に。踏かためたる六十餘州。憚る方はなけれ共。主と病に肩臂の。身すばらしくもかつくばい。詞御召使ひの此下兵吉。別れ程經し御顔はせ。拜して言上すべき旨有り。御對面希ふと。身を謙る有様を。じろく見下す嘉平次が。漸起て煙草盆。提て間近く高あぐら。詞今天が下を掌握し。四海に羽打つ大領なれど。いまだ主従の縁切ねば。我爲にはいつ迄も。草履取の此下兵吉。奴姿はさこそく。仰のごとく。いまだお暇給はらねば。御仕着の此わんぼう。一腰迎も古主の賜。我爲の髭切膝丸。肌身放さず其儘に。むかしの形で御對面も。古主の恩を忘れぬ性根。ム、左程古主を忘れぬ汝が。年を

だん せん と。 へばる せう に せんにご じめ。 ぬし の お なる と しょぐん せい。 兜 を つち に へいふくす。 しばらく ありて ほんさい くの せ。 せんじやう ばう に出 だつ すがたき 引かへて。 ころも たいなし の。 すて 三 の づまで 引からげ。 かわまき 柄 の 一 せいは。 ゆみや 弓矢 に かわる かねん。 突出 だつす 手先 兩足 に。 ふみ 踏かためたる 六十餘州。 へが 憚る 方は なけれ 共。 ぬし と びに せうべい の。 せみ すばらしく も かつくばい。 ことご 詞御 召使 ひの 此下 兵吉。 べつれ ほどへ 程經し 御顔 はせ。 ばいして ことじやう 言上 すべき 旨 有り。 ごたいめん 希ふ と。 せみ 身を 謙る 有様 を。 じろく 見下す 嘉平次 が。 ぜんき 漸起て 煙草盆。 ちて 間近く 高あぐら。 ことけふ 詞今天 が 下を 掌握 し。 四海 に 羽打つ 大領 なれど。 いまだ 主従 の 縁切 ねば。 我爲 には いつ 迄も。 草履取 の 此下 兵吉。 ぬし 姿は さこそく。 仰 の ごとく。 いまだ お暇 給はらねば。 御仕着 の 此わんぼう。 一腰 迎も 古主 の 賜。 我爲 の 髭切 膝丸。 肌身 放さず 其儘 に。 むかしの 形で 御對面 も。 古主 の 恩を 忘れぬ 性根。 ム、左程 古主 を 忘れぬ 汝が。 年を

に面會せしといふより書く
總解を見れば明なり、
「主と病に肩臂の」とか
け「身すばらしくも」とつづ
けたり、諺に「主と病には
かたれぬ」

「此下兵吉」は木下藤吉
「四海に羽を打つ大領」四
海に羽を搏つ大鳥といへる
語より書く、もと莊子が大
鵬の寓言（水擊三千里、搏
扶搖而上者九萬里）より出
でたるなるべし、李白が詩
にも「大鵬一日同風起、扶
搖直上九萬里、假令風歇時
下來、猶能簸卻滄溟水」
「わんぼう」は布子、ど
てら、論語に見わたる纒袍
の訛なるべし、
「鬚切膝丸」とは寶刀と
いふ意、これは平家物語叙
の巻に見え、多田滿仲より
傳はれる源氏の二寶劍、さ

經れ共頼出しせず。剩へ我館を。十重廿重に追取卷き。某に敵
對する條。奇怪千萬と。威たけ高にきめ付れば。ホ、御館を出
しより。信永公に召使はれ。爰かしの戦ひに。鎧かぶとを脱
ぐ間なく。股は馬上にすれ破れ。骨身を碎く數ヶ度の軍功。詞

「日にしたがつて立身出世。これと申すも稚きより。兵法軍術御
指南有し。古主のおかけ。とくにも伺公し古への。御恩を謝せ
んと存ずれど。軍務に暫しも暇なく。心に思はぬ延引無沙汰
しかのみならず御館を取卷き。家來共が雑言過言。御立腹は去
る事ながら。詞主を討たる大悪人。武智によつてなす事にて。
全く貴公へ敵對にあらず。逆を以て順を討つ。天が下を盗む盜
賊。順を以て逆を討つ。臣が忠義を推察有て。武智を出し下さ
らば。此上もなき御厚恩。偏に願ひ奉ると。日本國を取りひしぐ。
兩手を土に附々も。始めの過言引かへて。誤り入たる風情なり。

れど、保元物語には、藤丸を鎧としたり、別記を見よ、
「股は馬上にすれ破れ」始終馬上にありて、戦争に従事するをいふ「時靜英雄泣き脾肉」と蜀帝劉備の故事より出づ、

「指南」は教授の意、委しくは前に解せり、

「逆を以て順を討つ」主君を討ちしをいふ「順を以て逆を討つ」弔ひ軍をなすをいふ、順は天理人道にかなひたる正しきこと、逆はそむきたる不正のこと、

「先年桶側の胴丸求め來れと云々」此事は總解を見よ、桶側の胴丸は、胴の左の脇、蝶つがひにて屈伸し、右の脇にて合ふやう作れる鎧なりといふ、

「人を制せんと思へば先己を制す」此まゝの語は見

嘉平次猶も聲あらゝげ。詞ヤアぬかしたり猿冠者め。尤武智主

を討ち。其國を奪ふからは。國賊共いひ逆賊共云ふべきが。左

いふおのれも大盗人。先年桶皮の胴丸求め來れと。手渡しした

る金子七兩。今において鎧も求ず。其儘に打捨る大衛。人を制

せんと思へば。先己を制すといふ。聖賢の道も守らず。しやら

くさい討手呼はり。誠武智が討たくば。先儻が非を改めよ。邪

非道の權威では。いつかな動ぬ嘉平次と。面色筋を顯はせば。

「ホ、ホ、ホ、むかしにかはらぬ氣丈のお詞。一々以て理に當れ

り。斯有んと存せし故。求め來りし桶皮胴。ヤアノ者共。い

ひ付置し胴丸の鎧。早く是へ持來れ。はつといらへて下兜。手

がきにしたる具足櫃。御目通りにかき据れば。嘉平次見るより

立上り。詞主に暇をくれ。館を立退く不屈者。己が勝手のよい

時に。求め來りし此鎧。某が用には立ぬ。持て歸れと足下にか

當られど、これに似たるは
いくらもあり、

「聖賢」は聖人賢者、孔子を聖人といひ、孟子を賢者といふ、すぐれし人、

「下兜」といふは知らず、

雑兵のかむるものをいふか、
「櫃の中、桶皮ならで小櫻の
まだ咲きもせぬ蒼の若武者」
縁の語味ふべし、鏝に小

櫻威あり（尙古鏝色一覽を見よ）
重次郎がこれをつけ

へ、鏝櫃より出でしをいふ、
「今は日本弓矢の棟梁云々」
年季證文の爲めに、久吉が

頭を下げ、之を返して後、
嘉兵次が頭を下ぐ、此趣向

頗る妙、總解を見れば據所
明かなり、

「三拜九拜」は至極の敬
禮をいふ、もと三度拜し、九

度拜することにて、天竺の
禮、佛家より起ると、

踏飛す櫃の中。桶皮ならで小櫻の。まだ咲もせぬ蒼の若武者。鏝ふ姿は武智が一子。ヤレ重次郎かなつかしと。さつきは

輿より走出で。すがり歎けば嘉平次も。案に相違し言句も出ず。

黙して暫し詞なし。久吉猶も手をつかへ。お詔への桶皮胴丸。

延引ながら只今出来。お心に叶ひしや。御所存いかにと詰寄れば。

詞ホ、出かした兵吉。此鏝さへ調へば。かくまひし客人へ。

約束の詞も立つ。天晴ういやつ。當座の褒賞と懷中より。取出

す一札投やれば。這よつて押披き。詞こりや是拙者が年季證文。

ホ、其證文を戻すからは。主従の縁はこれ迄。今は日本弓矢の

棟梁。眞柴大領久吉公。同席も恐れ有りと。庭に飛おり三拜九

拜。こなたは立て悠々と。上座にすゝむ其有様。自然と備はる

武將の權柄。紺のどてらも蜀紅の。錦かゞやく如く也。久吉優

美の聲高く。我賤しくも民間より經上り。當時四海に權を取る

「蜀江の錦」は昔支那蜀江にて産せし有名の錦、今は絶ぬたりと、後にいふべし「我れ賤しくも民間より云々」此事も太閤記より書けるならんか、あまりながくしくなるゆゑ、總解に省きたり。

「大黒天」は梵語にて摩訶迦羅といひ、三寶を愛し五衆を護り、飲食を充饒し福徳を興ふる神、三面六臂なりと、或はいふ大國主の神を音讀せるなりと、いかゞ、此大黒の事も總解にて

も天運とは云ながら。皆信永の御惠。其大恩有る主人を討れ。無念凝たる吊ひ軍。運に叶ひて勝利は得れども。討洩したる大將光秀。草を分つて尋ぬる所。はからず此家に忍び居る由。早速討手に向ふといへども。古主に對し不忠の某。何がな心に叶はんと。思ひ寄たる此土産は。怒りを詫る寸志ぞと。情を籠る明智のことば。はつとこなたは頭をさげ。斯情有る大將共存ぜず。出る儘の悪口無禮。まつびら御免下さるべし。去にてもふしきなは彼等が身の上。現在親の某さへ。最前一間で立聞く迄。武智を聳とは存ぜぬ様子。委しく御存じしられしは。いか成る故と聞きもあへず。詞ホ、それこそは。其忤が肌につけたる守りこそ。則貴殿の家の重寶。三面の大黒天。古へ某此家にて。子守りせし其砌。我懷に育し息女に。付置れし故見覺えたり。其守を所持する忤は。松下氏の縁類と。扱こそ斯は斗ふたりと。

明かなり、

「風なくらつて」 風聞を
きいて、うばさを聞いて
「命數」 壽命

「切羽」 は迫場なりなど
いへどいかい

仰を聞に覺え有る。さつきは涙押ぬぐひ。私が稚い時よりも。
 肌身放さぬ御本尊。則三面一躰なれば。親子三人ちりくにな
 る沖も。元一躰にあひ逢ふ爲めと。重次郎に付置しが。ふしぎ
 にも此家にて。泊り逢たる親子三人。誠に尊き御守りと。悦ぶ
 も又涙なり。櫻井小新五すゝみ出で。詞手に入たる敵光秀。と
 やかく猶豫の其中に。風をくらふて逃延んもはかられずと。云
 せもあへず何さく。運盡たる武智が命數。此家において滅す
 る印。早天文に顯はれたれば。さのみ勞する事なかれ。ヤアヤ
 ア嘉平次。詞天命盡し武智光秀。搦め取て出されよ。早とくと
 くと。仰にはつとは云ひながら。一旦武士のかくまひし。詞の
 義理に立兼れば。小新五いらつて。詞ヤア智舅の縁に引れ。猶
 豫する未練者。イヤ未練はさらく候はず。未練でなくば討取
 るが。但し踏込み召捕ふか。サアくどふじやと手詰の切羽。

「主殺しは從類を絶やす掟」
 主殺しは大逆、昔は其罪三族に及ぶ、
 「さみせられ」 あなどり
 いやしまるゝこと、前に解せり、

こなたの一間に聲高く。詞一宿の返禮に進上申す我一命。請取られよと引明る。一間の内に光秀が。腹に突込む覺悟の刃。ウとゝ様か悲しやと。かけ寄る重次郎女房も。供にかけ寄る右左。すがり嘆くを押退け突退け。詞ヤア眼前討手の手前も恥ず見苦しき此ふるまひ。しされやつとにらみ付け。運盡し武智光秀。立寄つて首取と。引廻す劔にすがり。詞マアく待て下さんせ。わたしは去れた身の上なれば。にらまれても呵られても。しよ事がないと諦めふが。可愛そふに重次郎。いはゞ親子一世のわかれ。暇乞して此子にも。諦めさして下さんせと。云はせも立す聲あらゝげ。詞ヤア親子とは何のたは言。主殺しは從類を絶す掟。某に子が有らば。科はのがれぬ逆磔。そこへ心が付ざるかたわけ者。たとへ久吉が情にて。悴が命は助かる共。我子といはゞ後々迄。主殺しの悴なりと。さみせられんが不便さに。

指添腹に突立つれば」十次郎が死せし事も、繪本太功記の總解を見よ、

「申し父上主殺しにせまいと云々」親を思ふけなげの心、よくあらはれておはれなり、

勘當した親子でない。聞てかなしき重次郎。何私を御勘當とや。ハアはつと斗りに歎きしが、何思ひけん鎧の上帯。解より早く指添腹に突立てば。母は見るより狂氣の如く。アレ情なや何故の切腹と。悲しむ聲に武智も悔り。嘉平次もおろく立寄り介抱す。手負は苦しき息ながら。申し父上。主殺しにせまいと思ふて。勘當するとおつしやるは。忝ふござりますれど。わしや主殺しの子といはれても。やつぱりお前の子に成たい。夫で一所に腹切て死ます程に。もふ堪忍して元の通りの親子じやと。いふて聞して下さりませ。詞申しかゝ様。わしが死だら嘸便りがござりますまい。随分煩はぬ様にして。とゝ様の後吊ひ。わたしが後も逆様ながら。御回向頼み上まする。ア、術なふて物が云れぬ。もふ目が見えぬ。父上はいづくにぞ。かならずく勘當赦して下さりませ。詞申し久吉様。私が體を成敗し。

「だんまつま」は臨終をいふ、四苦八苦の苦みありと、前にいへり、

「初孫の顔初て見て初て悲しい憂目を見る」調あり「我がやうな孝行な者が主を殺す云々」千本櫻に曲んだおれが直ぐな子を、持つたは何の因果しやと云々「十次郎の事は、繪本太功記尼ヶ崎の段の總解に載す、これを見れば、彼れを孝行に作れる事も、彼れの死せし事も明かなり、

と、様の科を赦して。コレ拜ます頼ますと。苦しき體をはひ廻り。あなたを拜み。こなたを拜むだんまつま。惜や生年十三の蕾の花と散うせたり。ハア悲しやと母親は。死骸をいただき聲を上げ。ヤレ重次郎よ恨めしい。父御斗りを親と思ひ。母は親にてあらざるか。夫にわかれ子に別れ。何樂しみの有るべきぞ。我をも連て行けや逆。涙涕歎けば嘉平次も。初孫の顔初て見て。初て悲しい憂目を見る。おりやよくくの因果人。詞コリヤ孫よ。親に勤當請るのが。それ程に悲しいか。我がやうな孝行な者が。主を殺す者の子に。生れて來たはよくくの。業か因果か見せしめか。惜や可愛や残念やと。日頃の丈夫もどこへやら。取亂したる祖父娘。死骸に取付きいだき付き。前後正體伏沈む。始終の歎きに久吉も。かんるい袖を浸さるれば。強氣の武智も恩愛に。くらむ眼をくわつと見開き。詞親の爲とはいひながら。

「怒ちめぐり小栗栖村」と
 かけたり、廻り小車などい
 ふよりなり、小栗栖にて光
 秀が竹槍にかゝりし事、尼
 ケ崎の段の總解を見よ、
 「小西彌十郎行長と云々」
 これ秀吉松下の子準人佐秀
 綱を、一萬石の領主に取立
 てしといへるよりの作なる
 べし、行長は泉州堺の生れ
 秀吉に登用せられて立身せ
 しが、後關ヶ原の戦に石田
 三成に與し、敗して捕はれ、
 京都に斬らる、
 「松永彈正」は久秀と稱
 し、三好長慶の家人なりし
 が、權勢主を壓し、長慶の
 死後、足利將軍義輝を弑し、
 暴威を振ひしが、天正五年
 信長に攻められて、信長の
 城に自殺す、
 「親子の死骸は親子に得さ
 す」 光秀親子と嘉平次親

主を討たる其報ひ。怒ちめぐり小栗栖村。土民の爲め竹鎗にて。
 突留られし磔の。掟は天より給はる刑罰。悴にいでや追付んと。
 きりゝゝと引廻し。詞イザ介錯といふ聲より。早くも一作一
 間をかけ出で。苦もなく首を討落せば。久吉見るより出かした
 く。詞一つの功の立うへは。約束の通り今より主従。小西彌
 十郎行長と。仰せにはつと飛しさり。詞松永彈正にすかされ。
 敵の縁者とながるそれがし。御家來となし下さる上は。一命
 をなげうつて。忠勤をはげむべしと。悦びいさむ若者は。小西
 攝津之守行長と。朝鮮國の果迄も。其名を恐れ敬へり。大領か
 さねて。主殺しの大罪人。竹鎗をもつてつき留たれば。國法は
 早濟だり。親子が死骸は親子に得さす。心まかせに取いとなく。
 跡吊ふて得させよやと。これ重次郎が孝心を。かんずるあまり
 と情の詞。はつと二人は有がたなみだ。猶はてしなき恩愛の。

干、

「火宅の門出」 は世を捨て、出家するをいふ。火宅

は衆生三界の苦みをたとへいふ、大藏法數に三界衆生、爲五濁人苦之所煎逼、而不得安隱、猶大宅被火所燒、而不可能安居、故以火宅爲喩也」

「凱陣」 は軍にからてかへること、前にいへり、

「奴よりなる天下取り」 山陽が日本樂府に「鞆鞋奴、面如狙、舍鞋執旄從風呼、掌心逆理貫中指、六十六州手卷舒、云々」

「わづかの石碑有明の」 とかけたり、小栗栖に石碑あるより、書けるなるべし、

火宅の門出と嘉平次が。髻ふつとおしきれば。さつきもともに

黒髪を。きつて捨たる夫の首。なくく死骸に盡せぬ別れ。早

凱陣と諸軍勢。恐れかしく大將は。奴よりなる天下取り。小

西が忠義武智が無道。今にしるしは小栗栖に。わづかの石碑有

明の。月を残して。三重出てゆく。

は軍にからてかへること、前にいへり、

山陽が日本樂府に「鞆鞋奴、面如狙、舍鞋執旄從風呼、掌心逆理貫中指、六十六州手卷舒、云々」

とかけたり、小栗栖に石碑あるより、書けるなるべし、

日吉丸稚櫻 五郎助住家の段

總 解

此段は。秀吉堀尾茂助の案内にて。間道より進み。齋藤が松葉山の城を陥れしといふ事。清正幼少にして父を失ひ、母の縁にて秀吉の許に養はれ。遂に其臣下となりて。武名を顯はせしといふ事。等々本として作れる事論なし。次に引く所を讀みて本文に及ばゞ。思ひ半に過ぎん。(以下皆繪本太功記を引く)

去る程に。信長の。大軍稻葉山を攻むる事。三日に至れども。東國第一の名城。一夫これを守れば。萬夫破り難き。要害なれば云々。藤吉屹と計策を案じ。己が攻口を舍弟木下小一郎に托し置き。其身は小六政勝。弟又十郎。加次田隼人。稻田大炊。青山新介。日比野六太夫主從七人。間道を経て搦手へ廻らんと。銘々腰に兵糧

を付け。大なる瓢箪に酒を入れ。又十郎に背負はしめ。頃は八月十三日。申の半刻に陣所を打ち立ち。瑞立山に上り。峯傳たひに細道を。稻葉の後牧田に出ける時。中秋の月東に上り云々。辛ふじて一箇の平地に出で。此所にて人々酒を呑み飯を喰ひ。休息せし所に。俄に草木動搖して。一丈ばかりの手負猪。土砂を蹴立て。あれ來る。人々あはやと見る所に。獵師一人跡より馳せ來り。聲をかけて彼の猪を呼かへす。猪ふりかへりて飛かゝるを。咽首にしつかと取つき。山刀を拔出し。二刀三刀つき通せば。猪いよゝ躍り狂ひ。木の根岩石の嫌ひなく。縦横無盡にかけた。りしが。次第ゝに力つき。終に倒れて死したりけり。藤吉此働きを見て大に感じ。近く寄つて其姓名を尋ぬるに。掘尾茂助と答ふ。藤吉手を打ち欣んで曰く。汝が父堀尾忠右衛門と。同じく岩倉の城に籠り。父を助けて。名を顯はしたりし少年ならずや。

堀尾驚き。君は何人にて。我等父子の素性を知り給ふや。藤吉が曰く。我れ岩倉の合戦に。汝が勇壯を感じ。軍中にて名を認め。常に再會せん事を願ふ。信長の郎等木下藤吉郎なり。此度齋藤が稲葉山を攻拔かん爲め。已に此險阻を凌ぎ。城の搦手へ出でんとす。汝我が爲めに勞を厭はず。道の案内をなさば。重て恩賞を與ふべしといふ。茂助大に喜び。再拜して命に隨ひ。稲葉山へ導きける。

さても藤吉主従は。茂助の案内にて道も迷はず。終に稲葉山の絶頂に上り。遙に山下を見下せば。敵城は眼下にあり。藤吉が推量に違はず。嶮岨を頼んで用心の兵一人もなし。さればこそとて主従八人。山を下りて屏際に至りぬれば。一丈有餘の細堀ありて。渡る事能はず。如何はせんとためらひしが。小六郎。加次田。堀尾三人。傍に生えたる大木の柳を。根もろ共に押倒し。これ究

竟のかけ橋なりと。八人何の苦もなく城中に忍び入り。傍をきつと見てあれば雑兵ども十人餘り。兵糧を炊き終り。柴にもたれて臥し居たり。八人の者太刀拔持ち。聲をもかけず。かの雑兵を悉く切殺し。具足を剥取り。銘々着し。齋藤の兵士に似せ。柴薪を積置きたる中へ。悉く火をさし入れ。飯櫃を持ち。攻口へ兵糧を運ぶ有様にもてなし。大手の方へ急ぎける。齋藤方の軍勢。敢て咎むる者もなかりけり。

藤吉郎主従は。終に搦手より大手の堀際へ廻り。今は心安しとて。兼て舍弟小一郎を始め。味方の諸軍へ約束を定めれば。酒器に用ひし瓢箪を。竹の先に結び付け。堀際高く指出し。八人の勇士水門の樋を引上げ。小六政勝潜り出で。こゝより押入り討破れと。手を揚げて。味方を招く。木下小一郎は。兄藤吉が印の瓢箪を見ると等しく。上島主水、淺野彌兵衛、其兵都合六百餘人。堀

際に押寄せ見れば。小六郎水門より味方を招く。すはや此所より攻入れといふ程こそあれ。はやり雄の兵堀の中へ飛入りく。水門目がけかけ入りける。城中これを見て大に驚き。鐵炮矢石を飛ばし。打挫がんとする折柄云々。

抑加藤虎之助。清正が素性を尋ぬるに。大職冠鎌足公の苗裔。左大臣魚名公利仁將軍の後胤。民間に零落する事數代にして。これも尾州愛知郡中村に住居しける。郷士五郎助加藤忠左衛門清忠と稱す。一説に鍛冶屋にして。清正三歳の時に死すと。淨曲はこれより書けるなるべし。が一男にて。秀吉の母方の重從弟なり。秀吉の母は。持萩中納言保廉の息女なれども。その母は獵師治太夫が娘なり。虎之助が父と秀吉の母とは。民間にての親しき從弟なり。さきに藤吉郎洲の股に城を築き。大の城主となりし時。父母親族を招きけるに。彼五郎助が一子虎之助。其時十

三歳。生得剛勇大膽にして。小細の事に拘らず。木下藤吉郎が出世を常にうらやみ。いかにもして武家に仕へ。ゆゑしき働きをなさんものと。日頃月頃願ひ居たりしに。此時洲の股より藤吉郎が招くを。うれしき事に思ひ。五郎助夫婦は中村にとゞまりぬれども。虎之助は藤吉郎の招きに從ひ。洲の股に赴きける云々(此清正の傳は。此作の據所とは異なるれど。ついでなれば繪本太功記を引置くのみ)

此淨瑠璃は。享和元年十月の作にして。作者は近松柳。近松加藏。近松萬壽。近松梅枝軒。

日吉丸稚櫻
五郎助住家の段

「散花の別れをしばし慰むる云々」 夫婦の契りは夢の間に死するゆゑの序、よき文ともおもはれず、

「春の夜寒」 王荊公「金漏香盡漏聲殘、剪々輕風陣々寒」

「然るべう」 は然るべくの音便、
「三指」 はかしこまりて三指なつくこと、禮儀のたゞしきもの、

五郎助住家の段

こそは入にける。散る花の。別れをしばし慰むる。程とや春の名残とは。しらぬお政が千鳥足。詞ヲ、こちの人。爰に居やしやんすか。春の夜寒に酒一ツたへ過ぎて。あつやのホ、ハ、ハ、私とした事がめつさうな。今迄の源次郎様とは違ふ。久吉様の御家來。堀尾茂助吉晴様。侍の女房が。こちの人どふさしやんせとはいはれまい。今から行儀改めて。我夫にはお居聞へござつて。私と一所にしつぱりと。お休なされ遊ばしたら。自らは然るべう存じますると懇懃に。武家の三ツ指手はもちく。ア、しんきやと寄りそへば。吉晴は取て突退け。詞女房去つた縁切つた。エ、語るに及ばぬ汝が素性。五郎助殿が手にかかられし。茶碗屋の主源左衛門は。我爲に義理ある親。殊には隔つ

「最前からのあらまし」云々」
お政の歎き普通には出来た
り、

「武士の詞に二言はない」
これ武士の信、史記に「楚莊
王、輕二千乘之國、而重一
言」魏徵が句に「季布無二
諾、侯贏重一言」
「詮方なくく」とかけ
たり。

敵味方。しらぬ内は兎も角も。知つては片時も添ふことならず
暇の印は此一腰。叶はぬ縁と諦らめよと。立上る裾引とゞめ。
マア〜待て下さんせ。詞最前からの有増は。襖の陰で聞まし
た。とはいひながら情ない。過し逢夜の睦言を。身にしみく
と片時も。思ひ忘るゝ隙もなう。年月隔つ其中に。うつり安き
は殿御の心。もしや見捨はなされぬかと。ほんにあらゆる神様
や。佛様迄無理いふて。案じくらしした甲斐もなう。添れぬ義理
の離別とは。餘り酷いと取付いて。涙先立つくどきこと。色に
引るゝ吉晴も。屹と心を取直し。悔んで返らぬ互ひの縁。重ね
ていふな聞く耳もたぬぞ。スリヤどの様に申しても。ホ、尋ね
に及ばぬ養父の敵は汝が親。縁につながる茂助にあらず。武士
の詞に二言はないと。いひ放したる理の當然。ハアはつとお政
が突詰し。女心の一筋に。詮方涙なくくも。斯と覺悟は夫の

「夫の魂」は刀、男の魂は刀にして、女の魂は鏡なり、
「明くる障子のうちくつろぎ」とかけたり、

「冥途の道をうろく」と云々「よく用ふる句、箱根靈驗記にも「賽の河原をうろく」と迷ふわいのと云々「齋藤龍興」は義龍の子、謀臣二人権を争ひ闘死せしより、國勢日々に衰へ、永祿七年信長に破られ、和を乞ひ城をさけて、關城に遁る、
「稻田山」は稻葉山にて、齋藤の本城なり、美濃の岐

魂。拔手も見せず我と我が。咽にがはと突立れば。驚く茂助母親も。襖あらはに轉び出で。のう何故の自害ぞや。早まつた事仕やつたのふ。詞コレく五郎助殿。娘が自害しましたと。明る障子の打くつろぎ。竹松膝に抱かへ。我子の最期に目もやらす。煙草すばく騒がぬ五郎助。母は詮方泣々も。子負に取り付きいたはれば。お政は苦しき顔を上。詞か様こらへて下さんせ。生て詮ない身の覺悟。思ふ夫に見放され。冥途の道をうろくと。嘸や迷ふでござりませう。親に先立つ不孝の罪。赦してたべと手を合し。啣ち歎くぞ道理なり。始終聞るる五郎助は。手負の方へ見向もせず。夫齋藤龍興が立籠つたる、稻田山の城廓は。凡そ東國第一の名城、一夫是を守れば。萬卒破りがたき堅固の要害。此城を落すには。瑞龍山の峯づたひ。西に聞ゆる瀧の音を。心の當途に谷へ下り。水に随ひ出る時は。搦

阜市の東にありて、金華山といふ、總解を見よ。
 「夫これを守れば萬卒破りむたき」 太閤記の語を取りて書く、總解を見よ、蜀都賦に「緣以劔閣、阻以石門、二夫守隘、万夫莫開、季白が句に「夫當關、萬夫莫開」これより書く、「瑞龍山」は端立山、此事堀尾茂助が、間道の案内せしより書く、總解を見れば明なり、
 「搦手」は裏門のこと、前にいへり、
 「間道」はわけ道、
 「女郎」は女を賤め呼ぶ語、めわらは(女童)の約、めらほの轉なりといふ、
 「天地の間に生ある者子を憐まぬ云々」 含靈有情の子を受する事、和漢の書に多く見たり、引くに及ば

手の水門口。敵の油断は爰一つと。聳の堀尾に餘所ながら。しらす間道聞とる吉晴。敵を攻討つ味方の英氣。ひらくる武運と心の悦び。母は何の氣も付ず。コレくくく五郎助殿。氣が違ふたかそりや何ぞ。娘のお政が此様に。コレ自害して死ましたはいのく。チ、男故に命を果す徒女郎。勘當じや親子でないぞ。エ、夫は餘り胴慾な。可愛い娘が命の際。勘當とは何事ぞ心づよやと伏沈めば。五郎助は聲あらゝげ。詞天地の間に生有もの。子を憐まぬものがあらうか。まして人間。不便になうて何とせう。可愛さ餘つて縁を切り。聳にしらせし稲田山の間道イヤサ我子の勘當。堀尾茂助吉晴殿。とくと承知あられかしと夫と知する五郎助が。恩義を籠し一言に。胸の底意をあらはせり。一間の中より聲高く。詞ヤアヤア齋藤明舜の家臣。加藤忠左衛門清忠殿。木下藤吉久吉。改めて對面せんと。名智の一聲

す、玉藻前に「焼野のきゞす夜の鶴、子を憐まぬはなしと聞く」
 「加藤忠左衛門清忠」 清正の父にして、三歳の時に死す、母秀吉の母と縁あるを以て、抱きてこれによる、よりて清正、秀吉に仕ふることなれり、
 「一聲鶴の間」 とかけたたり、鶴の一聲といふ語より書く、
 「孔子も我子に後れ云々」 孔子の子に後れたる事は論語にも見たり、思ひの火を胸に焚く」とは、如何なる書によりてかけるか、恐らくはおしあてなるべし、
 「運の未然を察し」 にても通すれど「運を未然に察し」と書く方普通なり、
 「五音はづれし音聲」 は正しき音の出でざるをいふ、

鶴の間の。襖左右へ押開かせ。ゆうく然と歩み出で。五郎助に打向ひ。孔子も我子に後れては。思ひの火を胸て焚く。肉身の娘が恩愛に引れ。又二ツには齋藤の。傾く運の未然を察し。稻田山の間道を教たる身の誤りと。古主への言譯に。命を捨るはあつばれく。ホ、ヲ推量の如く。齋藤の恩祿を。食ひこんだる此五郎助が。一命を捨て。イヤ隠されな五郎助。五音はづれし音聲にて。久吉とくより承知致した。ア御心勞の程察し入ると。大地も見抜く木の下が。詞に五郎助張詰し。心ゆるんで思はずも。苦しき息をほつとつき。詞あつばれ名智の久吉殿古主の無道を見限し。拙者が覺悟御覽あれと。肌押ぬげば血汐の腹帯。朱に染なすから紅。見るに驚く手負より。妻はあるにもあらぬ思ひ。ノウ情ない五郎助殿。可愛い我子を先立て。便りなき身の其上に。こなたに別れ何とせう。命を捨すとどう

所謂調子はつれ、
 「大地を見抜く木の下」味
 ひあり、
 「仕様もやう」は仕様も
 様もといへるな、かくなま
 れるにはあらざるか、

「あかの他人」はさつば
 りの他人、あかの事は前に
 解せり、
 「一つ蓮半座をわけて云々」
 一蓮托生の意、八犬傳にも
 「蓮のうてなの雲半座、わけ
 て云々」

「智識」は高僧の意、後
 の善智識も同じ、委くは後
 にいふべし、
 「陀羅尼」は諷誦すべき
 經文の名、前にいへり、

「妹脊」は夫婦の意、

ぞまあ。仕様もやうはない事かと。緋り嘆けば竹松が。頑是な
 き身もおろく聲。詞と様も姉様も。なぜ一時に死しやる。
 ばんも殺して下されと。稚心の孝行心。聞く五郎助は顔詠め。
 詞ヲ、しほらしい事よふいふたなア。吉晴殿。勤當すれば此五
 郎助とは。あかの他人の其女。誰に憚る事やあらん。女房に持て
 下さるか。ホ、ヲ勤當有し其上は。最早縁なき此お政。未來永
 々一ツ蓮。半座をわけて相待べし。ア、忝い。あれ聞たか娘で
 はない。コリヤ餘所の女中。其お詞が智識の引導。先立つ此身
 の經陀羅尼。さはさりながら勿躰ない。親の御恩を露程も。送
 らぬ娘に命を捨て。お情お慈悲の御勤當。餘り冥加恐ろしい。
 母御弟吉晴様。未來は女夫でござんすぞへ。せめて別れにし
 くと。顔見て死たい我夫と。苦しき體をはい寄せて。じつと
 見かはす目の内に。つきぬ妹脊の名残の涙。餘所に見る目もい

「血迷ふ」 ば上氣するをいふ、

「ぐわんじょう」 すこやかに丈夫なるをいふ、種々の字をあて用ふる事、前にいへり、
「命一つを三方四方」といひて「切かけられし」とつづけたり、
「今世一旦」 ば此世かぎりの意、

ちらし。何思ひけん五郎助は、娘の首を討落せば。是はとばかり驚く人々。茂助は手負に詰寄て。詞血迷はれしか五郎助殿。逆も助からぬ女なれど。首を討れし所存はいかに。ホナ、賤しき鍛冶の職人とは成果れど。元は齋藤明舜が家臣。加藤忠左衛門清忠。血迷ひしとは何のたはごと。サア木下藤吉殿。齋藤の息女萬代姫が首。心を定て實驗あれと。我子の首を引寄せて。差出す老の五調作り。久吉はつと感じ入り。ホナ、出かされたり。命一つを三方四方へ。切かけられし妙策頓智。久吉違背あるべきか。春長公より仰を受し。萬代姫の首。木下藤吉請取たり。去ながら。義理は今生一旦にて。魂去れば恐れはなし。斯くつらなりし重縁一家。親子は一世其首に。とくと名残を惜まれよと。情の詞に五郎助は。子故に迷ふ輪廻の繼。こらへこらへし悲しさを。たもちかねて大聲上げ。始めてわつと伏轉び。

「極樂淨土の東門を忠臣貞女に云々」天王寺西門の類「常極樂土東門中心」より書けるなるべし、妹青山に「忠臣貞女の操を立て、死したる者と高聲に、娼窟の廳を名乗つて通れ」これより書けるならんも、劣りて覺ゆ、
 「花の盛の娘をば首打落す云々」玉藻前に「あたら鬢を胸慾に、首打落して手柄顔云々」
 「百億万」百層倍」相應す、
 「御首題」は題目即ち南無妙法蓮華經、

我子の首を抱きしめ。詞ヲ、娘よく死んだ。出かしたくく
 なア。コリヤ徒ゆるに命を果す。不孝ものじやと思ふなよ。齋
 藤の息女。萬代姫様の御身がはりに。立て死だは。古主へ對し
 て大忠臣。親は不忠に無殘の最期。子は又忠義に命を果す。果
 報もの孝行もの。極樂淨土の東門を。忠臣貞女に命を捨た。手
 柄ものじやと名乗て通れ。息あるうち心得心させ。殺したいは
 山々なれど。可愛さ故に勤當と。いふた詞を反古にせまい。茂
 助殿と夫婦にしたさ。じつところへてむごたらしう。花の盛りの
 娘をば。首打落す親の氣は。コリヤどのやうにあらうと思ふ。
 健氣に死だ此の娘。譽てやつて下され聲殿。見苦しい死顔を見
 て。必ず愛想盡さずとも。思ひ出して折々は。香花の供養たの
 みます。こなたが手向の一滴は。娘が爲の善知識。百億萬の御
 首題を。唱ふるよりも百層倍。嬉しう成佛するはいのと。死る

「幾千代祝ふ尺長」
といへり、

「恩愛別れの血の涙」
即ち愛別離苦、

「雨車軸」は大雨の降る
をいふ語、もと佛典より出
てたり、前に解せり、

今端の際までも。子に引さるゝ恩愛の。母も思ひに正躰なく。
詞氏も系圖も揃ふたる。武士の種とは露しらす。宵に尋ねてあ
ふた時。鼻さまわしは仕合せもの。立派な殿御持ました。今か
ら武士の女房じやと。髪かみの結むすひやう飾かざり迄まで。幾千代祝ふ尺長も。
心祝こころいひの友白髪ともしろが。何をどふしてかうしてと。樂たのんでゐやつた物。
こんな悲かなしい身みに成なつて。髪かみもかたちも入いるものか。可愛かあひの娘むすめと死し
首くびを。顔かほに當あつて身みにそへて。歎なげけば父ちちも諸もろ共ともに。聲こゑを限かぎりに泣な
つくす。恩愛別おんあいわかれの血ちの涙なみだ。胸むねに磐石いしやく打うつるゝ思おもひ。こたへかね
たる吉晴よしはるが。心こころを察さつし久吉ひさよしも。しぼる袂たもとの雨車軸あめしややく。四人よにんが涙谷なみだ
川がはに。落込おちこむ水みづの逆落さかおし。山やまも崩くづるゝ如ごとくなり。堀尾ほりぞ茂助もすけは涙
を拂はらひ。詞恐おそれ入いつたる五郎助殿ごろうすけどの。忠義ちゅうぎの最期さいご遂すえられし上うへは。茂
助もすけが養父やうふへ義理ぎりも立たつ。後あとに残のこりし御内室ごないしつ。御子息ごし諸共もろとも吉晴よしはるが。
身みに引請ひきうけて養育やういくせん。心置こころ置きなく成佛じやうぶつあれと。縁えんに引ひかるゝ堀尾ほりぞ

「久吉が家臣となし云々」

秀吉が清正を育て、臣下となせしより書く、總解を見よ。

「竹松」の名、虎の助より思ひよれるなるべし、竹に虎」

「聞くも涙の深見草」と

かけ「花壇の陰」とつづけた

り、深見草は牡丹の異名、

夫木集に「紅の色深見草さ

きぬれば惜む心も淺からぬ

かな」

「物の具」は具足をいふ

「金剛力」はつよき力をいふ、もと金剛力士より出

でしなるべし、前にいへり、

「早太の最期」早き最期といふべし、

「死してんけり」は死してけり、んは語り句調の爲

め入れたるなるべし、

が詞。久吉手負に打向ひ。由緒正しき清忠殿が。忘れ筐の此稚

子。凡人ならぬ勇士の拳。久吉が家臣となし。竹松が名も改め

て。加藤虎之助正清と改名し。家名を永く残さんと。慈愛の詞

に悦ぶ手負。虎之助はにこく顔。詞アノ殿様の家來となれば。

今からおれは好きな侍。軍に往たら大將の首。いくつもく切

て見せう。とく様見て居て下されと。聞くも涙の深見草。花壇

の陰に最前より。忍びこんだる永井早太。物の具かため躍り出

で。詞稻田山の間道を。告知したる鍛冶屋五郎助。味方の陣へ

注進と。かけ出す早太吉晴が。立きる切戸虎の助。詞久吉様に

奉公始め。目に物見せんと立上り。飛でおり立つ庭先の。苔む

す石に手をかけて。目よりも高くさし上る。稀代の小兒が金剛力。

打付られて早太が最期。微塵に成つて死してんけり。堀尾茂助は

つゝ立上り。詞稻田山の間道を。聞取たるこそ窟竟一。イデ搦

「袋の中の鼠」は手の中にてのがれ得ぬをいふ語、先づさす敵は今川義元」信長義元を稻狭間に斃して後、稻葉山を隔れて、齋藤を降せしなり、そを取合せあやなして作れるなり、「丹下、中島、善祥寺云々」信長が義元を防ぐ爲め、此七箇所に砦を築ける由、太閤記に見ゆ、竹中砦の段の總解を見よ、「變に應じ機に乗じ」所謂臨機應變、兵法の秘訣、「金言」ば名言の意、佛典に佛の語を金言といふ、これより出でしなるべし、「敵の首は面はじき」以下、子供の玩具によりあやなして書けり、面はじきは、土にてこしらへたる小さき面形のもの、子供のもてあそびにこれをはじく

手より攻入つて。只一戦にかけ崩さん。御用意あれとせき立つ吉晴。アイヤ〜稲田山の城廓は。袋の中の鼠同然。久吉が手裏にあり。先さす敵の今川義元。討取る術ぞ肝要ならん。ハ、ハ、ハ、實に尤仰の如く。目に餘つたる五萬餘騎。わづか味方の小勢にて。勝利を得るの術やいかに。ホ、ホ、ホ、それにこそ計策あり。此桶狭間の戦ひは。主人小田家の一世の晴。丹下中島善祥寺。鷺津丸根を始として。七ヶ所に砦を築き。變に應じ機に乗じ。見よく今に義元が。首引きぐるは瞬く内。氣遣ひ無用と軍師の金言。いざ本城へ出立せん。正清來れとはげます木の下の。はつと勇みの聲高く。詞是から好きの軍事。稚な遊びの戦場にて。敵の首は面はじき。菖蒲刀のつゞかんだけ。切立て〜切まくり。六十餘州はお手車。でんぐ〜太鼓攻つゞみ。見ぬ唐土の名に高さ。千里が竹馬一またげ。手綱はいくりさし

「菖蒲刀」は端午（陰曆五月五日）の節句に、小供のもてあそぶ木作りの刀、勝負の義をよせて、祝ひ用ふるなり。

「六十餘州はお手の中」といふべきを「お手車」といふべきを「太鼓攻つゞみ」とつゞけたり、手車は肩車に同じ、でんぐ太鼓は子守り唄。

「見ぬ唐土の云々」加藤後に朝鮮にて、明軍をふるひおそれしめしより書く、「千里か竹馬」またげ「虎之助の名より書けるなるべし、諺に「虎は千里の藪を走る」竹馬に三種あり、小竹の葉のつきたるまゝを股にはさみて歩むもの、竹の棒の先に馬の首をつけ、騎馬になそらへ、股にはさみて歩むもの、今の乗りて歩むもの、皆子供の玩具なり、こゝは今の竹馬なり、書ぶり面白し。

「鬼上官目には涙の」味ひあり、諺に「鬼の目に涙」明の使者瀧仲細、清正の陣に來りて其威に恐れ、かへりて鬼上官と稱せしといふ、「斷未寛」は梵語、臨終の意、前にいへり、

「甲斐も無常の嵐」とかけたり、無常の嵐は死をいふ、「法の道」を導きとつゞけたり、

「妙法蓮花の露の玉、照すは月の熊本に、正清宮と」緑の語にて巧みに美しく書きたり「月のくまなき」などいへるより「熊本」とつゞけたり、加藤は法華宗、蓮葉の露は清くうるはしきもの、正清宮は清正宮にて、肥後熊本に鎮坐します、なほ前篇八陣守護城の總解を見よ、「神の二葉の」清正公の雅な物語ゆゑにいふ、二葉をうけて「櫻木に傳へて」といへり、本にして傳ふるをいふ、本は多く櫻木に刻むもの、其名櫻の如くかんばしく、後に残るなるべし、此文雅櫻の題號を含む。

詰め引詰め。武名は轟く鬼上官。目には涙の別れ路や。見送る

父は斷末魔。なふこれ今が別れかと。とゞむる甲斐も無常の嵐

ついにあへなく散りて行く。涙なくく妻と子が。手向ける法

の導きは。妙法蓮花の露の玉。照らすは月の熊本に。正清宮と

仰がれし。神の嫩を櫻木に。傳へて今にのこしける。

「見ぬ唐土の云々」加藤後に朝鮮にて、明軍をふるひおそれしめしより書く、「千里か竹馬」またげ「虎之助の名より書けるなるべし、諺に「虎は千里の藪を走る」竹馬に三種あり、小竹の葉のつきたるまゝを股にはさみて歩むもの、竹の棒の先に馬の首をつけ、騎馬になそらへ、股にはさみて歩むもの、今の乗りて歩むもの、皆子供の玩具なり、こゝは今の竹馬なり、書ぶり面白し。

「鬼上官目には涙の」味ひあり、諺に「鬼の目に涙」明の使者瀧仲細、清正の陣に來りて其威に恐れ、かへりて鬼上官と稱せしといふ、「斷未寛」は梵語、臨終の意、前にいへり、

「甲斐も無常の嵐」とかけたり、無常の嵐は死をいふ、「法の道」を導きとつゞけたり、

「妙法蓮花の露の玉、照すは月の熊本に、正清宮と」緑の語にて巧みに美しく書きたり「月のくまなき」などいへるより「熊本」とつゞけたり、加藤は法華宗、蓮葉の露は清くうるはしきもの、正清宮は清正宮にて、肥後熊本に鎮坐します、なほ前篇八陣守護城の總解を見よ、「神の二葉の」清正公の雅な物語ゆゑにいふ、二葉をうけて「櫻木に傳へて」といへり、本にして傳ふるをいふ、本は多く櫻木に刻むもの、其名櫻の如くかんばしく、後に残るなるべし、此文雅櫻の題號を含む。

繪本太功記 本能寺の段

總解

此淨瑠璃は外題の如く繪本太閤記を本として作れる事論なし。されば總解にはすべて同書を引き置けり。これを讀みて本文に及ばず。作者の趣向自ら明かなるべし。

繪本太閤記は眞書太閤記を抄略して作り出せるものながら。馬鹿にはならず。文化年間に幕府より絶版を命ぜられし由。一話一言に見えたり。

惟任光秀再恨信長公

天正十年五月のはじめ。東國より上客徳川家康の入來あるに付いて。信長公の安土大寶院を旅館と定められ。惟任日向守を

以て。これが饗應司に命ぜらる。勿論疎略のもてなしあるべからず。別に仰含めらる。光秀こゝに初めて心を安じ。此度饗應司を命ぜらるゝ事。面目あるに似たりとて。かの大寶院に假の御殿を補理し。壁に畫き柱に彫彩し。奇樹怪石珍花芳草を庭に植ゑ。麟の脯鳳の包焼なしといへども。山海の魚鳥數を盡して蓄設け。正式の飭杯盤の美。金銀を以てちりばめ。其外四方の番所路次の警固。見る人の目を驚かしむ。信長公人をして。其結構を見分せしめ。其善美法に過ぎたるを怒り。光秀を召して仰けるは。汝今度の饗應。いかに心得しや。上もなき華美を盡し。世に稀なる珍器を集め。七寶を芥の如くかざりちりばめ。法外の奔走思慮なき僻事といふべし。禁裏仙洞の勅使下向あらば。此上何を以て饗應に備ふべきや。今度の結構我心にかなはず。是角五郎左衛門を以て。汝に代らしめて饗應司となさん間。汝は坂本

に歸り。休息すべしと仰せ渡さる。光秀これを承り。本意なき事に思ひ。頃日數度か罪なきに耻しめを蒙り。我を惡み給ふこと。何によつてかくの如く甚しきやと。更に怨恨以前に勝り。怒氣顔色に顯はれけるを。氣早き大將早く見咎め給ひ。己が身の過をかへりみず。面色を違へ憤怒の色を露すは。主を何とも思はぬにや。以來の爲めぞ。かれが頭を打つべしと下知し給ふ。近士小姓の面々。顔見合せて立かねたるに。蘭丸すつと立ち。光秀が側に立寄り。御上意なるぞと聲をかけ。鐵要打つたる扇にて。したゝかに打ければ。烏帽子破れて髮亂れ。額さけて血流る。光秀數度の打擲。其恨少からずといへども。これを忍んで退出す。
(なほ三度恨みを含みし由を記す)

惟任光秀圍本能寺

孟子曰く。君の臣を視ること手足の如くする時は。臣の君を見
ること腹心の如くす。君の臣を視ること犬馬の如くする時は。
臣の君を見ること國人の如くす。君臣を視ること土芥の如く
なる時は。臣の君を見ること寇讎の如しとかや。織田右大臣平
信長公。京都四條西洞院本能寺に御陣を居ゑらる。時は天正十
年六月朔日。嫡子三位中將信忠卿。並に源三郎勝長御兩人。式日
の御禮として。本能寺に入らせ給ひ。御父子いと睦じく。御酒宴
數刻に及び。夜に入つて信忠卿。暇を告げ歸らせ給ふ。これなん
御父子の永き別れにてありけりと。後に袂をぬらしける。信長
公は猶も興に入らせられ。輕體細腰の美女を集め。今様を諷は
せ。子の刻過ぐる頃まで。酒宴を催し給ひけるが。何の用心もお
ましまさず。金瓊帳の裡に入らせ給ひ。鴛鴦の衾の下に。珊瑚の
枕押やりて。美婦の玉臂に寄添ひ。臥し給ひければ。近士小扈の

面々は。次の間にぞ寝たりける。早東雲に近き頃。信長公目覺め。枕を上げて聞給ふに。怪しや遙かに人馬の足音。大地を震動し。數萬の軍勢寄來ると思しければ。誰かあると高聲に召されけるに。森蘭丸。飯川宮松。小川愛平候と申す。信長公仰せけるは。小扈共あれを聞け。軍兵數多押寄する音。始めは遠く今は近し。必定此所へ寄來ると覺ゆるなり。何者なるぞ見届け來れと仰ある。森蘭丸宮川愛平。畏つて刀手ばさみ。手燭を取つて椽側に走り出で。四方をきつと伺へば。まだ明けやらぬ東雲に。あやめも見え分かず。仰せに違はず人馬の足並草摺の音。次第くくに近付けば。蘭丸大音にて申しけるは。武將の是におはしまするに。何者なるぞ寬怠なりと呼ばれど。軍馬の音彌近く。今外にや到りぬらんと覺ゆれば。宮松愛平傍に有りけるもの見に馳上り。四方を遙に見てあれば。早東の空しらくと。數千の軍兵本能

寺を目がけ。潮の如く押寄たり。蘭丸もの見の下より。旗の紋は見えざるが。何物の寄來るぞや。宮松篤と透し見て。旗は水色に桔梗の紋。叛逆人は惟任光秀なり。蘭丸驚き奥御殿へかけ入れば。信長公長刀提げ。御次の間まで出給ひ。叛する者は誰なるぞや。蘭丸申す。惟任光秀にて候。さては力なき次第なり。一矢射て腹切るべし。防げや若者共と。寺中へ響く大音にて御下知あり。長刀打捨て弓に矢つがひ給ふ。蘭丸は夜叉の荒れたるが如く。戸障子唐紙踏開き。板敷を足力にて踏ならし。直宿の面々起合へ候へ。逆臣惟任日向守云々。

織田左大臣御生害

此時信長公は。廣椽の際まで進み出給ひ。猶も弓射給ふに。武運に既に盡き給ふならん。弦段々に切れて飛散りければ。弓を投

捨て。大音にて鎗を召す。はつといらへて奥殿より。辻が花の衣着たる。三十ばかりの女房。鎌十文字の鎗を取つて。信長公に奉ると御覽じ。長谷川宗仁やあると召さるゝに。頓て御前に參じ命を待つ。信長公仰せけるは。汝は武士にあらざれば。敵も又これを殺さじ。女原を悉く召連れ。今の中にはやく落行くべし。信長が最後に。女を連れたりといはれんも。此上の無念なり。早とくく。と下知し給ひ。かの女房が持來りし。十文字の鎗追取り。自ら寄來る敵に向ひ。十六歳の昔より。鍛練ありし銚先に。瞬く中に十五六騎。ばたくと突貫かれ。敢て近寄る者なし。時に最前御鎗を捧げし女房は。於能の方とて女にまれなる勇婦なりしが。ともに冥途の御俱せんと。二重のはちまき綾にて結びながし。花田色の玉褌をり。しく引しめ。白柄の長刀かいこんで。廣庭に走り出で。當る敵をきらひなく。すくひ倒し薙落し。暫く

挑み戦ひしが。山本三右衛門に渡合ひ。腰の番ひを突通され。終に討死したりける云々。信長公は奥深く入らせ給ひ。殿中に火を放ち。其中にて御生害ましくける。生年四十九歳なり。

中將信忠卿御生害

信忠卿(二條城にて)も今はかくと思ひ給ひ。前田德善院立以法印を召され。汝は命全ふし。いかにもして此圍を出で。安土に至り三法師君を始め。女共を早く退城せしめ。弟信雄。三七信孝。及柴田勝家。是角長秀。羽柴秀吉。瀧川一益等を集め會し。光秀を追伐し。亡父並に我寇を報じ。死しての恨を晴らすべしと宣ふにぞ。立以涙を流し。謹んで命を奉じ。辛じて圍を出で。安土をさして急ぎける。信忠卿今は心安しと。鎌田五郎兵衛尉正次を召し。我れ自害せば介錯して。我首を火中へ投入れ。かまへて敵に渡

すことなかれといひすて、鎧脱捨て大膚になり。腹十文字にかき切つて。鎌田々々と呼び給へば。正次御後に太刀持そばめ。終に御首打落し。御遺言に任せ奉り。御首を火の中へ投入れ。其儘門前へ立出で云々。時に信忠卿御年廿六歳なり。此君若年にまし／＼けれども云々。

此淨瑠璃は。寛政十一年七月十二日。豊竹座の興行に上せしものにて。作者は近松柳。近松湖水軒。近松千葉軒。

繪本太功記

本能寺の段

「鹿の音虫の音も云々」詠曲班女の句なり、鹿の音虫の音もは、かれぐの序、うらおもては扇に表裏あるよりいふ、扇とは空言やは、あふぎの名のあふ(逢)とは、虚言なりといふ意、此酒宴の事總解を見よ、

「孫殿」は三法師、
 「かなで」はかいなで(舞の約、もと琴より出でしなるべし)音楽を爲すをいふことなれど、轉じて舞にもいふ、

「冥加」は仕合せの意、もと神佛の加護をいふ語、
 「笑つば」は至極の興に入りたる状をいふ語、
 「一滴も及ばぬ」は一滴も飲まぬの意、よろしからず、

本能寺の段

鹿の音虫の音もかれぐ契り。あらよしなや。形見の扇より。形見の扇より。猶うら表有る物は。人心なりけるぞや。あふぎとは空言や。あはでぞ戀はそふ物をく。詞局が一曲出きたく。悴春忠が名代孫殿へ御馳走に。何と面白い。サ、つけくと大盃はつと心得しのぶがお酌。詞蘭丸へさす所なれども。阿野の局が舞の一手。つかれを謝する其爲めに。局へ盃さし申す。是はくふつぐかな一奏。御意に叶ふて。此上もなき身の冥加と。いひつゝ局は御盃。少し引受けさし置けば。春長公笑つばに入り。詞ナニ蘭丸。局が間を仕れと。重き御錠も誂ひなく。詞コハ仰に候へ共。一滴も及ばぬ某。此義は偏に御高免を。ハテ扱吞ぬ所を吞ますが興。肴は汝が望み次第。すりやお肴を下されふと

「何卒此蘭丸に軍勢を云々」
 此事、眞書大閣記にも、繪
 本大閣記にも見ゆざれど、
 蘭丸の明眼をいはん爲め、
 書けるなるべし。
 「丹波龜山」は光秀の居
 城、
 「飛立つばかり有明け」と
 かけ「夜晝」とつゞけたり、
 「榮耀」はもと榮華と同
 意なれど、俗には贅澤をし、
 又贅澤なる我儘をなすにい
 ふ、
 「安土の城の無念を云々」
 信長、光秀を怒りて、蘭丸
 に打たしめたる事等、總解
 を見れば明かなり、
 「窮鼠返つて御身の大事」
 窮鼠猫を噛むといふ語より
 書く、鹽鐵論に「死に再
 生窮鼠噛猫、」
 「龍に翼」虎に翼ともい
 ふ、俗に鬼に鐵棒などいふ

な。こゝ六十餘州を手^てに握^{にぎ}る此の春長。サ、何成^なりとも望^{のぞ}め
 く。ハア、しからは何卒^{なにぞこ}此の蘭丸に。軍勢^{ぐんせい}を四五千ばかり下
 だし給^{たま}はらば。有^{あり}がたからんと相述^{あいの}ぶれば。ム、心得^{こころえ}ぬ汝^{なんぢ}が望^{のぞ}み
 もし軍勢^{ぐんせい}を與^{あた}へなば。さん候^{さみら}ふ丹州龜山^{たんしゅうかめやま}へ押寄^{おしよ}せ。只一戰^{ただいっせん}に光秀
 が首討^{くびうち}ち取^とつて。君^{きみ}の災^{わざひ}をさけ申^{まを}さん。成程^{なるほど}尤^{つと}なる願^{ねが}ひなれど
 も。いらざる心配^{しんぱい}無用^{むよう}く。左^さやうな事^{こと}に骨折^{ほねを}らずと。早^{はや}く
 一盞^{いっさん}傾^{かたむ}けて。暑^{あつさ}をしのが身の養生^{やうじやう}。飛立^{とびた}つ斗^{はか}り有明^{ありあけ}の。夜晝^{よるひる}
 となき樂^{たの}しみの。榮花^{えいけ}にも榮耀^{えいよう}にも。此^この春長^{はるなが}には及^{およ}ばぬく。
 我^{わが}君^{きみ}の御錠^{ごじやう}には候^{まを}へども。安土^{あづち}の無念^{むねん}を散^{さん}ぜんと。一度^{いちど}は謀叛^{むほん}
 の簾^{はた}を上げ。窮鼠^{きうそ}返^{かへ}つて御身^{おんみ}の大事^{だいじ}。ア、道^{みち}は若氣^{わかき}。北國^{ほつこく}には
 柴田^{しばた}勝家^{かついえ}。西國^{さいこく}には眞柴^{ましば}久吉^{ひさよし}。龍^{りゆう}に翼^{つば}の尾田^{おのだ}春長^{はるなが}。君^{きみ}の御錠^{ごじやう}は
 去^さる事^{こと}ながら。蘭丸^{らんまる}殿^{どの}の詞^{ことば}の如^{ごと}く。油斷^{ゆだん}大敵^{たいてき}。ハテサテ。局^{つはね}ま
 でが同^{おな}じ様^{やう}に。いらざる此場^{このば}の長詮^{ながせん}義^ぎ。御客^{おきやくじん}人が嘸^まふらくね

に同じく、強き者に強きを添ふるをいふ。

「油断大敵」 は世の諺、

「帳臺」 は貴人の座所、

室内に高座を設け、四方に帷を垂れたり、

「人目を忍ぶが」 とかけたり、

「そもじ」 そなた、何文字といふは、もと婦人の語にて、足利氏の末に起れる事、前にいへり、

「齋藤内藏之助」 は光秀の妹の子なり、光秀の反するや、これを諫むれども用ひられず、山崎に敗死するや、近江に遁れしが、囚はれて粟田口に磔せらる、

「洛東」 は京都加茂川以東の稱、

「地主のお庭の花ざかり」 地主は地主権現とて、清水寺鎮守の神、同境内にあり、

ぶり。身もほつと退屈。イデ一睡の夢の間の。契はいざと戯む

れて。座を立ち給へば阿野の局。若君いざなひしづく。と。帳

臺深く入り給ふ。後にうつとり蘭丸が。心一つにとつ置つ。思

ひは同じ女氣の。人目忍ぶが寄そいて。詞申し蘭丸様。もふ何

時でござりませうなア。是はしのお殿。そもじはまだ奥へ行か

ずか。アイ。ハテ扱それは不埒千萬。御用もあらん早奥へと。

いふ顔じつと打詠め。詞ほんにまあ女の心と男とは。それ程迄

違がふ物か。兄齋藏藏之助殿にお頼み申して。春長様の奥勤も

あなたのお傍に居たい斗り。今更いふもはづかしながら。去年

の初春洛東の。地主のお庭の花ざかり。姉共に誘はれ。願ひか

けまく初戀の。色も香もある殿御ぶり。觀音様のお仲立。たが

ひの胸の下帯も。とけて嬉しい新枕。かはるまいぞのお詞が。

直に心の誓紙ぞと。片時忘れぬ女房が。お傍に居るがおいやな

俗に麻をかして、母屋をそ
こなひ給ふ神なりといふ。
諸曲田村に「地主権現の花
盛り、それ花の名所多しと
いへども、大悲の光り色そ
ふゆゑか、此寺の地主の櫻
にしくはなし」又浄曲に、若
き男女の戀のいるはを、こ
ゝの花見に歸したるが多し
昔は頗る有名のものと思は
れたり、

「色も香もある」美しくと
ゝのひたるをほむる語、こ
ゝは容貌風采の美をいふ、
「観音様の御仲立」清水
観音は、腰媒人なかつとをしたまへ
り、粹なる佛かな、
「お傍に居るのがおいやな
ら云々」俗歌に「それ程
わたしがおいやなら、痛く
ない様に殺しやんせ、こは
くない様にばけて出る」
「びんとすね木の糸櫻」と

ら。いつそ手にかけて給はれと。びんとすね木の糸ざくら。花も

亂るゝ風情なり。さしもに猛き蘭丸も。心の外の曲者に。取ひし

がれて背撫でさすり。詞イヤもふ何事なふ申せしが。お氣にさ

はらば眞平く。百萬の強敵にも。びく共せぬ某が。斯の通り

と手を突けば。詞エ、又人を術ながらすのかいなア。春長様も

大かたに。斑女が閨のお睦言。お同様の取揖で。出船の相伴。

サアござんせと手を取れば。詞ハテ扱嗜みや。人目を忍ぶ二人

が中。殊に今宵は君の直宿。又の首尾をとふり切るを。無理に

引立て奥の間へ。入るやいるさの月かげに。しのぶのみだれ亂

れあふ。わりなき夢や結ぶらん。早更け渡る夏の夜の。そよ吹

風も物凄く。寝られぬまゝに御大將。手づから障子おし開き。

何心なくしげみの方。見やり給へばさはくと。驚きさわぐね

ぐらの鳥。詞ハテいぶかしゃ。まだ明やらぬ夏の夜に。庭木を

かけ「花も亂る」とつゞけたり、

「心の外の曲者」は戀、

俗歌に「戀は曲者忍ふ夜の云々」

「班女の園のお睦言」冒

頭の謠曲班女をうけて書けり、

睦言は男女がむつび契る、

親しき詞をいふ、班女の事は、

兜軍記琴責の段に載せたり、

「班女の園」は、専ら男に忘れられたる恨み

をいふ、されば琴責の段にも

「班女の園のかこら草」と書けり、

こゝは只「園の睦言」といふべき語に、

班女をかむらせたるまでなり、

「お肩様の取扱て」何の事やら、

「奥の間へ入るや入るさの月影」といへり、

入るさの月影は入り方の月影、

しづのふの亂れみだれ合ふ」と

放れさわぐむら鳥。合點行かじときつと目を付け。あやしみ

給ふ時しも有れ。遠音にひびく鐘太鼓。春長つゝ立ち耳そば立

て。詞アレく次第に近付く人馬の物音。直宿の者はあらざる

か。急ぎ物見を仕れと。仰の下より阿野の局。長刀かい込み走

り出で。詞君の大事に候ふぞや。蘭丸殿はいづくに有る。早く物

見を致されよ。わらはも俱にと表の方。呼はりくかけり行く。

聲に蘭丸一間より。飛んで出れば春長聲かけ。ヤアく蘭丸。

詞叛逆有りと覺えたり。急ぎ物見を仕れと。上意にはつと蘭丸

は。振返り見る廊下の高欄。これ幸ひの物見ぞと。いふより早

くかけ上り。四方をきつと打見やり。詞物のあいろはわからね

ど。此の本能寺を心ざし。おし寄するは。察する所武智光秀。

スリヤ光秀が反逆とな。今こそ後悔汝がいさめ。聞き入れざる

も傾く運命。只此上は防ぎの用意。ハア委細承知仕る。ガたと

つゞけたり、昔忍ぶずり(忍ぶもぢずりと)とて、忍草の莖と葉とを以て、たがひちがひにうち亂して、摺つけたる織物あり、其形亂れたれば「忍ぶの亂れ」などいへり、伊勢物語に「春日野の若紫のから衣忍ぶの亂れかぎり知られず」陸奥(岩代國)の信天郡の名産といへれど、こはたゞ「陸奥のしのぶもぢずり」などいひかけたるまでにて、産出となすは誤れりとぞ、

「むら鳥」は群れ鳥、

「遠音に響く鐘太鼓云々」總解を見よ、

「廊下の高欄これ幸ひと云々」此關丸が物見、よく畫題となる、

「あいろ」は文色の約、色あひの意に見てよし、

「逆立つ髪」激怒すれば

へ一致に防ぐとも。院内わづか三百餘人。思へばく主君と俱に。蘭丸。我君様。チエ、口惜しやと主従が。いかりの齒がみ逆立つ髪。無念涙の折からに。表の方より森の力丸。廣庭に大息つき。詞御油斷有るな兄者人。武智光秀我君に。多年の恨みを散せんと。手勢すぐつて四千餘騎。左馬五郎を始とし。或は齋藤藏之助。築地間近く押寄せて候ふと。いふ間もあらず蘭丸は。其まゝひらりと飛おりて。我君には恐れながら。防ぎ矢の御用意有つて然るべし。イデ某がかしこに向ひ。一當あてゝ眠りを覺さん。力丸來れと兄弟は。飛が如くにかけり行く。後打見やり春長公。此上はふせぎの一矢。先づさし當つて一大事は三法師。詞ヤアく宗祇。若をいざなひ早く。御錠の下にかいしく。しのぶ諸共茶道の宗祇。若君いだき參らせて。足もわなく胸ふるひ。しのぶも俱にうる付く所へ。多勢を切り抜

髮逆立つといふ、史記刺客傳に「士皆瞋目、髮盡上指冠。」

「左馬五郎」は光秀の弟左馬之助光春に當つ、

「築地」は今の土塀の如きもの、

「防矢」は落行く時、追撃する敵を防ぐ爲め、射る矢の事なれど、こゝはたゞ敵を防ぐに射る矢をいふ、

「三法師」は信長の孫にして、中將信忠の子信秀の幼名なり、實は此時安土の城にあり、

「宗祇」は宗仁に當てたり、總解を見よ、宗祇は文龜二年、箱根の湯本にて歿せし、有名なる連歌師、わらいものなかつぎ出したもの、何事も總解を見よ、

「阿野の局」此局のはたらきし事は總解を見よ、

け阿野の局。其身は數ヶ所の痛手ながら。血に染む長刀かい込んで。心も強に立戻り。詞申々我君様。最早敵は込入つて候へば。君にかはつて一軍。御身を遁れ下さるべしと。口にはいへど御名残り。涙彌増す斗りなり。詞ヤア愚々。なま中身を遁れんと。返つて名もなきやつ原に。首を渡さば死後の耻辱。汝は我に成りかはり。宗祇引連れ三法師を。何とぞ守護し落延びて此の簷諸共久吉が手に渡し。我存念をはらさせよ。猶豫は返つて不忠の至りと。仰にわつと泣くづをれ。譬不忠に成る逆も君の御最期よそになし。何と此儘落られふ。此義はお赦し下さりませ。これを思へば自が宵の酒宴の其時に。斑女が閨のかこち言。其一さしのあふぎとは。別れをつけししらせかと。思ひ廻はせばいと猶。かなしいわいのとどうとふし。なげき沈めばお道理と。心を汲んで諸袖を。しぼるしのぶが俱涙。泣く音

「名もなき奴原に云々」名ある武士は、雑兵に首を取らるゝを、無上の耻とし、合はぬ敵とおもへば、刃を交へざりし程なり、川柳に「敵ねらむうち雑兵の手にかゝり」何たる名吟ぞ、世間此事多し、

「存念」 うちみの意、

「班女が闇の云々」 先に班女を舞はしめたるは、こゝに利かする積なれど、一向に其榮はなし、出雲半二などにかゝせたらば

「二さしのあふぎ」一曲(舞)の扇、扇に逢ふをかけ、別れとつゞけたり、いやらし、

「二條の御所」 は中將信忠の宿所、總解を見よ、

「武智光安」 は光秀の叔父なり、齋藤義龍が、父道三を殺せし時、討死せし人なれば、實は世にあらす、

を添ふる斗りなり。數多の切首片手に引きげ。庭先へ立ち歸つたる森の蘭丸。それと見るより春長公。詞ホ、今に始めぬ汝が働き。シテく様子はいかにく。されば候ふ。二條の御所へは武智光安立向ひ。當手の寄手は左馬五郎光俊。采配取てきびしき下知。なれ共味方は必死の勇者。御覽の如く首討ち取つて。一泡吹かせ候へ共。始終の勝利は。ホ、成程く。只此の上は潔よく。死出三途も主従俱に。サア今聞く通り我が覺悟。早く此の場を落延ぬか。但し三世の縁切らふや。サア其義はなア。ヤア縁切るが悲しくば。一時も早く落ち延よ。コレサお局。君の先途を見とぐるは此の蘭丸。片時も急ぎ裏門より。宗祇坊は何をうつかり。ヲット合點。イヤもふ最前から落ちたふてく。氣は上づり。コレくしのぶ殿もお供の用意と。いへば道に忍び夫。いひたい事も面伏。しほれ泣々立ちあがれば。蘭

「采配」の事は前に解せり、

「死出三途」冥途の意、

前に解せり、

「三世の縁切る」は二世

の縁切るといふべき所、句

調の爲めか押あてか「親子

は一世、夫婦は二世、主従

は三世、

「敵の末は根を断ち云々」

枝葉盡くたつさうれば、再

びめざす恐れあるゆゑな

り、左傳などにて見たる語

なり、

「妹と脊」夫婦、

「顔にもみぢのからくれな

ぬ云々」手負ひの耻ぢ悦

ぶ様、一寸よく書きたり、

丸聲かけ。詞しのぶは若の御供叶はぬと。聞いてびつくり驚く

しのぶ。詞エ、そりや何故。ホ、汝にお咎めなけれ共。そちが

兄齋藤藏之助。光秀に一味の反逆。敵の末は根を断ちて葉をか

らす。命を助け其儘かへすはこれ迄。サア是迄君への宮仕へと。

明けて云はねど妹と脊の。中を隔の垣と成る。しのぶが憂身詮

方も。涙ながらに用意の懐劔。咽にがはと突立つれば。コハ何

故と驚く人々。大將春長感じ給ひ。詞ホ、女ながらも天晴の生

害。兄と一つでないけつばく。今日只今春長か仲人し。蘭丸が

宿の妻。心残さず成佛せよと。仰に手負蘭丸も。はつと斗りに

有りかた涙。顔にもみぢのから紅。血汐に染る兩の手を。合は

すも二世の名残りぞと。物言ひたげに夫の方。御大將をふし拜

み。笑顔を娑婆の置土産。あへなく息は絶えにけり。歎をよそ

に御大將。勇を付けんとヤア〜蘭丸。我はこれにて討手を引

「是非も涙に」とかけたり、
「袖の涙漂ひながら」縁の
語、

「あふぎの憂別れ」こゝ

は前の班女の舞をきかせ、
あふぎに逢ふなかけ、秋扇
の歎を含めたる積ならん
味ひなし、も、無理なる句
にて、一向

「見かへる名残云々」半

二が、近江源氏四斗兵衛宅
の段の終りに、これに似た
る句あり、されどこれにま
さる事数等、

「假名書き」

は漢文に對して假名書の文をいふ（假名のみならずも書下しの文は、皆しかいへり）

受け。此場をさらす討死せん。汝は是より馳せ向ひ。敵の奴原
一泡ふかせ。名を萬天に耀せと。いさみ給へば。詞ハア／＼
ハ、ハ、ハ、ハ。仰にや及ぶべき。たとへ光秀何萬騎にて寄すると
も。片はし撫切まくし立て。君の御供仕らん。早おさらばと立
ちあがれば。涙を拂ひ宗祇坊。局をいさめ進むれば。ぜひも涙
に袖の浪。漂ひながら若君を。宗祇が背にしつかりと。これぞ
あふぎの憂別れ。見かへる名残り見送る名残り。また立展るを
蘭丸が。中を隔つる鯨の波。早や亂れ入る諸軍勢。切り立てな
ぎ立て女武者。其名も高く假名がきの。筆にとづめて末の世の。
美談とこそは成にける。

繪本太功記 局注進の段

總 解

此段は。惠瓊矢矧の橋にて。藤吉郎を相せしといふ事。秀吉高松の城を水攻にせしといふ事。秀吉光秀が毛利に遣はす密使を捕へ。密書を見るや否や。事の他に漏れんを恐れて。其首を刎ねしといふ事。惠瓊が毛利と和睦の使者をなせしといふ事。高松の城主清水長左衛門尉宗治が。自殺せしといふ事。等を本として作れるなり。先づ總解を讀み。然る後本文に及ばゞ。何事も明かなるべし。惠瓊藤吉郎を相する事。漢の高祖三尺の劔を提げ。芒陽山に白蛇を斬つて。漢家四百年の奇業を起し給ひしも。其始は泗上の亭に長たりしより興れり。若き時色を好み業にすさみ。人をしなへて之を疎む。中に單父の呂文一人。沛公を相して甚だ尊み。其女呂

顔を與へて沛公に娶す。後其女を呂后と稱し。呂文を呂太公と號す。依つて思ふに。天智天皇に乞食の相ましく。明雲座主に歿死の相ありしも。然るべき所謂あるべし。藤吉郎松下が下知によつて。尾張の國に趣くとて。矢矧の橋の茶店にて。暫く休息したりけるに。遠近の旅人老若男女。打まじりいこひける中に。修行者一人。藤吉をつくぐくと打まもり。傍へ招き其相貌を熟察し。大に驚き申しけるは。足下の相奇なり妙なり。必ず天下に主たるべし。然りといへども。目前見る所賤しき匹夫下郎なり。今戰國の時にあつて。淺井、朝倉、今川、佐々木、齋藤、北條、武田、上杉をはじめ。諸の勇將威を震ひ權を争ひ。天下を併吞せんとする其中に。匹夫の足下に。かゝる尊き相あるこそ不思議なれ。我年來和漢の相書に眼を晒し。修し得たりし相法も。今日はじめて疑ひを起せり。藤吉郎大に笑ひ。我れ今こそかくいやしき身なれ共。いかなる僥倖あつて。立

身すまじきものにもあらず。今の詞後に應ぜば。其時厚く賞すべしと。いひすて、別れける。此修行者秀吉天下一統の時。安國寺の惠瓊和尚とて。十萬石を下したまはり。天下の祈禱所となりけるは。此考相の所謂なりけり。

高松城水攻の事 此時西國には。羽柴筑前守秀吉。毛利の三家と對陣し。去五月の始めより。備中高松の城を圍まれける。此高松の城は郷中にありて。小き平山の上に築き。四面の池沼をたゝへたりき。さしも名を得し兄部川に。血水川大堰井の流れを合せ。此郷中へ堰入れたれば。今五月の末にいたりては。水彌高く森上し。山を浸し丘を越し。浩浩として。一大湖水をなし。今五尺ばかりも水増らば。高松の城水底に沈み。城中の男女老少。生へきもの一人もなく。死を旦夕に待つのみなり。秀吉既に城の有様。難義に及びぬと見給ひ。大船數十艘を櫓にあげ。城中を眼下に見おろし。大筒小

筒の鐵炮を夥しく放ちかけ。熊手を以て塀を破り。乘入らんと下
知しけれども。城中の士卒十分死地に陥りたれば。活くる心は露
ほどもなく。責口を固く守りて防戦す云々。後詰の大將吉川元春
小早川隆景。いかにもして堤を切落さばやと。さまぐ計議評定
ありけれども。寄手大軍にして。しかも軍令甚嚴しく。陣の搆へ堅
固なれば。切落すべき手術もなく。只用もなき長詮義のみにして。
はかゆくべくもあらざりける。時に吉川元春の嫡子。治部少輔元
長進み出で云々。

秀吉安國寺惠瓊に和睦を取計らはしむる事 六月四日早天。秀
吉より使者を以て。小早川が陣に至りけるは。安德寺惠瓊といへ
る僧に。只今急に來らるべし。申し入れたき心事の候とて招れけ
る。此安國寺といへるは。毛利輝元歸依の僧にて。藝州廣島の城下
に於て。大寺の住僧なり。先年秀吉未だ松下嘉兵衛之綱に仕へし

頃。矢矧の橋の茶店にて。秀吉を見て天下を保つべき奇相なりと言けるが。今織田家柱石の大臣として。數萬の軍勢を領し。毛利家と對陣に及ぶこと。此人大業をなす時ならんと。私に思ひ居たりけるが。輝元并に吉川小早川長陣の吊ひとて。五日以前に茲に來り。秀吉には舊好あれば。吊ひたき旨隆景に告げて。秀吉の陣へ來り。互に古へを語り。頗る舊情を催しけり。これによつて安國寺。毛利の陣中に在る事を知りつゝ。使を以て召されしなり。惠瓊何事やらんと。急ぎ隆景に此の事を申し。從者引具し秀吉の陣へ至りける。秀吉惠瓊を陣中に請じ入れ。席を進めて申されけるは。近年秀吉。元春隆景と所々に於て對陣せし事。全く本意にあらず。其故は信長公輝元と水魚の盟約をなし。天下太平ならしめんと思しける所に云々。此旨和僧。元春隆景に申し達し。和平の儀相調ふに於ては云々。我れ爰に出陣して高松の城を攻めながら。清水長左

衛門の首を見ずして和睦せんに。信長公の思し給はん事もいかゞなり。茲を以て。清水宗治には切腹致させ申すべし。此旨元春隆景に。よきに披露せらるべしと仰ける。安國寺委細承領し。退いて毛利の陣へ歸り。元春隆景兩將に對面し。しかゞの由申ければ。元春隆景案外の事なれば。暫くものいはず。思惟して有けるが云々。我々軍馬を發し爰に出張せるは。高松城の難義を救ひ。城主清水を助けんが爲めなり。秀吉堤を切つて洪水を落し。宗治を始め城中の軍民を助け。置かるゝに於ては。望みに任せ和平すべし。これ後卷として。こゝに向ひし詮用なり。宗治切腹と候はゞ。和睦の義思ひもよらず。戦ふは死を俱にすべしと。こゝに於て評議一定し。再び安國寺を以て。此旨秀吉に答へしむ。

清水自害の事 秀吉(安國寺に)近く居寄りて申されけるは。高松の城主清水長左衛門宗治は。高義忠臣並なき武士なり。汝小船に

取乗り城中に到り。我言と兩川の言とを併び説きて。宗治に切腹なさしむべし。然る時は兩家の和議忽調ひ。中國一時に平均すべし。これ又汝が功なるべし。搆へて辭する事あるべからずと申し給ふ。安國寺委細承り。直に小船に打乗つて。城中へ赴けり。此時城將清水長左衛門。難波傳兵衛。近松左衛門尉等甚だ不審し。安國寺のこゝに來るは。さだめて故こそ有つらん。先づ召出して聞べしとて云々。宗治つらくこれを聞いて。涙をはらくと流して申けるは。元春隆景の如き義將は。今の世にあるべしとも覺えず。又兩陣の勝敗を計るに。敵は多勢。しかも信長近日に出張と聞けば。其勢甚だ大なるべし云々。只今自害し此和平調ひなば。死期の面目何事かこれに如かんや。未だ武運に盡ずして。惜からぬ命一つ捨つるがゆるるに。中國の危亡をすくひ。諸民の苦みを助くること。此上の悦びやあるべきとて。筆を執つて秀吉の陣に送る書翰を

認む。

長左衛門尉宗治立上りて。最期の一曲奏んとて。腰刀引ぬき頭にかざし。清き聲して「川船を止めて逢ふ瀬の浪まくら。浮世の夢もならはしの驚かぬ身ぞなかりける」と。謠ひ聲と諸共に。腹十文字にかきければ。郎等與十郎は。刀振上げると見えけるが。即ち首は落たりける。月清入道これを見て「道のへの。清水流るゝ柳かげし。ばしが程の世の中に。心止むるぞおろかなる」と。聲おかしく打諷ひ。つゞいて切腹したりける。時に近松左衛門尉は。船ばたの板敷を。丁々と踏ならし。敵と見えしは群れ居る鷗かひらの聲と聞えしは。浦風なりけり高松の朝の露とぞ消えにける」と。末を少し謠ひかへ。難波傳兵衛諸共に。腹かき切つて伏したりける云々。

局注進の段

局注進の段

「朱名」は夏の異名、「雲かけ隔つ云々」巧みに書ける積にして拙し、浮草の浪に漂ふ如き文なり、「雨に足音」調あり「しめくく雨をうけて書く」、「玉露山三郎」の名は、玉屋山三郎といへる、女郎屋より思ひつけるか、又書出しの、五月雨頃の景色よりつけたるか、「振袖」をうけてならぶ翼や云々といへり、長恨歌に「在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝」ならぶ翼は比翼、第一篇に委しく解せり、榮華物語に「羽根ならぶ鳥となりては契るとも人忘れずばかれじとぞおもふ」連理の事も第一篇にいへり、

朱明の空も一面の。雲かけ隔つ浮草の。浪にたゞよふ。山三郎。又降る雨に足音の。紛れ出るもしめくくと。いとどうさをや重ぬらん。うしろのこなたに玉露が。物音窺ひ立出る。襖もそつと人目の關。盡きぬるにしの顔と顔。なふなつかしの山三様。御身に怪我はなかりしかと。縫り付いたる振袖の。ならぶつばさや連理の縁。妹背わりなく見えにける。詞是は思ひがけもなき玉露殿。何故爰へは來られしな。アイナア。此城中へ入込しも。兄様の深き御思案。お前にあふて力を合せ。眞柴を討てとくれくくの仰せ。首尾よく仕課せ立歸らば。たれ憚らぬ夫婦中。手柄を見せて下ださんせと。夫頼みの女氣は。胸にやるせぞなかりける。詞ホ、我もやだけとはやれ共。一かたならぬ名大將。

「やたけ」は彌益にて、

いよくたけき意。後には矢竹など書き「矢竹心の一筋」など用ふ、

「猿冠者の猿智恵」秀吉の顔猿に似たり、故に猿冠者又猿面冠者といふ、猿智恵はあざどき智恵、初め秀吉信長に仕へんと欲し、其通行の路傍に伏して、草履取たらんを願ふ、信長其顔の猿に似たるを見て、事を爲す敏捷ならんと、乃ち之を許すといふ、

「高松」秀吉高松城を水攻にせしことは、總解を見よ、

「清水殿」は高松の城主清水長左衛門宗治總解を見よ、

「婉嬾」は婉嬾の、うるはしくかばよき様をいふ、

六ヶ敷語を用ひたるもの

猿冠者の猿智恵と。聞きしに違ふ眞柴久吉。此軍配に我々式が

及ばんや。所詮すごく高松へは歸られず。清水殿への申譯け。

只今腹切り相果てる。其方は立歸り。此通り傳へてたべ。さら

ばと斗り柄に手を。かくる夫に緋り付き。詞ヤアく待つてく

ださんせ。姫ごぜの身で敵城へ。お使者にくるも何故ぞ。お前

に逢たさ顔見たさ。死なば一所とかたらひし。私を振捨て死な

ふとは。聞えぬはいなどうよくな。わたしを先へ手にかけて。殺

してやいの我夫と。命惜まぬ武家育。涙いろめく婉嬾の。袂は

戀のふちならん。涙かくして山三郎。詞ヤアいらざるくり言嗜

まれよ。敵へもれては互の耻辱。そこ放されよと突退くる。イ

ヤくく。わたしも俱にと争ふ後。詞ヤレ早まるなと聲をか

け。立出づる眞柴筑前守久吉。詞高松より使者に來たりし玉

露へ。山三郎を返しあたふる。又浦邊へは此書面。久吉が心を

「秋は戀の淵ならん」の句、一寸味ひあり、美女の涙ほど動かす力多きはなし、
「抜群」は他にぬきんでたるをいふ、

「湯王鎌云々」未だ開及ばず、支那の軍談か小説かの人物なるべし、追て取調ぶべし、

「阿野の局」は實は本能寺にて討死せり、其段の總解を見よ、

「形相」なりかたち、
「されば候」さればにて候、

込し。清水殿への送り物。此役目仕課せなば。抜群の高名手柄。早々小船にて歸城せよと。さし出し給ふ情のたま物。其文章はしらね共。一先城へ立歸り。其上生死を決せんと。心定めて押いたゞき。足早にこそかけ出づれば。夫の跡に引添ふて。命の親の久吉様と。悦び足も地に付かず。飛ぶが如くに立歸る。又も聞ゆる陣鐘に。連れてかけくる女武者。金石ならねと湯王鏡萬葉をみだし都より。夜を日に繼いだる阿野の局。久吉公に御見參と。さゝへる組子事共せず。廣庭づたひ歩みくる。ヤア者共。某に逢んと有る女武者。曲者なり共何程の事や有らむ。對面して取らせんず。者共引けと御下知の。聲聞取つて阿野の局。ヤア久吉殿かと。いふを押へて傍を見廻し。音高しく。御自分の形相一方ならず。一大事の注進ならば。敵へ洩れては味方の悲運。心を付けて物語られよと。腹帶しつかと即座の氣付け。

「本能寺に云々」 本能寺の段を見よ、

「子の下刻」 子は午後十二時より午前二時迄の二時間、これを上中下の三刻に分つ、されば午前一時二十分より二時迄の間をいふ、

「水さへ音なき」 真夜中は流るゝ水もとまり、草木も眠るといふ、

「洛陽」 は京都の稱、前に解せり、

「方丈」 は釋氏要覽に寺院の正寢本殿也と見ゆ、これ維摩居士が石室の故事より出づ、後にいふべし、

「味方は薄衣綾錦云々」 太閤記の語より書く、

「修羅道」 は日々争闘を事とする、修羅といふ鬼の住む世界、戦争の意に用ふ、委しく前にいへり、

「劔の山」 八寒地獄「五藏」

サ、ハ、ハ、様子はいかに。何とく。ハア、されば候。春長公

には安土を出立ましめて。都本能寺に入らせ給ひ。中國加勢

の御手配り。諸軍を催す時こそ有れ。逆臣武智が夜討の企

ウ何光秀が謀叛とや。シテく勝利はいかに。ハア、明れば

二日子の下刻。水さへ音なき眞の闇。早や洛陽に亂れ入り。

夢驚かす俄の戦場。太刀や具足もとぼしき寺内。數萬の敵は甲

冑に。身をかためたる小手すね當。味方は薄衣綾錦。こき紅の

玉襷。自ら初め蘭丸兄弟。死地に入つたるはたらき。庫裏方

丈も忽に。血汐くまどる修羅道の。巷に迷ふ築山かけ。射つ射

られつ。切つきられつ劔の山。八寒地獄となる鐘は。五臓を射

ぬく君の弓勢。先手の軍兵一筋の。胞につらなる三人五人。恐

れをなして引退く。詞シテく君には御安舩にてましますか。

氣を付けられよ阿野の局。ハツア。君には御安舩にてまします

皆前に解せり、

「つぎ」 は角にて作り

たる麟の名、貞丈雜記に「つ

のぎといふは、角のきわり

といふ事なり、角にてきわ

りを作るなり、」

「三法師」 本能寺の段の

總解を見よ、

「二條城」 本能寺の段の

總解を見よ、

「張つめし」 をうけて「が

つくり折れて」「心の花」を

うけて「散り行く」と書けり

「壞敗」 とは佛語なるべ

けれど、六ヶ數字を用ひた

るもの、

「某只今切捨てたり云々」

秀吉光秀が毛利への密使を

捕へ、其密書を見て都の變

を知り、人心の動搖を恐れ

て、立所に其首を刎れ、平氣

なよそへりといへるより、

書けるなるべし、

か。心元なしいかにく。ハッア申すも便なき事ながら。運の

つきとて蘭丸殿。田島が手鎧に無念の最後。勝に乗たる光秀方。

味方は残らず討死し。春長公にも御腹召れ。シテ三法師君は。

若君様は細川殿へ落し參らせ。二條の御所も一時に亡び。火中

の煙と失せ給ふ。是ぞかたみの御家の御簾。此上は久吉殿の智略

にて。武智を討取り。なき我君の尊靈に。手向てたべや眞柴殿

と。死ぬる今端の際迄も。君を大事とはり詰し。心の花もがつ

くりと。折れてちり行く貞心貞死。義女の鑑を殘しける。始終

の大變聞く久吉。身體忽ち壞敗に苦しめ。途方にくれて居たり

しが。つゝ立上り大音上。ヤアく旁。我をたばかる女が不敵

只今某切捨てたりと。諸軍の心迷はさぬ。道智人の名大將。先

立つ主君なき人の。生死は同じあづさ弓。とむらひにこそ入り

にける。無常に傾く夕陽は。坊主あたまものびあくび。時刻移

「安徳寺惠瓊」の事は總

解を見よ、

「鷹爪」は鷹の爪として、

抹茶にする上品なる製茶の

銘、

「鉄屑」ひだしの粗茶、

「主腹ばかり肥す」前を

うけての悪口一寸面白し、

「佛の顔も三家の使」と

かけたなり、佛の顔も三度と

いへる語より書く、三家は

毛利三家、

「近がつね」は早くうゆ

るをいふなるべし、

ると安徳寺。エヘン。惠瓊は咳拂ひ。しづく歩み獨言。ハレ

ヤレ此長の日中待たせて置き。返答もせぬ上に。鷹爪はまだな

事。鉄屑一ふく志さへなき大將。主腹斗りこやすと見ゆる。餘

りな釣付けやう。佛の顔も三家の使。歸つて此由。申上んと行

かんとす。ヤアく。安徳寺惠瓊和尚いづれへござる。久吉對

面仕つらんと。聲かけられ。詞いや早愚僧は。生れ付いたる近

がつる。餘の隙入りに。甚腹中窮困にせまり。一鉢の御芳志に

預り度。勝手へ參るといふを打けし。ハテ扱。久吉が志の供養

有る事を。眼前見捨て歸られる。お僧の心底いぶかし。そこ動

くなと眞柴久吉。障子をさつと押開き。上段にかざり置たる金

鴨の。煙も薫する手向ぐさ。心憎しと尻目につけ。ヤア大將の

詞共思へず。出家たる我をいぶかり。動くなどは物をしらざる

今の一言。ヤアいふな惠瓊。都の大變立聞して。郡へ注進せん

「修羅を導く」 は闘争を
なましむるをいふ。

「未前の久吉」 は未然を

知る久吉、

「春長は伊吹山の鬼の再来」

信長は鬼の再来なるゆゑ、

佛教を滅さんと欲し、諸寺

諸山と戦ひ、堂宇を焼き僧

徒を殺せりなど、種々の説

あり、佛者の爲めにする所

ありて、いひ出でたるなる

べし。

「幕下」 は家来といふ程

の意、(もと將軍の臣下の

稱)

「魔王」 は人に災害を興

ふる鬼類、大魔王ありて第

六天に住する由見ゆたり、

ず心底。かくしても隠されまじ。軍勢を引入れ修羅を導く悪僧。

寺領が望か知行が望か。返答聞んと未前の眞柴。屈せぬ惠瓊大

口明きて高笑ひ。詞ハ、ハ、ハ、ハ。ヤアぬかしたり猿冠者。愚僧

をとらへ悪僧とは。何のたは言。おのれが主たる春長は。伊吹

山の鬼の再来。諸寺諸山迄責めくるしめ。佛敵遁れず本能寺の

庭におゐて。のたれ死したる尾田の幕下。主に劣らぬあばれ者

五畿七道でくらひたらず。此中國迄攻下り。民家を苦しめ人種

を。絶さんとする魔王の根元。亡し絶すが佛の役。奇代の名劔受

取れと。はつしと打てばしつかととめ。詞ハ、ハ、ハ、ハ、出家に似

合ぬよき嗜み。童おとりの坊主が悪口。久吉が耳には入らぬ。

誠相手に成りたくば。天地の道理成佛の明らかなる事。さとり

しうへ。相手に成りて取らせんと。飽迄きびしき嘲弄に。奥歯

砕くる無念の眼中。つかくと立寄り。まぢり逆立て息をつき。

「六道」は天上、人間、餓鬼、畜生、修羅、地獄、過去の罪業によりて六道を輪廻し、成佛するを得ざるなり、
 「蓮花衣」袈裟の一名、
 「矢剝の橋にて天下を云々」此事總解を見よ、矢剝の橋は、三河國額田郡の岡崎と、碧海郡矢作との間に架す、
 「算木書物も云々」此語も總解を見れば明かなり、算木は筥竹にて占ふ時、用ふる小さき方柱形の木、六本あり、
 「天眼通」は座しながら千里外の事を見、又微細を觀察する通力、六神通の一にして、前に解せり、
 「郡」は毛利、

詞ヤア威勢につのり。人もなげなる今の悪言。當時安徳寺の大寺を踏へる此惠瓊。童劣りとは何をいふや久吉。ホ、たとへ大寺の名僧たり共。心中に六道の迷ひ有つては。成佛の道思ひもよらず。汝が目より魔王と見抜きし某が。天地の道理を知らせんずと。惠瓊を目がけ。打かけ給ふ以前の蓮花衣。是はいかにとためつすがめつ。見て恟り。覺の袈裟は矢剝の橋にて。天下を得ると。見付け置たる奴殿かと。軻れ果たる斗りなり。久吉につこと笑はせ給ひ。いかに惠瓊老。其時はだいなしの一文奴。算木書物も當にはならぬと貴僧の詞。後のしるしと其時に。申請けたるソレ其袈裟。矢剝の橋にて我相面。見付けし貴僧の天眼通。此久吉が望む出世に有らね共。天より生ずる惠なれば。あしくな思ひぞ惠瓊殿。此上は尾田と郡の和を結ばるゝが出家の役。よもや違變は有るまじと。明智の詞に安徳寺。頭を摺付

「訓狐」は唐書五行志に

「鵲一名訓狐」と見たり

さればみづくの事なり、

「黒どんたる日陰」は久

吉微賤の時をいふ、黒どん

たるは黒ずみたる、

「相見」は人相を見るこ

と、

「仰にしたかひ和談せん」

惠瓊が和睦を取ばからひし

事、總解を見よ。

「矢文」は軍申などにて
矢に結びつけて通はす文、
「血判」の事は前にいへ

けく。ハ、ア理非明白たる御仰。訓狐といへる者は。夜は

微塵の虫をも見れ共。晝は大山さへ見る事能はず。此坊主もま

つ其如く。御身黒どんたる日陰の其時は。よく奇相を見分れど。

今天下に名を得。武威白晝に輝く時は。相見あたはず見損ぜし。

訓狐にひとしき此坊主に。和義の御説は冥加至極。仰せにした

がひ和談調へ奉らん。ホ、早速の會得は道の名僧。一刻も早く

急がれよと。仁者の詞にハ、はつと。天より照らす久吉の。威

勢に恐れ引かへす。道は道なりあきらかな。心てらして立歸る。

後見送つて久吉公。心をこらす軍慮の庭先。見越の松が枝はつ

しと射たる。矢文はいかにと立寄つて。かなぐりひらけば返書

の實名。清水が自筆一紙の血判。つらくと讀終つて。表にむ

かひ。ホ、高松の城主清水氏。眞柴久吉が一書の胸中。射抜き

しは適々。此上は三流を切落し。諸人を助けあたふべし。いざ

「腹一文字に云々」 清水が切腹の事、總解に明かり、

「いたいけ」 は子供の愛らしきさま、

「小知」 は少しの知行、
「數万人の最期をば云々」
此語も水閣記より書く、總解を見よ、

く是へに。清水長左衛門宗治。兼て期したる討死の。弓矢打捨て庭上にどつかと座し。エ、天運強き久吉殿。只今射込し矢文の返書。彌御承知下さる上は。味方の助命頼み入ると。鎧脱捨て。腹一文字に引切る苦痛。夫の跡をしたひくる。妻は手負と見るよりも。のふいたはしや悲しやな。斯した御最期させまい爲め。郡一家の人々より。わたしを以ての御教訓。無になすのみかいたいけな。此子は可愛ふないかいなと。夫に縋りふし轉び。前後も分かす泣居たる。宗治苦しき目を見開き。詞ヤア愚や女房何くり言。郡三家の人々は。某が胸中をよく御存知。そち達親子に今生の。いとま乞をさせんず爲めの御情。ハア、冥加なや有りがたや。一才の時よりも。くらひ込んだる大祿の。恩義はいつか謝すべきぞ。詞夫に引かへ小知の銘々。主恩に命を捨る。數萬人の最期をば。助けん爲めの此切腹。玉露山三が密

「盲龜の浮木」 ば盲の龜の浮木にあひたるが如きよるこびをいふ。涅槃經に「生レ世爲人難、猶如大海中盲龜、值浮木孔」なほ後にいふべし。
 「子故にくらむ」 淨曲にて、勇者の最期に聊も語我子の事に及べば、必ずこれをいふ、これ義を強くせんと欲して、人情を忘れたるもの、ほむべきにあらず。
 「思ひやり梅」 とかけたり。
 「ろくく」 ろくばまるく(圓)の略なる由前にいへり。
 「てうち」 手打ち、あはぶなど、をさなこのする所作。
 「清水わきくる云々」 清水の名を含め、宗治が兄月清が辭世の語ひよ、書く、

書の使、心を込めし久吉の書中。味方に取つては盲龜の浮木。悦べ女房何ほえる。氣をはり詰めて悴をば。よきものゝふに仕立上げ。主君に忠義を怠るなど。高松一の良將も。子故にくらむ深手の苦痛。見るに付けてもいやまさる。夫の最期稚子の。行く末思ひやり梅は。女の淺い心から。大守の仰誠ぞと。期した別れを知らずして。お後をしたひ來たものゝ。暇乞さへろくろくに。言ひたいことの數々を。いつの世いつの添ぶしに。かたらふものぞ情なや。詞アレくく。何もしらぬ稚子さへ。虫がをしへる寢ざめの愛。てうちくは父上の。今端を拜む合掌ぞやと。抱きしめく。ふし轉ぶ女氣を。不便と察する久吉公。こたへこたゆる宗治が。恩愛一度にたもち兼。清水わきくるはらく涙。血水川邊に浪越へて。土砂吹飛ばす如くなり。哀を見捨て眞柴久吉。かしこをきつと打見やり。詞アレくく見

總解を見よ、
「血水川邊に」 清水と涙
とをうけてかく、血水川と
は、高松城のほとりを流る
川、總解を見よ。

「浮世の夢も今日限り云々」
これより以下「心残さぬ」迄
は、宗治及其兄月清重臣近
松三人が、辭世の謠ひの句
を取合せてかけるなり、總
解を参照せよ。
「小梅川隆景」 は小早川
隆景、毛利元就の三男にし
て、吉川元春の弟なり、
「水魚のちなみ」 は水と
魚との如く親しき契りにい
ふ、もと三國志、玄德と孔
明との故事に出てたる事、
前にいへり。

られよ兩人。相圖をもつて川筋の。土俵岩石きらひなく。切つ
て落せばありくと。平地とおさまり城外へ。遁れ出でたる老
若の。悦びの聲鯨波。アレ見物有れと大將の。をしへにはつと
心付き。詞エ、幸い成るかな是に物見と。よろぼひく。腹帯
しつかと白布の。高見をつたひよちのぼり。見開くまぶたに高笑
ひ。詞ハ、ハ、ハ、ハ、女房悦べ。死後の思ひ出此上なし。浮世の夢
もけふ限り。昨日の敵はむれ居るかもめ。鯨波と聞こえしは。
浦風とこそ成にけり。我はあしたの露と消え。清水流るゝ柳か
げ。しばしが程の世の中に。心残さぬおさらばと。白布とかん
とする所へ。詞ヤア、宗治暫しく。小梅川隆景。安徳寺が
利害によつて。尾田家一鉢水魚の因。見届けて成佛有れと。聲
諸共に大將隆景。衣紋改めしづく。と。入來る後に安徳寺。手
に捧げたる白臺は。神文とこそ見えにけり。互に和義を取納め。

惠瓊は神文押いたゞき。詞ハア、目出度めでたくわ和談調だんとのふ上うへは。拙僧せつそうは

お先まきへ歸り。久吉公ひさよしこうの御神文ごしんぶん。兩家りやうけへ指上げ奉らんと。禮義れいぎも

足あしも勇立いさまたち。衣ころもしばつて歸らるゝ。久吉ひさよしは詞ことばを改め。詞りやうけ兩家和

順じゆんに及ぶ上うへは。何をか包ツまん。主君尾田殿しゆくんをだどの。都本能寺みやこほんのうじにおいて。

武智たけちが爲めに御落命ごらくめいと。聲こゑかきくもる一雫しゆく。萬里ばんりに満ちて袖そでし

ぼる。驚おどろく人々ひとぐ制する眞柴ましば。たるみを見せじとつゝ立上り。詞

主人しゆじんの敵武智光秀かたきたけちみつひで。都みやこに上り吊とせひ軍いくさ。三家さんけの助力じゆりきよくあ有るやいかに

と。聞きくより隆景たかかげにつこと笑わらひ。詞詞ホ、軍いくさの備有そなへありながら。手

を空むなしくせし味方みかたの若者わかもの。とき立たて置おいたる弓矢ゆみやの手前てまへ。願ねがふ

てもなき後語ごごの加勢かぜい。詞詞隆景采たかかげさいをなし申まをさん。ホ、ハ、ハ、頼たのも

しゝく。早上京はやじやうきやうの用意よういをなさん。者共ものども早くはやくと御下知おんげちに。加藤正

清始きよはじめめとし。人馬じんばせはしと居あならんだり。愁うれひに沈しづむやり梅うめを。

諫いさめなだめて隆景公たかかげこう。詞父ちちに劣おとらぬ武士ぶしと。小梅川こばいかわが成人せいじんさせ

「主君尾田殿云々」 此秀

吉が信長の死を敵に告げし

といふ事は、眞書大開記よ

り書けるなるべし。

「和服」 は和睦の意、

「一雫萬里に満ちて」 大

なる謗言、

「采をなし申さん」 は軍

兵を指揮するをいふ、采の

事は委しく前にいへり、

「正清」 は久吉唯一の家

來、いつもつよし

「此世の念も宗治」とい

へり
「もうり育つる」もうり

に毛利を含めたり

「空も青々と」をうけて「天

王山のはれ軍」とつづけた

り、山崎のとむらひ軍をい

ふ、天王山は山城國乙訓郡

山礪の北に聳ゆる山

「名を取る射取る云々」取り盡しも一向利かず、

ん。心残さず旅立てと。籠る情につこと笑ふが暇乞。此世の

念も宗治が。忠義の家名稚子を。もうり育る仁者の道。雲切る

空も青々と。天王山の曠軍。名を取る射取る弓矢取る。天下を

鳥の聲につれ。いざや武智を討んずと。いさむ正清兩將も。都

をさして出て行く。

繪本太功記 夕顔棚及尼ヶ崎の段

總 解

此兩段は。秀吉變を聞き。西國より馳上る途中。尼ヶ崎にて光秀の伏勢に遇ひ。栖賢寺へ逃込み。湯殿の剃刀にて髮を落し。俄坊主となりて難を免れしといふ事。光秀丹波八上の城を攻めし時。母を人質として和を結びしかば。城主波多野秀治兄弟。心をゆるして光秀の陣に來りしを。捕へて安土(信長の居城)に送りしゆゑ。秀治の臣等大に怒りて。光秀の母を磔に處したりといふ事。等を本として。趣向を立てたる事論なし。しかして夕顔棚の事は。源氏夕顔の卷に思ひよれるか。文句もそれより取れるものあり。

十次郎光慶の名は。繪本太閤記に「男子則ち十兵衛光慶。今年十四歳なり。次は十次郎と呼んで十二歳」とあるに取れるなるべし。光

慶は少年ながらさかしきものにて。光秀謀反の時、諫めんことを恐れて告げず。且病身なりしゆゑ。丹波龜山の城にのこし置けるが。將軍宣下ありしかば。悦ばせん爲め知らせしに。却つて悲み。病重りて死せりといふ。

操の名は。光秀の妻照子は貞節のものにて。光秀流浪の際。髪を斷り之を賣りて。困苦を助けたりなどいふよりつけたるか。さつきの名は。光秀の句ときは今あめが下しる五月かなより取れるか。初菊の如きは。光慶未だ童なれば。作れる事しるし。

此段の據所を。巨細あげたらんには限りなきゆゑ。左に主要のもの二三を引く。しかして尼ヶ崎の段は有名なる丈。文章も趣向も他に傑出せり。

秀吉尼が崎危難の事。惟任日向守光秀は。羽柴筑前守を討取らんと。吉川小早川の兩將へ密使を通じ。手配をなし置かれぬれど。

元來秀吉等閑のものにあらねば。猶心を安んぜず。翌三日の朝。四王天但馬守。明石儀太夫。兩人を招きて申されけるは。秀吉を毛利の手に討たせん。其手術をなし置きぬれども。彼猿冠者はいかなる計をめぐらし。毛利と和睦し。不日に登り來らんも計りがたし。汝等逞卒數十人を引卒し。秀吉が來るべき道に埋伏し。不意に起つて秀吉を討取るべし。秀吉元來先を心にかくるものなれば。大軍を後に殘し。旗本の勢纔にて登るべし。必ずあやまることなかれと下知しければ。四王天明石の兩人畏り。手勢すぐつて七十餘人。いづれも百姓の體に出立たせ。手拭にて頭を包み。或は菅笠蓑などを蒙り。鋤鍬を以て。尼が崎西の宮の間を。此所かし所に三人五人引分れ。上下の往來飛脚の類に。餘所ながら中國の容躰を聞合すに。秀吉毛利家と和睦濟み。急に上洛せる由申す者多かりければ。四王天も明石も。さてこそ主君の先見違はざりけり。おの

れ久吉手捕にして都へ引くべしと。片唾を呑んで待居たり。去程に羽柴筑前守秀吉は。六月五日未の下刻中國の陣所より。走馬に鞭うちて馳上り給へば。旗本の勇士加藤虎之助清正。福島市松。片桐祐作。加藤孫一郎。平野權平。糟屋助右衛門。脇坂甚内。おくれじと御供に附隨へば。淺野彌兵衛。蜂須賀小六郎。黒田勘兵衛。大谷慶松。神子田半右衛門。仙石權兵衛等。軍勢を引立てく。もみにもんで登りける。

此時秀吉。半刻も早く都へ上り。亡君の御憤りを晴しまるらせんと。宿々にて馬を乗かへ。息をもつがず馳られければ。諸卒我れおくれじとえいゝ聲を出し。御馬につきぬれど。旗本の面々は皆馬を乗倒し。歩立ちになりて走る程に。五丁七丁跡にさがり。四の宮の驛より只一人になつて馳せられけり。爰に羽柴の旗本黒田勘兵衛に養はれし。後藤將監基國が子又兵衛基嗣。此時年長じて

廿一歳。生得聰明伶俐にして。武術兵術群を秀で。世に稀なる奇才なれば。勘兵衛も深く愛し。よになき者と召仕ひける。此時又兵衛主人に向ひ申しけるは。兵庫より上は攝津の地にて。敵地に近し。今羽柴殿諸卒を引立て。一刻も早く吊ひ合戦を營まんと。只一人先に離れて進み給ふは。諺にいふ鹿追ふ獵師は山を見ずと。名將といへども大略を思ふ時は。餘事を見ざるの誤りなきにあらず。若光秀兵を伏せて來たるを待たば。大將羽柴殿の御身の上甚だ危し。君馬武者を以て秀吉殿に馳せつけ。事有らん時助け給はゞ。拔群の大功此上やあるべきと勧めければ。黒田實にもと心付き。騎馬の兵五十餘騎。中にも後藤又兵衛。毛利太兵衛。秦桐若狹。眞先に馬を飛ばし。かけ立く急ぎける。さても秀吉はいよく馬を馳らせ。尼が崎へ急がれける。其道端に百姓ども。七八人或は三五人。鋤鍬を取つて土を運び。草を引退け道の造作する躰なれば。秀

吉馬上より大音にて。汝等百姓ども。奇特にも道を作れるものかな。我れは羽柴筑前守秀吉なり。今都へかけ上り。亡君の吊ひ合戦し。光秀を討ち亡ぼし。やがて五畿内を穩かならしめ。汝等に褒賞を與ふべし。我が軍勢追々跡より來る間。道の修理を急ぐべしといひすて。猶馬を早め。向ふを遙に見給ふに。幾群となく同じ躰なる百姓原。悉く鋤鋏を持ち。等しく道を作る有様。こは敵方の間者ならじと。馬を止めて扣へ給ふに。いづくよりか螺貝の音。一聲ひづく程こそあれ。件の百姓共一面に駈寄り。秀吉を追つ取巻き。農具に仕込みし手槍を取り。高聲に呼はりけるは。羽柴秀吉西國の和睦調ひ。一騎かけ上るべき由。惟任將軍とくこれを察し給ひ。四王天。但馬守。明石儀太夫。兩人命をうけて。此所に相待つ事已に久し。速に頭を賜はるべしと。鎗の穂先をさし並べ。四方よりつめ寄りしは。危かりける次第なり。名將謀士といへども。事匆忙なる

時は危難を生ずるとかや。光秀が計略圖にあたつて。四王天但馬守。明石儀太夫の勇士七十餘人の強兵を下知して。四方を取圍み鎗襖を作り。聲々に只一人の敵なるぞ。近寄つて馬を突倒し。生捕にせよとて。一同にとつと駈寄つたり。此時秀吉鎧踏張り後を見れば。三町ばかり跡より加藤虎之助只一人。韋駄天の如く駈來たる。續く勢は遙に引下がつて跡にあり。向ふを見れば南に別れし小途あり。秀吉運や強かりけん。此處少し人あひまばらなれば。おつと一聲叫ぶと見えしが。一鞭くれて群れかゝる兵士等が。頭の上を一剋に飛こえ。小道をさして三段ばかりも乗抜けたり。取逃したりと士卒ども。一同に追かゝるに。道細くして左右は深田。押合ひ踏合ひ二三人。沼田の中へ轉び落つるを。四王天大音にて。いそぐな者ども。此の道は外へ行くべき所別になし。行留りは廣徳寺。左右に深田あれば。革袋に入れし鼠に同じ。我れ追かけて生捕

り來らん。かたぐはは跡よりつゞく敵兵を。此所にて防ぐべしといひ捨て、駈出す。秀吉は一散に。かの廣徳寺に駈入り。門内より後を見れば。四王天但馬守。遁すまじと追ひ來る。即智の大將馬より飛下り。轡を取つて來し道へ押廻し。太刀を抜いて尻がひのあたりを二所切りたりければ。此馬驚き忽ち飛上つて。彼道を一文字に駈行きたり。向ふより四王天追來る。一筋道をあれ馬に隔てられ。右へすかし左へかはせと。奔馬の勢ひ道幅狭うてせんかたなし。四王天大に怒り。身を沈め前足に兩手をかけ。引かぶつて深田の中へどうと打込み。廣徳寺へと駈行きけり。秀吉はいづれに隠れんと駈見給ふに。元來此寺貧寺にして寺内せばく。身を忍ぶべき隈もあらざれば。如何せんと裏へ出で見給へば。此寺と門を對せし栖賢寺といふ禪寺あり。其内に入込み給ふに。廣徳寺とは事かはり。年經たれども本堂方丈客殿まで。いらかを並べて建て

たりけり。さて隠るべき所やあると。あたりをきつと見給ふ所に。浴室の内に僧等二人。入浴してありければ。急ぎ庫裏の方へ走り行き。衣裝を脱いで椽の下へ投込み。丸裸になりてかの風呂へ飛び入り。僧と共に湯あみしておはすれど。里に離れし禪院なれば。物にかゝはらぬ雲水の僧ども。何にも咎むる者もなし。四王天は。籠中の鳥。今は秀吉何やうの智計ありとも。遁るゝこと叶ふまじと。笑を含んで廣徳寺へ馳來り。四方見廻せど秀吉のおはさねば。心いらつて厨くに至り。寺僧に向つて申しけるは。今此寺へ羽柴筑前守駆込んだり。何れに隠し置きしや。有のまゝに申すべし。惟任將軍の仰を受け。四王天但馬守が向ふたり。陳じて後難を蒙るなど。眼に角たて呼はるにぞ。寺僧等大に恐れ。左様の人。曾て此寺へ來りし事なし。疑はしくば寺中残らず探し給へと申す。四王天言ふにや及ぶ。我れ自ら此寺へ追込みしなり。探しだして見すべしと。

て。本堂客殿残りなく求むれども、不思議なるかな秀吉はおはさ
ず。隣の寺にや逃たらんと。心あわたゞしくかの栖賢寺にかけ入
つて。此所彼所隈々さがし求むれども、更に有所の知れざれば。こ
は心得ず。外に遁ぐべき道もなく。翔なければ。飛んで去るべきや
うもなしと。夜叉の如くに尋ねまはる。秀吉は風呂に隠れ給ふ内。
僧ども皆湯よりあがり。只獨り先より見つけ置きし棚に有ける。
砥石剃刀を取おろし。湯の中にてぬれたる髪を撫まはし。これ則
ち信長公の追福なりと。自ら髪を剃落し。入道し給ひけるを。知る
者更になかりけり。さて脱捨てたりし白き浴衣を身に纏ひ。臺所
へ出で。他國の僧の來りし體にもてなし。下僧下男共の味噌すり
居たるそばに居より。我等も替りて摺り申さんとて。板敷の上に
て味噌をすりてぞおはします。四王天は隈々残りなく。尋ね求む
れども。秀吉のおはさねば。浴室及び臺所へも三度來り。走りまは

りけれども。秀吉の剃髪し。味噌を摺り居給ふとは。神ならぬ身のいかでか知らん。此時加藤清正は。遙に君の急難を見たりければ。宙を飛んで馳來り。大太刀引抜き。あたるものを薙伏せ切伏せ。きつとあたりを見廻せども。主人秀吉は見え給はず云々。(此時四王天清正に討たる)

光秀の母礫の事 丹州本目の山伏。西藏院といふ者をかたらひ。荒木山城守を相添へ。八上の城波多野秀治兄弟へ申し遣はしけるは。此度大臣家(信長)光秀を以て。丹波征伐なさしめ給ふこと。更に一分の遺恨にあらず。只天下一統の功を立て。萬民太平の世を期するのみなり。然らば汝今大臣家の幕下に屬し。忠勤を抽づるに於ては。丹波一國を賜り。波多野家をば相續せしめんと。大臣家の御内存なり。此旨光秀七枚の誓紙を書いて相與ふべきの間。承引に於ては早々に和熟し。一度出城せらるべしといはせける。

秀治等猶これを疑ひ。定めてこれ光秀が謀計なるべしとて。更に以て許容せず。光秀又思惟して。重ねてかの西藏院を以て申しけるは。秀治以下の疑ひを散ぜん爲め。證據として光秀が老母を人質とし。城中へ相渡すべし。秀治此旨信伏し。信長公に屬し。全く丹波平均せば。兩家此上の幸あるべからず。といひ遣しければ。秀治秀尙相談して。光秀老母を以て當城へ送り越す上は。逆心別意の沙汰あるべからずとて。則ち此旨に隨ひ。平和の儀調ひ。同七月二日光秀方より。老母を城中へ送りけるによつて。其翌日右衛門太夫秀治。遠江守秀尙等。八上の城を出で。光秀の本陣に來りぬれば。光秀甚だこれを悦び。双方互に禮儀を述べ。和談の盃酒取出し。良酒宴を催しける。時に光秀兼てより。障子の陰屏風の隈に。力士數十人隠し置き。此時俄に競ひ起り。波多野兄弟を搦め取らんとす。秀治秀尙心得たりと。太刀を抜いて近寄る者を切拂ひ。散々に戰

ひけれども。多數の兵士前後に圍み重つて。兩人を搦めたり。此時右衛門大夫秀治。手疵を負ふて惱み伏したり。其外從者十一人。悉くこれを生捕り。主從共に安土の城へ指上げ。信長公の御下知に任せ奉らんとす。光秀波多野兄弟に向ひて申しけるは。今日のはからひ。約に違ひ不信の振舞に似たりといへども。これ光秀が心にあらず。君命はいかんともし難し。況んや老母を以て質となし。城中に入置きたれば。光秀に於て逆意を抱き。謀計を以て搦捕ふべき謂れなし。汝兄弟主從の命は。光秀が功に申しかへ。是非是非助命の御沙汰申し賜ふべき間。心を安んじ。一度安土へ赴かるべし。就ては波多野相續の儀も。光秀あしくは計ふまじ。早とくとくと勇めけれども。秀治秀尙一言の詞も出さず。警固の武士に誘はれ。安土をさして上りける。途にて秀治手疵を苦しむ。終にはかなくなり。にけり。然るに八上の城中。光秀が謀計を搦へ。秀治を搦

め捕り。安土へ訴へ誅戮せしと。聞誤りて大に怒り。大賊光秀力を以て攻戦ふ事能はず。偽りの謀計を以て。兄弟を捕へ誅するの條。言語に絶ゆる不道のふるまひ。其儀ならば計ふことありとて。彼人質とて來りたる光秀が老母を。大手の門にて樹木へつりあげ。磔にかけて殺しけるこそ是非なけれ云々。

光秀信長を討ちし旨奏上の事。今日の爲體てんたい。禁廷近く刀刃を振ひし事。其恐れなきにあらず。使者を奉りて天機を伺ふべしとて。妙心寺の使僧に命じ。委細の口上を申し含め。參内をこそいたさせけれ。此時の傳奏難波中納言宗豊卿。光秀が口上を聞かせ給ふに。彼使僧謹んで言上しけるは。今日惟任日向守光秀。本能寺及二條城に於て。信長父子を討取り。軍勢残らず妙心寺へ引退き候旨。光秀參内仕り。天機を伺ひ奉るべく所の所。今日の合戦血をあやし穢衣を恐れ。則妙心寺の役僧。我々を以て奏聞し奉る。光秀が趣意

は。信長武威に誇り民を憐まず。神明をなみし佛意に違ひ。神。社。佛。閣。を滅亡せしむる事。臣が詞を待ずして。四海の内悉くこれを知れり。光秀暫く信長が旗下に屬しあるといへども。三。代。相。恩。の。主。と申すにてもなく云々。當時權勢を諸侯の上に震ひ。惡逆日々に盛なれば。武門の風俗天下の爲めに。光秀今日信長父子を誅し。畢ぬ。伏して望むらくば。臣が志心を鑒み給ひ。四方の征伐を許し給はゞ云々。

光秀將軍宣下の事 此前日四日(六月)午の刻。禁裏勅使として。久我宰相吉道卿。難波中納言宗豐卿。土御門少將道重卿。光秀が館に入嚮まし。此度光秀地子錢免許せしむる條。叡感なし下され。依て將軍宣下賜ふべき由。勅詔の趣き述へ給へば。光秀謹んで忝き由拜受なし奉り。勅使歸還の後。直に參内して恩を謝す。此時一條前關白光基公。御階近く出させ給ひ。惟任日向守。將軍宣下成し

下さるゝ條。即日昇殿をも許され。天顏を拜し奉るべき所。主上此頃御異例にあらせられ。爰に天盃を下し賜はる間。難有頂戴せしむべしとて。五位の殿上人を以て。御盃の土器を下し給ふ。光秀頂戴し。頓て退出したり。

光秀京中の地子錢を免除せし事。偕光秀京中の容體を伺ふに。何となく穩ならず。爰に彼所に集り。議論更に止まざりければ。かくては大志遂がたからんとて。諸氏の心を安んずべき計略を設け。御靈。祇園。北野等の諸社毎に。燈籠料として黄金百兩宛。南禪寺。天龍寺。相國寺。東福寺。建仁寺。萬壽寺。徳大寺。妙心寺等へ黄金二百兩宛捧げ。其他洛中洛外の諸寺諸院へ。盡く祠堂金を夥しく寄附し。三宅式部秀朝を所司代として。京中の地下人に金銀を散じ。且永代地子錢免除せしむる旨沙汰しければ。洛中洛外の商賈は更なり。近郷近村の農民まで。有がたき思ひをなし。皆萬歳を唱へ。悅

ぶ事限なし(六月二日)

夕顔棚の段

「尼ヶ崎」は攝津河邊郡にあり、秀吉部の變を聞きて毛利と和し、軍兵に先立ちて只一騎馳上る途次、尼ヶ崎にて明智の伏勢にあひ寺へ逃げこみて危き所を遁れたりといふ、これ此段趣向の本なり、なほ總解を見よ、

「誰か住家と夕顔」とか

けたり「己がまゝなる軒のつま」源氏物語によりて書

けるなるべし、同書夕顔の巻に「このもかのもとに、あやしうちよるぼひ、むれ

くしからぬ軒のつまごと

に、はひまつはれるを、口惜しの花のちぎりや云々」

「歴々」は身分の立派なるをいふ語、きはだちあらはるゝ意より、來れるなる

夕顔棚の段

詞南無妙法蓮華經くくく。御法の聲も媚し。尼ヶ崎の片

邊り。誰住む家と夕がほも。おのが儘なる軒のつま。あたり近所

の百姓ども。茶碗片手に高咄し。詞なふ婆様。こな様も見た所

が。上方で歴々のお衆そふなが。何の爲に面白ふもない。此在

所へはござつたぞいの。ア、コレく甚作。そりやいやんな。

京の町は武智といふ悪人が。春長様を殺して大騒動。大かた又

下へ下つて居やしやる。久吉殿が戻つて來て。武智と是非に一

合戦なけりや。濟ぬわいのふ。そんなら年寄はうかく。京の

町には居られぬ。とかくあぶなげのない様に。こんな在所へ來

て居るが大できく。時に近付がてら妙見講を勤るとはよい手

廻し。大きな馳走に逢ました。是から隨分心安ふいたしませう。

べし。
「下へくだつて」 是中國

征伐に下りしをいふ、

「妙見講」 妙見は北斗星

の本地にして、妙見尊星王、

又北長菩薩ともいふ、國土

を擁護し、貧窮を救ひ、諸

願を成就せしめ給ふといふ

佛、法華宗のよく信心する

ものと見ゆたり、なほ八陣

守護城北辰尊星の解を見よ

恐くは尼ヶ崎のほとりに、

有名なる妙見あるを取りて

書けるなるべし、

「庭の千草に打つ水も云々」

夏庭の夕景色をいふ、青葉

に風かほるなど、よく發句

によめり、

「れやに咲く花の操」

寸面白し、「初菊」の語咲く

花に應ず、

「花に心を養ふ老女」の

句、よく出來たり、咲く花、

サア〜逝ふと口々に。云たい事をたくしかけ。しやべり廻つ

て歸りける。老母はつどく門送り。庭の千草に打水も。たも

つ葉毎に風かほる。軒を目當にくる人は。武智がねやに咲花の。

操の前は家來を遠ざけ。嫁の初菊伴ふて。窺ふ切戸の庭先に。

花に心を養ふ老女。それと見るより手をつかへ。詞後室様の見

舞として。只今參上致せしと。慇懃に相述る。詞に老女は打笑

詞ヲ、珍らしい嫁女孫嫁。はる〜の道よふこそ〜。去なが

らせがれ光秀。當月二日本能寺にて。主君を害せし無法者。同

じ館に膝ならぶるも。先祖の耻辱身の汚れと。館を捨て此在所

へ。身退きし此婆を。詞見舞とはおこがましい。善にもせよ悪

にもせよ。夫に付が女の道。操の前は武智十兵衛光秀が妻。そ

なたは又孫の十次郎光慶が嫁でないか。生死分らぬ戰場へ。趣

く夫を打捨て。浮世を捨てた姑に。孝行盡すは道が違ふ。詞妻城

初菊にひどく心地す。
「後室」は貴人の寡婦の稱、

「懇懇」は丁寧の意、

「當月二日」光秀が信長

を弑せしは、天正十年六月

二日の朝なり、

「夫につぐが女の道」嫁

しては夫に従ふ、これ婦人

三従の一、

「生死分らぬ戰場へ云々」

老母が凜乎たる氣性見はた

り、

「捨つべきものは弓矢」の

句頗る味ひあり、誰やらの

詠にて見たる心地す、いひ

放したる」の句、弓矢をう

けて味ひあり、

「お宮仕へ」は朝廷に仕

ふるがもつて、貴人に奉

公し、又目上に仕ふるにも

いふ、

「はな香」しぶく」皆

に留つて。留主を守るが肝要ぞや。モウやもめぐらしの樂しみ
には。夕顔棚の下涼。捨べき物は弓矢ぞと。云放したる老女の

一徹。跡は詞もなかりけり。常の氣質とさからはず。詞いか様

後室様のおつしやる通り。此やうに只お一人ござつたら。何も

かも氣さんじで。マア第一はお身の養生。今から私も初菊も。

後室のお傍に居て。飯も焚たり茶も沸し。お宮づかへをせふぞ

いのと。有あふ前垂襦の。上に引しめ茶釜の傍。端香の籠る姑

の。しぶく機嫌を取かねる。娘心に初菊も。マどふ濟む事か

濁り井の。深き奇縁の釣瓶繩。水汲上んと立寄ば。詞コレく

嫁達。シテ孫十次郎は。城に残つて居めさるか。さればでござり

ます。十次郎が願ひには。どふぞけふの軍に。高名手柄があら

はしたいと。父上迄は願ひしかど。ばゞ様のお赦しなきに。出

陣するも本意でなし。母に取次してくれと。くれぐれの願ひ故。

茶の縁の語、

「すむ」濁り井「深き」「釣瓶繩」「水汲み」皆縁の語、味ふべし、

「百八の數珠」數珠の玉

數百八個は、百八煩惱に於たどる、これをくりて稱名すれば、よく煩惱消滅すと、百八煩惱とは、六根六塵に對する煩惱三十六種、過去現世未來を合せて一百八、「蛙飛込む道の邊の云々」

新古今集夏の部に西行「道のべに清水流るゝ柳蔭しげしとてこそ立止まりつれ」より書く、故に「西行もどきの僧一人」といへり蛙飛込むの句はたゞかむらせたるのみ、芭蕉が古池の句を加味せしなど見るは、却つて煩ばし、掬ぶば手にてくむこと、此旅僧の趣向は、秀吉尼が崎の危難に寺へ飛

餘り健氣さ祖母様に。御機嫌の程いかゞぞと。窺ひに参りまし

たと語る内。老母は涙をはらくと流し。詞ヲうるさの嫁が

物語り。主を討たる逆賊の。邪非道の軍の評定。聞がいやさの

此住居。が又孫をほめるではなけれども。非道な倅光秀が子に。

十次郎といふ武士が生れくるとは。是も因縁悔んで返らず。戰

場の事聞たふない。ア、いやく。情なの浮世やと。無量の思

ひ百八の。數珠つまぐつて居たりける。折ふし表へ草鞋がけ。

風呂敷背にいつきせき。蛙飛込む道野邊の。清水むすばん夏の

旅。西行もどきの僧一人。門口に立休らひ。諸國修行の一人旅。

近比申し兼たれど。御宿の報謝に預りたし。押付ながらと云入

る。聲を老母が聞取つて。詞見苦しうござりますれど。お心置な

ふ御一宿。それは千萬忝ない。左様ならば御遠慮なしに。御免

くと上り口。腰打かくれば二人の女。草鞋の紐を解かゝれば。

込み、僧となりて九死を免れし、といへるよりかける事しるし、總解を見よ、
「木納屋」 薪など雜木を入れ置く納屋、

「行水」 かなとほしに、死人の上に行水といひて、いまくしき事なり、常に湯をひくは、湯あみといふべしと見わたれどいかゞ、別記を見よ、

詞ア、勿躰ないく。構ふて下さりますな。旅仕付た坊主の氣さんじ。木納屋の隅でもついごろり。蚊屋も蒲團も入ませぬ。

お心づかひ御無用と。詞半へ表口。人目を忍び只一騎。窺ひ立

聞く武智光秀。心得がたき旅僧と。生垣押分けさし覗き。思はず

見合す母の顔。老母は何か心にうなづき。詞チ、わしとした事が心の付ぬ。コレ御出家様。此板がこひが則ち風呂場。水は幸

ひくんであり。ついばやくともやして。あつい時分じや行水

して。休んで下さりませ。ばゞも跡で相伴しませう。ア、イヤそれには及びませねど。相伴と有は沸しませう。そんなら御免な

されませと。包引さげ氣さんじに。湯殿をさして入にける。味

方の軍卒兩手を突き。詞御子息十次郎光慶様。後室様に御願ひの

筋有と。只今是へ御越と。いふ間程なくしづくと。家來に持

せし鎧櫃。かき入させて打通り。詞コリヤく者共。そち達に

「心の悦び穂に出づる」心の悦びの、顔にあらはれて見ゆるをいふ、含まれたる穂の、あらはれ出づるが如きよりいふ語、大鏡に仲平「花すゝきわれこそ下におもひしか穂に出て人にむすばれにけり」
 「顔は上氣の夏かへで」顔をあかめたるをいふ、夏楓は夏葉の赤き楓をいふなるべし、

用事はない。陣所へ早くとおつ立やり。威儀を正して兩手をつき。詞母様をもつて御願ひ申せし出陣。御聞届け下されなば。武士の本意と十次郎。思ひ込でぞ願ひける。老母は見より機嫌顔ナ、めづらしい十次郎。出陣の願ひとな。悴を見限り此所へ。身退きしに叮嚀な願ひの筋。最前嫁女にくはしう聞ました。とても出陣しやるなら。ばゞが願ひは此初菊。今宵此家で祝言の盃してから門出仕や。何と嫁女嬉しいかと。老の詞に初菊は。飛立ばかり氣もいそぐ。心の悦び穂に出る。顔は上氣の夏楓。色もなまめく斗なり。只黙然と十次郎。けふ初陣に討死と。覺悟極めし此體。お暇乞に参りしと。知せ給はぬ悲しやと。涙呑込み忍び泣。操の前も立上り。ばゞ様の御機嫌の。かはらぬ内にかための盃。詞ヲ、それ。孫も大かた心せき。操は九献の用意しや。十次郎が初陣の。鎧の役は直ぐに花嫁。三國一の悲し

「知らせ給はぬ」 は知り
給はぬの敬語。

「九獻」 は酒の異名、女
官などの詞にて、上品の語
なり。

「鑑の役は直ぐに花嫁」 鑑は妻のきするものと見たり、花嫁をうけて「三國一の悲しみ」とかけり、十次郎が討死の門出なるゆゑにいふ、婚禮に三國一といふうたひあり。

「知らぬ白齒」 調あり。

みと。知らぬ白齒の孫嫁が。手を引つれて三人は。奥の一間へ。
入にけり。

尼ヶ崎の段

尼ヶ崎の段

「残る苔の花一ツ云々」つくねんたる美少年が、思ひに沈める状見るが如し、

「御恩は海山かへがたし」

童子經に「父の恩は山より高く母の恵は海よりも深し、

「まだ祝言の盃を」 有名の句、

「思ひの海」 は思ひの無量なるをいふ、

「初菊が立聞く涙まるび出で」とかけたリ、

「夫の討死遊ばすを云々」これも有名の文句、情たつぶりとしてつや深く歎けり

一間へ入にけり。残る苔の花一ツ。水上かねし風情にて。思案
 投首しほるゝばかり。やうく涙押とぐめ。詞母様にもばゞ様
 にも。是今生の暇乞。此身の願ひ叶ふたれば。思ひ置く事更に
 無し。十八年が其間。御恩は海山代難し。討死するは武士の。
 ならひと思し召分られて。先だつ不孝は免してたべ。詞二ツには
 又初菊殿。まだ祝言の盃を。せぬが互の身の仕合。わしが事は
 思切り。他家へ縁付して下され。討死と聞くならば。さこそ歎
 かん不便やと。孝と戀との思の海。隔つ一間に初菊が。立聞く
 涙轉び出で。わつとばかりに泣出せば。はつと驚き口に手を當
 て。詞ア、コレく。聲が高い初菊殿。扱は様子を。アイ残ら
 ず聞いて居ました。夫の討死遊ばすを。妻が知らないで何とせう。

「いとしい夫が討死の云々」
 此物の具の運搬は手もた
 ゆるかるべし、友人の新調に
 「いそぐ」と門出の服を着
 するいもが笑顔を掠む涙二
 つ三つ「物の具」は具足に
 同じ。
 「緋威」は緋の革又は糸
 にて綴ちたる鎧、うけて鎧
 の袖に降かゝる雨か云々」
 とつづけたり、以下名文な

尼ヶ崎の段

二世も三世も女夫じやと。思ふて居るに情無い。盃せぬが仕合
 とは。餘り聞えぬ光義様。祝言さへも濟まぬ内。討死とは曲が
 無い。わしや何ぼでも殺しはせぬ。思留つて給はれと。縋り歎
 けば。詞アツコレ。此方も武士の娘じやないか。十次郎が討死
 は豫ての覺悟。祖母様に泣顔見せ。若し覺られたら。未來永々
 縁切るぞや。エ、サアとかう云ふ内時刻が延びる。其鎧櫃爰
 へく。アイ。サ、早ふ。時延びる程不覺の元。聞譯無いと呵
 られて。最愛い夫が討死の。首途の物の具付けるのが。甚麼急
 がるゝものぞいのと。泣くく取出す緋緘の。鎧の袖に降懸か
 る。雨か涙の母親は。白木に土器白髮の婆。長柄の鉋子蝶花形。
 首途を祝ふ熨斗昆布。結ぶは親と小手脚當。六具固むる三々九
 度。此世の縁や割こさね。猪首に着なす鉄形の。あたり眩き打
 拵は。爽なりし其骨柄。詞ヲ、適れ武者振勇まし。功名手

り、作者の苦心を見る、注意して味ふべし。

「白木、白髪」 かけたり、

調あり、白木は白木作りの三方。

「銚子蝶花形」 調あり、

蝶花形は、婚禮などの銚子につくる紙の蝶、雌蝶雄蝶あり。

「首出を祝ふ熨斗昆布」 熨斗昆布を祝事に用ふる事は菅原傳授にいへり、又かど

出の祝の事は、軍用記に見わたり、別記を見よ、

「結ぶば親と小(子)手脚當」

とかけ「六具かたむる三三九度」とつゞけたり、味ふべし、六具は胴(鎧の)、小手、脚當、袖(鎧の)、脇楯はいて、脇楯をいふ、

「此世の縁や割小札」といへり、札に割小札と續小札とあり、札とはいはため

柄を見る様な。祝言と出陣を一緒の盃。サア、早う。目出た

い、嫁御寮と。悦ぶ程猶彌増す名残。這樣殿御を持乍ら。是

が別れの盃かと。悲しき隠す笑顔。随分お手柄功名して。切て

今宵は凱陣をと。跡は得云はず咬しはる。胸は八千代の玉椿

散りて果敢なき心根を。察し遣つたる十次郎。包む涙の忍びの

緒。しぼり兼たるばかりなり。哀を爰に吹送くる。風が持て來

る攻太鼓。氣を取直し突立上り。何れもさらばと云捨て。思

切つたる鎧の袖。行方知らずなりにけり。喃悲しやと泣入る初

菊。母も操も顔見合せ。詞ば、様。嫁女。可愛や可憎ら武士を

むざ、殺しに遣りました。ノウ初菊。十次郎が討死の。出陣

とは知乍ら。生中留めて主殺しの。憂死耻を露さうより。健氣

な討死させんため。祝言によそへて盃をさしたのは。暇乞やら

二ツには。心残の無いやうと。思餘つた三々九度。婆が心の切

革にて作れる小き板、これを綴ぢつられて鐵を作る。「猪首に着なす鉄形の」鉄形の兜を、少し仰向け様にかむるをいふ、これ敵を恐れぬ爲めなり、鉄形は兜の廂の上にありて、慈姑の葉の形したる前立、これをつきたるを鉄形の兜といふ。鉄形をうけて「あたりまはゆき」といへり。

「功名手柄を見る様な」
 くいひたり、「こんな殿御を持ちながら」よくをしまたり、

「悲しき隠す笑ひ顔云々」
 いちらしさげなげさ、情の深さ、何ともいはず、

「凱陣」 軍にかちてかへるをいふ、前に解せり、

「跡は得いはずくひしげる、胸は八千代の玉椿」感慨無量、八千代を契る杯はこれ

なさを。推量しやとばかりにて。始めて明す老母の節義。聞く初菊も母親も。一度に挫と伏轉び。前後不覺に泣叫ぶ。襖押明け何氣無う。つかく出づる以前の旅僧。詞コレくかみ様。風呂の湯が沸ました。何方ぞお這入なされませと。云ふに此方は泣顔隠し。詞チ、夫は御苦勞。去乍ら。年寄に新湯は毒。跡は若い女子共。マアお先へ御出家から。いかさま湯の辭義は水とやら。左様ならば御遠慮無し。お先へ參ると立上れば。三人は涙押包み。奥の佛間と湯殿口。入るや月洩る片庇。爰に苜取る眞柴垣。夕顔棚の此方より。現れ出たる武智光秀。必定久吉此内に。忍び居ること究竟一。只一討と氣は張弓。心は矢竹藪垣の。見越の竹をひつそぎ槍。小田の蛙の鳴音をば。止めて敵に覺られじと。差足拔足。窺寄り。聞ゆる物音心得たりと。突込む手練の槍先に。わつと魂ぎる女の泣聲。合點行かずと引出す

別れの杯、張さく胸に萬斛の涙、あはれにもはかなし、八千代の玉椿の語、もと莊子より出づ、しかして椿は散り易きもの（首が落るゆゑ武家などはいみじなり）故に散りてはかなきとつゞけたり、

「思ひきつたる鎧の袖」といへり、決然として戰場へ出立つ状見るが如し、

「心残りのないやうに」老母の慈愛山海無量、

「かみ様」秋草に「賤き者の妻を、人より稱してかみ様といふ事、古とは違へり、古へは貴人の妻を稱して、かみ様といひしなり云々」と見ゆ、

「風呂の湯がわきまました」此風呂の事も、秀吉尼ヶ崎にて、寺院の風呂桶にひそみ、危難のがれたりとい

手負。眞柴にあらで眞實の。母の臯月が七顛八倒。詞ヤアこは
 母人かしたたり。残念至極とばかりにて。さすがの武智も仰
 天し。只茫然たるばかりなり。聲聞付けて駈出る操。初菊諸共
 走出で。喃母様か情無い。此有様は何事と。縋り歎けば目を見
 開き。詞歎くまい歎くまい。内大臣春長といふ。主君を害せし
 武智が一類。恣成果つるは理の當然。系圖正しき我家を。逆賊
 非道の名を汚す。不孝者とも悪人とも。譬方無き人非人。不義
 の富貴は浮へる雲。主君を討つて功名顔。天子將軍に成つた迎
 野末の小屋の非人にも。劣りしとは知らざるか。主に背かず親
 に事へ。仁義忠孝の道さへ立たば。もつそう飯の切米も。百萬
 石に勝るぞや。儕が心只一つで。験は目前是を見よ。武士の命
 を斷つ。刃も多いに此様な。引そぎ竹の猪突槍。主を殺した天
 罰の。報は親にも此通りと。槍の穂先に手を掛けて。抉り苦し

ふよりの趣向なり、總解を見よ。
 「年寄には新湯は毒」新湯はきつくして、からだにさばるゆゑなるべし。
 「湯の辭義は水とやら」辭義して居る中に、水とさむるゆゑにいふ、今なれば「水の辭義は水」ともいふべし。「佛間と湯殿口、入るや月漏る片廂云々」太功記といへば必ず之を誦す、淨瑠璃界に誰か此名文あるを知らざらんや、物すごきまで殺氣を含める光秀が、いとも涼しき夕月をあびて、やさしき夕顏の陰よりあらはれ出づる様、剛柔強弱相照炳して趣向趣味いはん方なく、竹槍を持して忍び寄るより、母人を突とめて仰天するまで、最光眼前に髮髯たるを覺ゆ、語強くして力

む氣丈の手負。妻は涙に咽返り。詞これ見給へ光秀殿。軍の首途に吳々も。お諫申した其時に。思留つて給はらば。恙うした歎は有るまいに。知らぬ事とは云乍ら。現在母御を手に掛けて。殺すと云ふは何事ぞ。切て母御の御最期に。善心に立歸ると。たつた一言聞してたべ。拜むわいのと掌を合し。諫めつ泣いっ一筋に。夫を思ふ怨泣き。操の鏡曇り無き。涙に誠現はせり。光秀は聲荒らげ。詞ヤア猪小才な諫言立。無益の舌の根動すな。遺恨を重ねる小田春長。勿論三代相恩の主君で無く。我諫を用ゐずして。神社佛閣を破却し。惡逆日々に増長すれば。武門の例天下の爲。討取つたるは我器量。武王は殷の紂王を討ち。北條義時は帝を流し奉る。和漢共に無道の君を弑するは。民を息むる英傑の志。女童の知る事ならず。すさり居らうと光秀が。一心變ぜぬ勇氣の顔色。取付く島も無かりけり。折しも聞ゆる

あり、緩急宜しきを得て、呼吸頗る妙。千載不磨の明文といふべし。月もる片廂の句は、不破の關屋より思ひつけるにはあらざるか、「こゝに苜取る眞柴垣」よく書きたり、眞柴久吉を討取らんとすゆゑに苜取ると書く、
 「究竟一」は此上なきよき機をいふ、
 「只一討と氣は張弓」とかげ、「心は矢竹數垣の云々」とつづけたる手際、感服の外なし、語強くするとし、「小田の蛙の鳴く音をば云々」語沈みてものすこし且深き用心を見る、
 「聞ゆる物音心得たり云々」語急にしてはげし、
 「玉ぎる」はわつと叫ぶ聲、魂消より轉ぜしか、
 「母のまつきか七轉八倒」

陣太鼓。耳を貫く金鼓の響。あはやと見遣る表口。數ヶ所の手傷に血は瀧津瀬。刀を杖によろぼひく。立歸つたる武智が一子。庭先に大息つき。詞親人は在するやと。云ふも苦しき斷末魔。見るに驚く母親より。娘は傍に走寄り。喃痛はしや十次郎様。祖母様といひお前まで。此有様は情無い。お心確に持つたべ。やいのくくと取着いて。介抱如才泣くばかり。光秀故と聲荒らげ。詞ヤア不覺なり十次郎。仔細は何と。様子は奈何に。具に語れと呼はれば。はつと心を取直し。詞親人の指圖に任せ。手勢すぐつて三千餘騎。濱手の方に陣所を固め。今や歸國と相待つ所に。敵は夫とも白浪の。櫓を押切つて陸路に漕付け。詞追々都へ馳登る。眞柴の軍勢ごさんなれと。関を作つて味方の軍兵。縦横無盡に確立つれば。不意を討れて敵は敗亡。狼狽騒ぐを追立て追詰め。爰をせんとと戦ふ中。後の方より大

此光秀に母を突かしたる趣向、頗るたくみなり、これ光秀丹波攻めの時、其母を人質として、波多野兄弟と和を結び、兄弟心をゆるして、「己が陣へ来たれるを、捕へて安土に送りしかば、信長之を殺せり、波多野の臣等怒つて、光秀の母を嶽に處せしゆゑ、世光秀を憎みて、其母を殺せりといへるより書く、委しくは總解を見よ、

「流石の武智も仰天し」其状見るが如し、

「茫然」ほんやり、

「歎くまいく云々」有名の句、因果を説き非道ないましめ、人道を論ず所、一點の曇なき、凜乎たる氣性の、紙面に溢るゝを見る、聖賢の遺書人臣の道を説く亦これに外ならず、

音上。眞柴筑前守久吉の家臣。加藤清正是に在り。逆賊武智が小童ども。目に物見せて呉れんずと。云ふより早く太刀拔翳し。四角八面に斬立られ。瞬く間に味方の軍卒。残らず討死仕り。無念乍らも只一騎。立歸つて候と。息繼敢ず物語れば。光秀怒の髮逆立ち。詞ヤア云甲斐無き味方の奴原。シテ四方天田島頭は。さん候。四方天は。目指すは久吉一人と、昨朝よりの一騎。駈。亂軍なれば生死の程も。慥にそれと承はらず。親人の御身の上。心に懸り候ふ故。未練にも敵を切抜け。是迄落延び歸りしぞや。此處に御座あつては危しく。一時も早く本國へ。引取り給へ。サ早くくと。深傷を屈せず爺親を。氣遣ふ孫の孝行心。聞くに老母は堰兼ねて。アレ彼を聞きや嫁女。詞其身の手傷は苦にもせず。極悪人の悴奴を。大切に思ふ孫が孝心。詞ヤイ光秀。子は不便には無いが。可愛とは思はぬかやい。儕が

「内大臣春長といふ云々」

本能寺の段の總解を見よ、

「不義の富貴は浮べる雲」

論語述而篇に「不義而富且貴、於我如浮雲」これより出でたる語、

「もつそう飯の切米」

最も

もかるきもの扶持をいふ

足輕などにあてむふもつそ

う飯といふあり、切米は足

輕などの扶持の稱、金錢に

かへて渡すもあり、此語よく

利げり、

「これ見給へ光秀殿云々」

これまたさばりとして有名

の文句、夫を思ふ切なる貞

心よくあらはれたり、「せめて

母御の御最期に」の句、

またなくあはれなり、

「操の鏡墨なき」

よくい

ひたり、涙に誠あらはせり」

思ふて及ばぬ女子の誠は涙

よく用ふる句なれど、味ひ

心こころ只ただ一つで。いとし可愛かわいの初孫うらまを。忠ちゆうと義心ぎしんに健氣けんきなる。討死うちじ

でもさす事ことか。逆賊ぎやくさく無道むだうの名なを汚けがし。殺ころすは何なんの因果いんぐわぞと。せ

くり苦くるしき老おいの身みの。聲聞こゑき付けて十次郎じじちろう。詞ことばヤア爾なんなら祖母様おばさま

には。御生害遊ごしやうがいあそばしたか。今生こんじやうのお暇乞いとまごひ。今一度いまどお顔かほが見みたけ

れど。最もう目めが見みえぬ。父上ちやうへ母様ははさま初菊殿はつぎくどの。名残なごり惜をしやと手てを執と

りて。妹脊いもせの別わかれ愛着あいぢやくの。道みちに引ひかるゝ可憐いせらしさ。母ははは涙なみだに正體無しやうたいな

く。討死うちじするも武士ぶしの。例ならひと云いへど情無なさけない。訓十八年くんじゅうはちねんの春秋はるあきを。

刃やいばの中なに人ひとと成なり。何時いつ樂たのしみの隙ひまも無なう。弓矢ゆみやの道みちに日ひを委ゆたね。

今朝けさの首途かどに其時そのときにも。母様ははさま今日けふの初陣はつぜんに。適あはれ功名こうめい手柄てがらして。

父上ちやうへや祖母様おばさまに。譽ほめらるゝのが樂たのしみと。につと笑わらふた其顔そのかほか。

わしや幻まほろしにちら付ついて。得忘えわすれねと口説くどき立て。口説くどき立たつれば初はつ

菊ぎくも、ほんに思おもへば此身程このみほど。果敢はかな無ない者ものが世よに在あらうか。解とけ

て逢あふ夜の後朝きねぐも。長ながき名残なごりの許嫁いひなづけ。二世せを結むすぶの枕まくらさへ。交か

殊にふかし、
 「ヤア猪小才な誠言だて云々」 語氣頗る激す、光秀の氣質を寫し得て妙、
 「三代相恩の主君」 此語は繪本大閤記に見ゆる、光秀奏上の語を其まゝ取りしなり、總解を見よ、三代事ふれば其風重し、故にこれよりうちまかせて、譜代風願の臣などいへり、
 「神社佛閣を破却し」 此れも奏上の語なり、總解を見よ、
 「武王は殷の紂王を討つ」 紂王は支那古代の暴君、周の武王討ちて之を滅す、
 「北條義時は帝を流し奉る」 後鳥羽上皇鎌倉の專横を憤り、之を滅さんとしたまふ、義時子泰時等をして、兵を率ひて西上せしめ、官軍を破つて、後鳥羽、土御門、順

尼ヶ崎の段

す間も無う此様な。悲しい別をする事は。マ甚麼した罪か情無い。私も一緒に殺してたべ。死たいわいなと身を悶え。互に手に手を執交し。名殘涙の暇乞。見るに目も暮れ心消え。母も老母も聲を上げ。わつと許に取亂せば。追勇氣の光秀も。親の慈悲心子故の闇。輪廻の繼に緊付られ。耐兼ねてはらくく。雨か涙の汐境。浪立騒ぐ如くなり。又も聞きゆる人馬の物音。矢叫の聲喧く。手に取る如く聞ゆれば。光秀聞くより突立上り。詞アノ物音は敵か味方か。勝利奈何にと庭先の。勘木の松ヶ枝踏占めく攀登り。眠下の村手を屹度見下し。和田の御崎の弓手より。追々續く數多の兵船。間近く立つたる魚鱗の備。千生瓢の馬標は。疑も無き眞柴久吉。風を喰つて此家を迹延び。手勢引具し光秀を。討取る術と覺えたりと。云ふより早く閑りと飛降り。草履摺の猿面冠者。イデー挫ぎと身繕ひ。勢込んで駈出

徳の上皇を流し奉る、(帝は廢し奉りしなり)これを承久の亂といふ、山陽詩あり、別記に載す、

「取付く島も」は取つく所もなきをいふ、難船などにたとへていふ語なるべし、

「耳を貫く金鼓の響」いさまし、ものすこし、

「斷末竟」は死際をいふ前に解せり、

「瓶」は初菊、歎き妙「如才泣く斗り」かけ調の紋切形、

「親人の指圖に任せ云々」此注進の物かたり、語頗るいさましく、調頗るよし、これ光秀が尼が崎にて、秀吉を待伏せしめたるより、思ひつきて作れるなり、總解を見よ、

「敗亡」は癡憫、敗憫、

せば。詞ヤア〜たけち みつひで しほら武智光秀暫く待て。眞柴筑前守久吉對面せん
とよほ呼はつて。三衣えに代る陣羽織ざんはおり。小手こて脚當あても優美いうびの骨柄こつがら。悠然ゆうぜん
として立出たちいづれば。光秀みつひで見るより仰天ぎやうてんし。駟戻かきもとつてはつたと睨にら
み。詞ヤア珍めづらし、眞柴ましば久吉ひさきち。武智たけち十兵衛じゅうべゑ光秀みつひでが。此世このよの引導いんどう
渡わたして呉くれん。觀念くわんねんせよと詰寄つめよる光秀みつひで。中なかを隔へだつる老鳥らうじやうの。子こ
故ゆゑに手傷てきやう屈くつせぬ老女らうじよ。喃久ののみき吉様よしまま。詞我わが子こに代かはる此母このははも。天命てんめい遁のが
れぬ引ひそぎ槍やり。作りし罪つみの萬分まんぶ一。亡ほろぶる事ことも有あらうかと。思おも
餘あまつた此最期このさいご。武智たけちが母ははは逆磔さかきり刑けいに。懸かつて無慘むざんの死しを遂とげし
と。末世まつせの記録きこくに残のこしてたべ。夫それもやつぱり悴奴せがれめが。可愛かわいさ故ゆゑ
の罪亡つみほろはし。詞ことばうるさの娑婆しゃはに残のこらんより。孫まごと一緒いっしょに死出しいで三途さんず。
ハア私わたしもお供致ともいたします。孰いづれも去いらば。おさらばと。未練みれん殘のこさ
ぬ武士ぶしの。花はなも實みも有ある此世このよの別わかれ。今いまぞ果敢はかなくなりにけり。
操みさをの前まへも初菊はつぎくも。更さらに詞ことばも出いでばこそ。あへなき骸からを押動おしうごかし。

など種々の字を書き、あきれうたへること、
 「せんど」は先途と書く
 肝心かなめといふ程の意、
 「こわつば」は若輩を罵る語、こわらは(小童)の轉訛なる由、前にいへり、
 「加藤清正」はいつも強し、此尼が崎の危難には、清正一番にかけつけて助けしなり、總解を見よ、
 「四角八面」縦横無盡に對す、同意に見てよし、
 「髪逆立ち」は激怒のさま、委しくは前に解せり、
 「四方天田島頭」は四王天但馬守、明智方第一の勇士にして、尼が崎伏勢の大將なり、秀吉を追ふて寺院に入り、さむしかれて出づる所に、加藤清正の馳來るにあひ、組討ちて首を取ら

天にあらがれ地に伏して。歎く心ぞ可憐しき。哀を餘所に眞柴久吉。光秀に打向ひ。詞俱に天を戴かぬ亡君の吊戦。今此所で討取つては。義有つて勇を失ふ道理。諸國の武士に久吉が。軍功を知らん爲。時日に移さず山崎にて。勝負の雌雄を決すべし。ガ奈何にく。ヲ、道の久吉能く云ふたり。吾も惟任將軍と。勅許を受けし身の本懐。一先都に立歸り。京洛中の者どもへ。地子を免すも母への追善。互の運は天王山。洞ヶ崎に陣所をかまへ。只一戦にかけ崩さん。首を洗つて観念せよ。ホ、ハ、ハ、何さく。たとへ項羽が勇あるとも。我れ又孫吳が秘術をふるひ。千變萬化にかけなやまし。勝鬨上ぐるはまたくうなり。と久吉が。詞はゆるがぬ大磐石。忽ち廻り小栗栖の。土に哀を殘すとは。知らず知られぬ敵味方。にらみ別るゝ二人の勇者。二世をかための別れの涙。かゝれとしてしもうば玉の。其黒髪をあ

る、故にかく作れるなり、

總解を見よ、

「あれ聞きや嫁女其身の云

々」此老母の詞には、如

何なる光秀もこたへざるを

得ず、「おのれが心只一つ

でいとしかあいの初孫を云

々」の句、最もよく最も利けり、

老母は老母らしく、孫を愛し義を思ふ歎きをなせり、以下三人の歎き分けに注意して、其妙を知るべし、

「妹春の別れ愛着の云々」 頗るあはれなり、

「日をゆたれ」 にも通ぜぬにはあられど、身をゆたれと書く方普通なり、且前の道をうけて、調あるやうにおもはる、されど十八年と

今朝とにたいしては、日とするもよし、

「十八年の春秋を云々」 有名のさばり文句、母は母らしく歎けり「につこと笑ふた其顔が、わしやまほろしにちらついて」の句、身にし

みて覺ゆ、戀軍犯に「門出の時にふり返り、につこと笑ふた面さしが、あるかとおもへば云々」

「ぼんに思へば云々」 妻は妻らしく歎けり、さてもほかなき戀路、

「解けて逢ふ夜のきぬくも云々」 解けて逢ふ夜もなく、許嫁もこゝに長き名残となるといふ意、長きに無きをかけたり、きぬくは同

妾せし男女が、朝各己が衣を着るをいふ、故に後朝など書けり、きぬくの別れば名残惜しきもの、

「互に手に手をとるかはし」 愛着の別れ、情の纏綿たるを見る「見るに目もくれ心消ぬ」あはれく、

「親の慈悲心子ゆゑの聞」 こゝに至つて鬼神も泣く「輪廻のきつなにしめつけられ」の句最も利けり、未だかくの如き語を見ず、

「矢叫び」 戦の矢合に發する聲、

「勘木の松少枝」 光秀の氣性をあらはす、

「和田の御崎の弓手より云々」 此物見の語、つよくなしく、調頗るよし、和田の御崎は、兵庫港の西南に突出せる岬、

「魚鱗」 は陳の備へ方、唐太宗の文に「躬擐甲冑、親中矢石、夕對魚鱗之陣、朝臨鶴翼之圍」

「千生瓢の馬標」 これ秀吉稻葉山の城（日吉丸稚櫻の總解を見よ）を攻陥せし時、瓢箪を合印に用ひしかば、信長よりそを馬印とするこ

へなくも。

切拂ふたる尼が崎。

菩提の種と夕顔の。

軒にきらめ

く千生瓢箪。

駒の嘶き迎ひの軍卒。

見渡す沖は中國より。

追々

入來る數萬の兵船。

威風りんく凜然たる。

眞柴が武名假名書

に。

うつつ繪本の大功記と。

末の世までも殘しけり。

未の世までも殘しけり。

となゆるされたるなりと、別記を見よ、
「風を喰つて」は俗に「かんづいて」といふ程の意、
「草履つかみの楳面冠者」秀吉(久吉)はもと信長の草履取にして、顔猿に似たりと、冠者は元服せし若者の稱なれど、こゝは大やうに見るべし、

「三衣」は僧の衣、「陣羽織」は具足などの上に着るもの、いづれも前に解せり、

「此世の引導渡してくれん」語頗るつよし、

「中を隔つる老鳥の子故に云々」よく書きたり老に籠をよせたるか、

「武智が母は逆隣刑に云々」うまくたくみたり、末世の記録にかくのこれり、總解を見よ、

「うるさの装束に殘らんより」うけて「私もお供いたしまする」こゝなくあはれなり、

「花も實もある」は外面内心打そろひて、美しく誠あるをほむる詞、なほ後にいふべし、

「俱に天を戴かざる亡君の吊單」君父の仇は俱に天を戴かずといへるより書く、もと禮記より出でたること、前にいへり、

「山崎」は山城國乙訓郡にあり、北に天王山を負ふ、天正十年六月十三日、秀吉光秀と戦ひし處、

「勝負の雌雄」は勝ち負けの意、「馬から落馬」のきらひあり、

「惟任將軍」光秀に將軍宣下の事に總解を見よ、惟任は信長よりうけたる姓なり、

「地子」京洛中へ地子錢をゆるせし事、總解を見よ、

「互の運は天王山云々」かく秘密にすべき陣取りを、さす敵將の前で公言するもをかし、天王山は山崎の北に接ゆる山、山崎の合戦に、此山も勝敗の運命を決する要地なりしゆゑ、互に其占領を争ひしなり、

「洞が峠」は山崎の合戦に、筒井順慶の陣せし所、順慶兩端を抱きて動かざりしかば、戦後秀吉其行動の卑屈なるを責む、よりて後世日和見の順慶の名を得たり、又筒井流ともいふ、初め光秀もこゝに陣せしなり、

「項羽」は沛公(後に漢の高祖)と共に秦を滅し、有名な威陽宮を焼きし人、力山を抜き氣世を蓋ひし、武勇の將なり、

「孫吳」は孫子吳子とて、支那戰國時代の有名な兵家、其兵術の書は、後世の重なる所なり、

「詞はゆるむめ大磐石云々」其詞の如くなりしより書く「怒ち廻り小栗栖の土にあはれを云々」とかけたり、光秀敗後小栗栖にて殺されたるをいふ、三日太平記の總解を見よ、(廻り小車などいへるより、小栗栖とかけたるなり)

〔二人〕二世 相應す、

〔別れの涙〕 をうけて「かゝれとてしも云々」とつゞけたり、僧正遍照の詠「たらちめはかゝれとてしもうば玉の我が黒髪をなですやありけん」より書く、

〔切拂ふたる尼が崎、菩提の種と夕顔の、軒にきらめく千生瓢箪、駒の嘶き〕 前をうけ、か傳詞と縁の語とによりて、書ける名句、解く

は煩はしきゆゑ、よろしく味ひ給ふべし、「夕顔の軒に」の句は源氏物語夕顔の巻より書けるにてもあるか「きらめく千生瓢箪」は金瓢の馬標

〔瓢箪から駒が出る〕といふ俚諺あり、かたなく面白し、

〔中國〕 は山陽山陰兩道の稱、

〔假名がきにうつす繪本の大功記〕 味ひあり、これ題號、しかして繪本太閤記といへる書あり、これを本として此淨瑠璃は作れるなり、

淨瑠璃通解第五篇別記

笠印 武用辨略に「高勝の鑲は鉢兜のの後背にあり。これに總角を結ぶゆゑに。高總の鑲とも書けり。或は笠印の鑲といふも此事なり。東鑑九に。頼朝奥州征伐を催す時。下河邊の庄司行平。仰に依つて御甲を調べ持參す。御覽する處に。冑の後に笠標をつけたり。仰に曰く。此簡袖に附くる。尋常の儀か如何。行平申していふ。これ曩祖秀郷朝臣の佳例なり。其上兵の本意は先登なり。先登に進む時。敵は名諷を以て其仁を知り。吾家は後より。此簡を見て。必ず其先登の由を知るべきものなり云々。貞丈雜記に「笠じるしといふは。元來冑に付くる驗なるゆゑ。笠じるしといひたるなり。後には笠じるしといふは。すべて物のしるしの事にいひならはして。袖につくるをも笠じるしといひたるなり。太平記に笠印なくては。同士討もありぬべし。白絹一尺づゝ切りて。風といふ文字を書きて。鎧の袖にぞつけさせけるとあり。又寐覺記に。衣裳は富貴の笠印なりとあり。いづれも皆たゞしるしの事にいひたるなり。」

朱を奪ふ紫 論語より出でたる事。通解にいへり。昔の紫は朱にちかゝりしなり。俚言集覽に「宋の仁宗の頃より。紫を染むるに紫草を多く用ひて。油紫是本邦染むる所の紫な

り又鶏冠草を紫色といふをもてしるべし。唐土にても淳熙の頃よりは紫色古に復して紅紫と呼びたるよしなり。近世たま〜染むる所の紅紫なるべし。朱を奪ふといふもむべならずやと見ゆ。真淵翁が遣唐使の四位が緋衣を着せしを彼の書に紫衣と記せる由いへるも見たり。

木食 眞俗佛事編に今の世五穀を斷つを木食といふ。しかるに木食の文字は經軌の中に未考之。宋高僧傳第八。釋智封傳曰。倏辭出蒲津安峰山。禁足十年。木食澗飮といへり。愚按するに。木食の字の出處これを取らんか。これも亦斷食斷鹽の如く。淨身堅心の行なり。しかりといへども。眞言行者尊の法に依つて。思む食物あり。木食なりとて一槩清淨なりとすべからず。大元帥の軌には。禁食蘿蔔。多羅の菩薩軌には。禁食茄子蘿蔔蓮根。一字頂輪王經には。菌子及油を禁せり。如斯類々擧ぐるに。違あらず。知らざるべからずと見ゆ。

行脚 祖庭事苑に。行脚者。謂遠離鄉曲。脚行天下。脫情捐累。尋訪師友。求法證悟也。所以學無常師。徧歷爲尙。善財南求常啼。東請。蓋先聖之求法也。永嘉所謂。游江海。涉山川。尋師訪道。爲參禪。豈不然邪。中阿含帝釋偈云。我正恭敬。彼能出非家者。自在游諸方。不計其行止。往則無所求。匪無爲爲樂。又高僧慧乘事祖強爲師。年十六。啓強曰。離家千里。猶名在家沙門。請遠游。

都鄙以廣見聞強迺從之。夫是行脚之利豈不博哉」と見ゆ。

抖擻 佛教字典に「頭陀。抖擻又淘汰と譯す。修治又淘汰といふ。煩惱の塵垢を抖擻するを以てなり。修行と同義とす。新譯には杜多といふ。比丘は憤鬧ひやうを離れ飾好を樂まず。心に貪求を絶し諸の憍慢無く。清淨に自活して以て无上正眞の道を求むべし。故に十二種の行あり。一には住阿蘭若處。二には常乞食。三には次第乞食。四には一食。五には節量食。六には過中不飲漿。七には著弊衲衣。八には但三衣。九には塚間座。十には樹下座。十一には露地座。十二には但座不臥なりといへり」と見ゆ。

得度 波羅密を度。彼岸又度と譯するは。生死海を度りて。泥洹の岸に到るの意なり。故に轉じて。佛道に入り出家授戒するに用ひたり。即ち菩提心を發するを謂ふなり。今登壇授戒剃髮染衣。皆得度といへり。又一轉して。官制出家を許す者に牒を賜ふ。之れを受けたるを度者と稱し。牒を度牒といふ。故に其牒を受くるを得度といへり。法華經科註に「俱發菩提心。故云得度也」と見ゆ。

箸折り鏡の兄弟 幽遠隨筆に「箸をりかゝみの兄弟といへる俗語も。故なきにあらず。万葉に。田邊福麻呂哀弟死去歌

父母がなしのまにくはしむかふ

とあり。父母かうみたるまゝの兄弟をいふなり。なしは生の字なり。はしむかふは兄弟なり。箸は一前に二つあるにたとへ。さし向ふ兄弟といふなり。」

龍の腮の玉 莊子列禦寇人有見宋王者。錫車十乘。以其十乘驕。穉莊子。莊子曰。河上有家貧特緯蕭而食者。其子沒於淵。得千金之珠。其父謂其子曰。取石來鍛之。夫千金之珠。必在九重之淵。而驪龍頷下。子能得珠者。必遭其睡也。使驪龍而寤。子尙奚微之有哉。今宋國之深。非直九重之淵也。宋王之猛。非直驪龍也。子能得車者。必遭其睡也。使宋王而寤。子爲齏粉矣。

鬚切膝丸 平家物語劔の卷に、抑日本に多く劔あり。所謂寶劔。十柄劔。鬚切膝丸。小瓠こがらすなり。鬚切膝丸と申す二の劔の由來を尋ぬるに。人王五十六代の帝をば清和天皇と申しける。皇子餘多まします中にも。第六の皇子をば貞純親王。御子經基六孫王。其嫡子多田滿仲上野守。始めて姓を源氏と賜ひ。天下を守護すべきの由勅宣を蒙りてける。滿仲宣ひけるは。天下を守るべき者は。良き太刀を持たでは如何せん。とて。鐵を集め鍛冶を召し。太刀を作らせて見給ふに。心に就く太刀なかりけり。如何すべきと思はれける處に。或る者申す様。筑前國三笠郡土山といふ處にこそ。異朝より鐵の細工渡りて。數年候ふなれ。彼れを召されべく候やらんと申しければ。則ち彼れを都に召し上せ。太刀を多く作らせて見給へども。一も心につかず。空しく下るべきにぞありける。彼鍛冶思ひけるは。

我れ筑紫よりはるくと。召さるゝ甲斐なくまかり下りなば。細工の名を失はんこそ心うけれ。昔より今に至るまで。佛神に申す事の叶へばこそ。祈禱といふ事もあるならめとて。八幡宮へ詣でつゝ。歸命頂禮八幡大菩薩。願くば意に稱ふ劔。作り出させて與へ給へ。さやうならば大菩薩の御器と罷り成るべしと。願書を進らせて。至誠心にぞ祈りける。七日に滿する夜の御示現に曰く。汝が申す所不便なり。疾く罷り出で。六十日の間鐵をきたふて作れ。最上の劔二つ與ふべしと。分明に夢想ありけるが。細工悦びて社頭を出でにけり。其後よく金をわかしたひ撰びて六十日に作りたり。實に最上の劔二つを作り出す。長さ二尺七寸。彼漢の高祖が三尺の劔とも謂つべし。滿仲大に悦びて。二の劔にて有罪の者を斬らせて見給ふに。一の劔は鬚を加へて斬りければ。鬚切と名づけたり。一をは膝を加へて切りければ。膝丸とぞ號しける。滿仲鬚切膝丸二の劔を持ちて。天下を守護し給ひけるに。塵かぬ草木もなかりけり。

されど膝丸の事を。保元物語に。此膝丸と申すは。牛千頭が膝の皮を取り威したりければ。牛の精や入りけん。常に現じて主を嫌ひけるなり。されば塵などを拂はんとて。も。精進潔齋して取出しけるとなり。かゝる希代の重寶を。敵となる子の許へ遣しける。親の心ぞあはれなると見え。鎧の事とせり。

行水 かなゝほしに死人の上に行水と申すなり。常に湯をひくぞ。湯あみなどいふべき時に。行水といふはいま〜しき事とかやと見ゆ。されど宇治拾遺に「今宵は御行水もめされて云々」などあれば。いと古くより。湯あみを。行水といへるなるべし。

首出かぞの祝 軍用記に「出陣の時に。一に打砲熨斗。二に勝栗。三に昆布。如是祝ふなり。うちち。ちち。よろこ。こぶ。といふ心なり。右喰様並に酌の次第。酒のやう流々により相替る。一偏ならず。先如此の祝は主殿の内にて。南へ向つていはひ給ふなり。大將物の具をよろうて。床机に敷皮をかけ。白毛を下へなして腰をかけ。白毛の所をふまへて着座あるべし。御酌陪膳の人も。皆鎧を着て仕るべし。何もあとへしさる事を忌む。左右のわきへは向ふべし。又右へ廻る事を忌む。必ず左へ廻りて立つべし。膝をつく事なし。つくばひて仕るべし。肴喰やう。先出陣の時は。打砲をとりて左の手に持ち。ほそき方よりふとき方へ口をつけて。ふとき所を少しくひきりて。上の盃を取あげ。酒を三度入れさせて吞みて。其盃は打砲の前邊に置くべし。次にかち栗の真中にあるを取りてくひかきて。中の盃にて酒三度入させ飲みて。其盃を前の盃の上に置くべし。さて次に昆布のあるを取りて。兩の端をきりて。中をくひきりて。下の盃にて。三度酒を入れさせて吞みて。其盃を本の所へ置くべし。喰ひたる残りのくひかけの肴は。膳の左のすみの邊に置くべし。酒を盃に

入れやうは、そゝと二度入れて、三度目には多く入るべし。酒ぎらひなる人には、呑殘さぬやうに少し入るべし。いつもそと一度入れたらば、くはへて二度まるらすべし。以上三度三盃にて、三三九度なり。酌くはへ共にし、さるべからず。此祝は大將一人に參るなり。相伴はなし。」

北條義時三上皇を流し奉る。これを承久の亂といふ。山陽詩あり、子行留父、父行留子。十九萬人即日起。大男海道小男越。硬弓快馬直指闕。君好戰、獻戰士。君猶不飽觀。更二十萬坐在此。吁哉乎誰非王臣子。

千生瓢の馬標 繪本太閤記に、こゝに於て、美濃一國悉く織田に屬し、信長喜悅限りなく、功有る者は悉く恩賞を與へ、就中木下藤吉、濃州征伐に於て莫大の功ありとて、美濃の中に於て數多領地を下し賜り、今度瓢箪の合印面白き趣向、取わけ味方の吉事なれば、此後例として馬印に用ふべしと仰渡されければ、藤吉面目を施し、後瓢箪を馬印にし、戦功ある毎に、小き瓢を一ツづゝ増しけるにぞ千生瓢箪とて、其名天下に普く高し。日吉丸稚櫻總解參照。

淨瑠璃通解第五編終

明治三十七年四月二十日印刷
明治三十七年四月廿三日發行

淨瑠璃通解第五編

定價金參拾五錢

著者 山本信吉

發行者 大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 水谷景長
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所 博進社
東京市小石川區久堅町百〇八番地
會社



發兌元 東京日本橋本町博文館

大和田建樹君著

能のしをり

(全部六冊洋上綴中判一冊二百餘頁)

一の巻

- 總說
- 形、嬾子と仕舞
- 急、中入と物著
- 下羽、來序、亂序、あしらひ出し、早破、祝詞、舞、舞動、
- 翔、祈、立廻、イロへ、幕、面、裝束、作物、小道具、替の
- 形、嬾子と仕舞
- 八島
- 東北
- 安宅
- 廣刈
- 安達ヶ原
- 船辨慶
- 飛騨
- 船
- 海人
- 鞍馬
- 蜘蛛
- 紅葉狩
- 鳥飼子折
- 望月
- 殺産鳥
- 殺知鳥
- 善界
- 鶴飼

二の巻

- 三輪
- 田村
- 竹生島
- 小鍛冶
- 養老
- 橋辨慶
- 賀茂
- 西王母
- 葛城
- 花月
- 鳳山
- 項少羽
- 龍田
- 國佛
- 大佛供養
- 斑女
- 羽法師
- 八雲
- 安宅
- 廣刈
- 安達ヶ原
- 船辨慶
- 飛騨
- 船
- 海人
- 鞍馬
- 蜘蛛
- 紅葉狩
- 鳥飼子折
- 望月
- 殺産鳥
- 殺知鳥
- 善界
- 鶴飼

三の巻

- 養老
- 橋辨慶
- 賀茂
- 西王母
- 葛城
- 花月
- 鳳山
- 項少羽
- 龍田
- 國佛
- 大佛供養
- 斑女
- 羽法師
- 八雲
- 安宅
- 廣刈
- 安達ヶ原
- 船辨慶
- 飛騨
- 船
- 海人
- 鞍馬
- 蜘蛛
- 紅葉狩
- 鳥飼子折
- 望月
- 殺産鳥
- 殺知鳥
- 善界
- 鶴飼

四の巻

- 養老
- 橋辨慶
- 賀茂
- 西王母
- 葛城
- 花月
- 鳳山
- 項少羽
- 龍田
- 國佛
- 大佛供養
- 斑女
- 羽法師
- 八雲
- 安宅
- 廣刈
- 安達ヶ原
- 船辨慶
- 飛騨
- 船
- 海人
- 鞍馬
- 蜘蛛
- 紅葉狩
- 鳥飼子折
- 望月
- 殺産鳥
- 殺知鳥
- 善界
- 鶴飼

五の巻

- 養老
- 橋辨慶
- 賀茂
- 西王母
- 葛城
- 花月
- 鳳山
- 項少羽
- 龍田
- 國佛
- 大佛供養
- 斑女
- 羽法師
- 八雲
- 安宅
- 廣刈
- 安達ヶ原
- 船辨慶
- 飛騨
- 船
- 海人
- 鞍馬
- 蜘蛛
- 紅葉狩
- 鳥飼子折
- 望月
- 殺産鳥
- 殺知鳥
- 善界
- 鶴飼

六の巻

- 養老
- 橋辨慶
- 賀茂
- 西王母
- 葛城
- 花月
- 鳳山
- 項少羽
- 龍田
- 國佛
- 大佛供養
- 斑女
- 羽法師
- 八雲
- 安宅
- 廣刈
- 安達ヶ原
- 船辨慶
- 飛騨
- 船
- 海人
- 鞍馬
- 蜘蛛
- 紅葉狩
- 鳥飼子折
- 望月
- 殺産鳥
- 殺知鳥
- 善界
- 鶴飼

文藝雜著

大和田建樹君著

日本歌謠類聚 全三冊脊皮上綴 正價二冊拾錢

我國開闢以來二千五百年間の歌謠を載せて本書にあり、時代を以て古今を分ち、種類に依て雅俗を別にし、一讀人をして照々其沿革を詳にせしむ、大和田先生が之を輯むるに幾星霜の勞苦を費されしかば、請ふ一本を纏て實驗あらんことを

長井金升君校訂

俗曲大全

全一冊背皮上綴 正價六拾錢

- 目次
- 大津繪節の部
- 常盤津節の部
- 端唄の部
- 小唄の部
- 流唄の部
- 中節の部
- 八節の部
- 團唄の部
- 長唄の部
- 大津繪節の部
- 流唄の部
- 新内節の部
- 清元節の部
- 河東節の部
- 都節の部
- 逸節の部
- 歌座の部

聲曲自在

彩色木版寫真銅版挿入 全一冊洋並綴 正價貳拾五錢

琴曲獨稽古

彩色木版寫真銅版挿入 全一冊洋並綴 正價貳拾五錢

都々逸一千題

全一冊紙皮上綴 正價參拾五錢

風雅文庫

全部六冊小判洋裝紙皮金文字入上製約三百頁 正價二冊貳拾錢 郵稅一冊

- 第一編 ●都々逸の棗 ●第四編 ●狂句の棗
- 第二編 ●冠句の棗 ●第五編 ●狂體句の棗
- 第三編 ●狂歌の棗 ●第六編 ●雜俳の棗

竹本攝津大椽

全一冊和裝上綴 正價四拾錢

攝津大椽が少年より身を起して藝人社會に投じ、千辛萬苦今日の大名を博したる其經歷、彼が平常の行狀を傳にして一面より見れば實細大漏さす一面より見れば大椽の傳にして一面より見れば實消長より文樂座の沿革を窺ふは本書に限るべし

淨瑠璃集

水谷不倒君校訂

義太夫百番

全一册洋布上綴正價壹拾貳錢圓

小判六七六頁郵稅拾貳

近松時代淨瑠璃

全一册背皮上綴正價六拾錢

中判一〇四頁郵稅拾六

錢錢

凱陣八島國性爺文武性爺

賀古教信七喜冠平大磯虎雜物語當流小栗判官石孟

浦島年代記松風村雨東帶鑑島當流小栗判官石孟

雪女五枚羽子板

近松世話淨瑠璃

全一册背皮上綴正價六拾錢

中判一〇四頁郵稅拾六

會根崎心中

生玉心中

紙屋治兵衛天の綱島

紀伊國屋小春

遊鯉出世瀧徳

堀川波

日本武振袖

最明寺百人以上

延明寺百人以上

水谷不倒君校訂

續近松淨瑠璃集

全一册背皮上綴正價六拾錢

中判一〇九〇頁郵稅拾六

百鳥會折我

水谷不倒君校訂

義太夫百番

近松時代淨瑠璃

凱陣八島國性爺文武性爺

賀古教信七喜冠平大磯虎雜物語當流小栗判官石孟

浦島年代記松風村雨東帶鑑島當流小栗判官石孟

雪女五枚羽子板

近松世話淨瑠璃

全一册背皮上綴正價六拾錢

中判一〇四頁郵稅拾六

會根崎心中

生玉心中

紙屋治兵衛天の綱島

紀伊國屋小春

遊鯉出世瀧徳

堀川波

日本武振袖

最明寺百人以上

延明寺百人以上

水谷不倒君校訂

續近松淨瑠璃集

全一册背皮上綴正價六拾錢

中判一〇九〇頁郵稅拾六

百鳥會折我

水谷不倒君校訂

義太夫百番

近松時代淨瑠璃

凱陣八島國性爺文武性爺

賀古教信七喜冠平大磯虎雜物語當流小栗判官石孟

浦島年代記松風村雨東帶鑑島當流小栗判官石孟

雪女五枚羽子板

近松世話淨瑠璃

全一册背皮上綴正價六拾錢

中判一〇四頁郵稅拾六

會根崎心中

生玉心中

紙屋治兵衛天の綱島

紀伊國屋小春

遊鯉出世瀧徳

堀川波

日本武振袖

最明寺百人以上

延明寺百人以上

水谷不倒君校訂

續近松淨瑠璃集

全一册背皮上綴正價六拾錢

中判一〇九〇頁郵稅拾六

